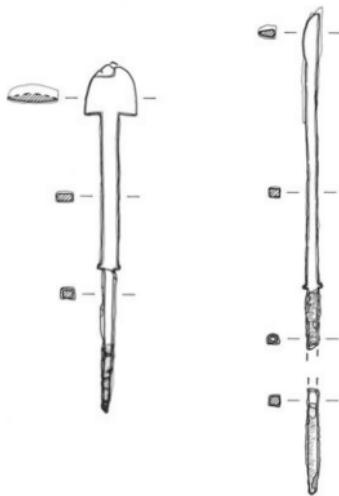


ひら いし かみ に ごう ふん
平 石 上 2 号 墳
いし ふね いけ こ ふん ぐん
石 舟 池 古 墳 群



2007年8月

高松市教育委員会



平石上2号墳 横穴式石室 玄室 第1面



平石上2号墳出土 鉄製品・練玉

例　　言

1 本書は、香川県三郎池土地改良区による平石上地区区画整理事業に伴う事前調査として実施された埋蔵文化財（平石上 2 号墳）発掘調査および高松市三谷土地改良区によるため池等整備事業（小規模）石舟池計画に伴う事前調査として実施された埋蔵文化財（石舟池古墳群）発掘調査に関する報告書である。

2 発掘調査地および調査期間、調査面積は次のとおりである。

【平石上 2 号墳】

調査地：高松市三谷町2099番地

調査期間および面積：確認調査 昭和61年5月19日～6月10日 150m²

発掘調査 昭和61年6月20日～8月8日 155m²

【石舟池古墳群】

調査地：高松市三谷町2708番地

調査期間および調査対象面積

平成元年度	1号石棺立会調査	平成元年11月14日～12月6日	10m ²
平成2年度	1号墳確認調査	平成3年1月5日～1月31日	100m ²
平成3年度	2～10号墳発掘調査	平成3年11月6日～12月18日	220m ²
平成4年度	4・11号墳確認調査	平成4年11月5日～12月4日	150m ²

3 各古墳の調査は、次の者があたった。

【平石上 2 号墳】

文化振興課主任主事（当時）藤井雄三、同非常勤嘱託（当時）江木麗子、末光甲正（調査委託）

【石舟池古墳群】

文化振興課文化財専門員山本英之・川畑聰・山元敏裕、同非常勤嘱託中西克也、末光甲正（調査委託）

4 整理作業は、末光甲正が担当し、川畑聰、山元敏裕、中西克也、文化振興課非常勤嘱託（当時）西澤昌平が補佐した。

5 本報告書の執筆・編集は、第Ⅱ・Ⅲ部を末光が執筆し、川畑が加除するとともに遺物報告を書き加えた。第Ⅰ・Ⅳ部は川畑が執筆した。さらに第Ⅱ・Ⅲ部の鉄製品の報告を西澤が執筆した。編集作業は、すべて川畑が担当した。

6 発掘調査から整理作業、報告書を刊行するにあたって、下記の関係機関ならびに方々から御教示および御協力を得た。記して謝意を表すものである。（五十音順、敬称略）

香川県教育委員会、香川県三郎池土地改良区、香川県自然科学館、高松市三谷土地改良区、

高松市立三溪小学校、高松市産業部土地改良課、高松市産業部農林水産課、徳島文理大学香川校、

人久保徹也、片桐孝浩、國木健司、佐々木翼、乗松真也

7 挿図として、国土地理院発行1/25,000地形図「高松南部」および高松市都市計画図1/2,500「三谷1」「三谷2」を一部改変して使用した。

8 本報告の平石上 2 号墳の高度値は海拔高を表す。一方、石舟池古墳群の高度値は工事用の任意の高度値（堤防上を39.78m）であり、海拔高より約1.5m低い値を示している。正確な補正が不可能のため、ここでは調査時のものと補正後のものを併用している。方位（矢印がないものは上方が北）は、第1・2・5・21・56・57・59図が座標北を、それ以外は磁北を示す。

9 出上遺物ならびに図面・写真類は、本市教育委員会において保管している。

目 次

第Ⅰ部 地理的・歴史的環境

第1節 地理的環境	1
第2節 歴史的環境	1

第Ⅱ部 平石上2号墳

第1章 調査の経緯と経過	
第1節 調査の経緯	3
第2節 調査の経過	3
第2章 平石上地区における確認調査	
第1節 平石上1号墳と平石上塚群の試掘調査	3
第2節 平石上4号塚の試掘調査	6
第3節 平石上古墳群の分布調査	6
第3章 平石上2号墳の発掘調査	
第1節 立地	8
第2節 墳丘	8
第3節 石室	11
第4節 遺物出土状況	15
第5節 遺物	15
第3章 まとめ	
第1節 平石上2号墳の概要	24
第2節 平石上古墳群について	24

第Ⅲ部 石舟池古墳群

第1章 調査の経緯と経過	
第1節 調査の経緯	25
第2節 調査の経過	25
第2章 調査の成果	
第1節 遺跡の概要	27
第2節 石舟池1号石棺	27
第3節 石舟池1号墳	28
第4節 石舟池2号墳	30
第5節 石舟池3号墳	36
第6節 石舟池4号墳	38
第7節 石舟池5号墳	40
第8節 石舟池6号墳	41
第9節 石舟池7号墳	41
第10節 石舟池8号墳	42
第11節 石舟池9号墳	42
第12節 石舟池10号墳	42
第13節 石舟池11号墳	43
第14節 積管付近の調査	44
第15節 三谷石舟古墳周辺部の調査	46
第3章 まとめ	
第1節 石舟池古墳群の概要	48
第2節 石舟池古墳群出土の円筒埴輪について	48
第3節 三谷石舟古墳周辺調査の概要	48
第4節 石舟池3号墳の横穴式石室移築について	49

第Ⅳ部 総括

第1章 高松平野における片袖式横穴式石室について	51
第2章 三谷町周辺の表探遺物について	
第1節 石舟池周辺の表探遺物	55
第2節 三谷三郎池遺跡の表探遺物	56

第Ⅰ部 地理的・歴史的環境

第1節 地理的環境

瀬戸内海に北面した香川県のほぼ中央に、低い山塊に囲まれた高松平野がある。高松平野は西側が南から五色台へと続く山地、東側が立石山山地によって取り囲まれた東西20km、南北16kmの範囲に及んでいる。さらに、この平野は、讃岐山脈から流下し、北へ流れて瀬戸内海へ注ぐ香東川をはじめ本津川・春日川・新川などによって形成された扇状地である。

さて、このうち春日川の支流である古川は、高松平野の南に立ち並ぶ実相寺山、日妻山、日山周辺の溜池を水源としている。中でも、東西に小日山と雨山を從えた日山は、円錐形の山容をなすコニードに近いが、火山による溶岩を山頂部に冠したピュート地形である。

第2節 歴史的環境

周辺で最古の遺跡は雨山南遺跡で、旧石器時代後期に属する。瀬戸内技法による翼状剥片やチップ等の石器製作を示す資料が多量に出土している。

縄文時代の遺跡は明確でなく、三谷三郎池等において石蹴が表採されているのにとどまる。

弥生時代の遺跡でもっとも古いのは、北野遺跡と光尊寺山遺跡である。北野遺跡では、旧河道線辺と微高地上で前期末の土坑・溝等が、光尊寺山遺跡では小丘陵裾より前期末の土器包含層が確認されている。中期末から後期初頭に属する中山田遺跡は、丘陵上に位置する高地性集落で、焼失した痕跡を残す竪穴住居跡や倉庫跡などが検出されるとともに、分銅形土器製品が出土している。通谷遺跡では、中期末の土器が出土するとともに、後期後半の土器棺墓が7基確認されている。弥生後期後半～古墳前期になると、上林遺跡、北野遺跡、鎌野西遺跡、三谷中原遺跡と遺跡数が増加している。

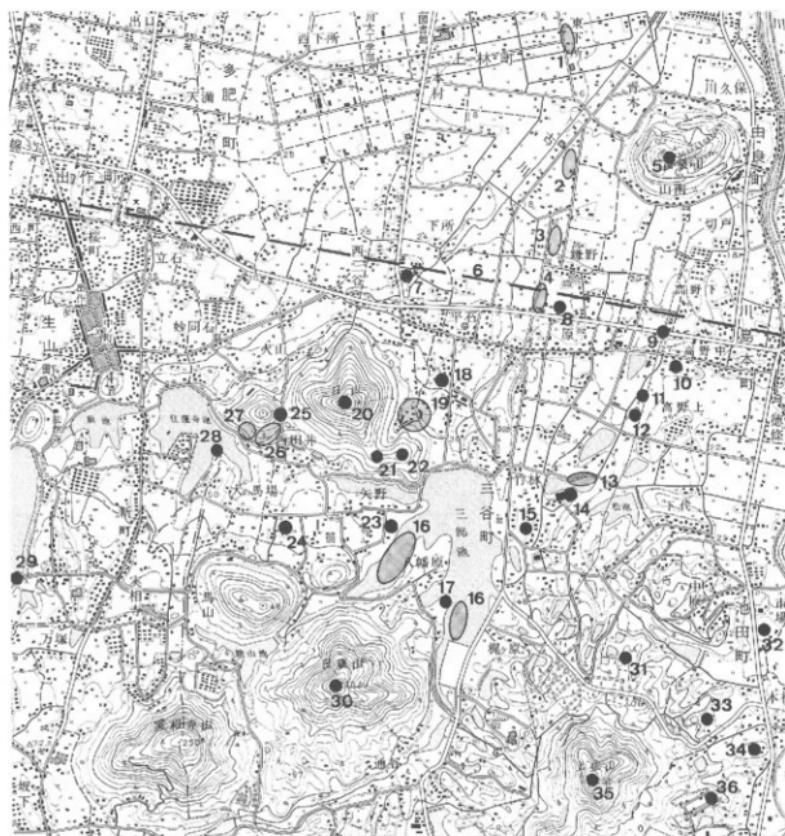
次の古墳時代では、集落跡は不明だが、古墳が数多く確認されている。前期に属する小日山1号墳は、日山から派生する丘陵頂部に立地し、全長約31mを測る前方後円墳で、塊石積みの竪穴式石室が露出している。この1号墳の東側丘陵頂部にある小日山2号墳は、直徑約16mを測る円墳で、同じ前期に属する可能性がある。中期初頭に属する三谷石舟古墳は、全長88mの大型前方後円墳で、高松平野南部における盟主墳である。刳式石棺が後円部に露出している。次いで盟主墳として築造されたのが、削平された高野丸山古墳である。直徑約42mを測る大型円墳で、幅10～15mの周濠が巡っている。わずかな墳丘しか残っていない高野丸1号墳からは、中期末の円筒埴輪片が採集されている。平石上1号墳も、内部主体は不明だが、後期前半に属する可能性がある。後期後半以降になると、この地域においても横穴式石室を主体部にもつ古墳が多く築造されるようになる。最大規模の横穴式石室をもつものは矢野面古墳で、全長9.1mの両袖式である。調査された古墳では、中山田3・4号墳、石舟池古墳群、平石上2・3号墳、万塚古墳があるが、どの古墳も基底石付近しか残っていなかった。なお、未調査だが上佐山東麓古墳では石室が開口しており、加摩羅神社古墳では石が散乱している。雨山南古墳群や周辺に分布する北山古墳群と住蓮寺池古墳群も、同じ後期後半～終末期に属する群集墳である。ほかに、池田合子神社古墳、光尊寺山東・西古墳があるが、時期・内容ともに実態はよく分かっていない。古墳以外では、古墳時代中期に操業していた三谷三郎池西岸窯跡の初期須恵器窯が有名である。

飛鳥～奈良時代になると、この地域において古代の官道である南海道が通っており、駅の一つ「三谿駅」が設置されたと推定されている。本市教委の調査でも、時期不明だが道路状造構を確認している。時期が下って三谷中原遺跡では、平安時代に属する南海道や条里地割に関する溝が確認されている。高野魔寺では、転用された礎石が残されており、奈良～平安時代の軒瓦が出土している。

鎌倉～室町時代といった中世では、上林遺跡で掘立柱建物跡や溝が検出されている。光尊寺山遺跡は、室町時代に光尊寺が建っていたと伝えられており、室町時代頃の遺物が表採されている。室町時代から始まる戦国期の動乱によって、この地域でも数多くの城館が造られている。三谷氏の上佐山城跡・三谷城跡、鎌野氏の鎌野城跡、由良氏の由良山城跡などがある。しかしながら、上佐長宗我部氏の讃岐侵攻や農臣秀

吉の四国平定により、各氏族はその勢力を失い、城館も廃絶している。

江戸時代では、この地城は、生駒家4代による讃岐一国支配の後、松平家11代による高松藩領となり、明治維新を迎えるのである。



- | | | | | |
|-------------|-----------------|---------------------|-------------|--------------|
| 1 上林遺跡 | 2 北野遺跡 | 3 錣野西遺跡 | 4 三谷中原遺跡 | 5 由良山城跡 |
| 6 推定南海道 | 7 加摩羅神社古墳 | 8 錣野城跡 | 9 高野丸山古墳 | 10 高野庵寺 |
| 11 高野南1号墳 | 12 高野南2号墳 | 13 石舟池古墳群 | 14 三谷石舟古墳 | 15 三谷城跡 |
| 16 三谷三郎池遺跡 | 17 三郎池西岸窓跡 | 18 平石上1号墳 | 19 平石上2~6号墳 | 20 日山山頂古墳・絆塚 |
| 21 小日山1号墳 | 22 小日山2号墳 | 23 矢野面古墳 | 24 犬の馬場古墳 | 25 北山古墳群 |
| 26 雨山南古墳群 | 27 雨山南遺跡 | 28 住蓮寺池1・2号墳 | 29 万塚古墳 | |
| 30 日妻山古墳・絆塚 | 31 通谷遺跡 | 32 光尊寺山遺跡・光尊寺山東・西古墳 | 33 上佐山東麓古墳 | |
| 34 池田合子神社古墳 | 35 上佐山城跡(王佐山城跡) | 36 中山田遺跡・中山田3・4号墳 | | |

第1図 周辺主要遺跡位置図 (縮尺1/25,000)

第Ⅱ部 平石上2号墳

第1章 調査の経緯と経過

第1節 調査の経緯

高松市の南郊で、コニーデ型の山谷が目立つ山の山麓一帯は、不整形な山畑が階段状に連なり、現在の機械化された農業には適さない状況であった。このため、香川県三郎池土地改良区では、効率的な農業経営の実現と生活道路の確保を目指すため、国や自治体の補助を受けて、山東麓で区画整理事業を実施することとなった。工事該当区域は3.4haに及び、昭和61年度下半期から開始された。

一方、予定地内に塚が存在することから、土地改良区から高松市教育委員会に文化財調査が依頼された。本市教委では分布調査を実施し、予定地内に所在する塚4基と予定地に隣接する古墳1基を確認した。そこで、土地改良区から遺跡発見届が香川県教委に提出され、工事計画について協議を行なうことになった。その結果、2基の塚は保存されるが、他の2基については工事によって破壊されることが明らかとなった。さらに、塚の全てについて地下遺構が存在する可能性があり、工事によって破壊を受けることが想定されたため、工事前に確認調査（試掘調査）を実施することで合意した。

第2節 調査の経過

試掘調査は、昭和61（1986）年5月19日から6月10日に実施した。地下遺構の有無を確認するために、塚と古墳の周間に試掘トレーンチを設定した。試掘面積は約150m²に及んだ。この調査により、平石上2・3号塚とした塚は、間槻による残地地形であると判明した。一方、地元での聞き取り調査により設定した平石上1号塚東側トレーンチにおいて、直列する3個以上の石材が検出され、横穴式石室が埋没している可能性が考慮された。

また、試掘調査と並行して、周辺部における分布調査を実施したところ、数基の古墳が存在することを把握できた。そこで、これら古墳を総称して「平石上古墳群」と呼称することになった。

さて、試掘調査の結果を受けて、本市教育委員会と土地改良区において再度協議を実施したところ、検出した横穴式石室へ工事の影響が及ぶことは避けないとのことから、記録保存を目的とした発掘調査を実施することで合意した。また、平石上4号塚についても、塚本体にトレーンチ調査を実施することで合意し、再度の試掘調査を実施したものである。これら調査は、昭和61年6月20日から8月8日にかけて実施した。

第2章 平石上地区における確認調査

第1節 平石上1号墳と平石上塚群の試掘調査（第2図）

【平石上1号墳】

平石王子権現神社が祀られている小丘陵は、山から東北東へのびる尾根の先端に位置し、標高は約34mを測る。この小丘陵が平石上1号墳である。本殿が鎮座している不整形の円形の高まりを古墳とした場合、直径約24mの円墳となる。ただし、西にある集会場敷地の平面形が四角形を呈していることから、前方部を削平された西向きの前方後円墳である可能性があり、この場合は全長約55mとなる。工事が古墳想定範囲に及ばなかったが、墳丘崩れに周濠等の遺構が存在する可能性が考えられたことから、推定前方部西隣接地および後円部北隣接地の水田に試掘トレーンチを設定した。西隣接地のトレーンチは東西方向に、北隣接地のトレーンチは北西～南東方向にのびる形で設定した。その結果、遺構・遺物とも確認できなかった。このため、平石上1号墳は周濠をもたないことが明らかになるとともに、前方後円墳である可能性は低くなかったと考えられる。今後は墳丘部分の調査が必要である。

【平石上1号塚】

平石上1号塚は、近世以降の墓標群が立つ墓地であり、そのためか一辺約10mを測る四角形の低い高まりが認められる。高まりの南縁辺に設定した東西方向のトレンチでは、後述する平石上2号墳と同種である石材の散布が認められ、横穴式石室が埋没している可能性が推測できた。この1号塚については、原状保存されることとなったため発掘調査は行わず、後に「平石上5号墳」と改称した。

【平石上2号塚】

平石上2号塚は、小さな石祠を安置した小規模なもので、塚を挟む形で南北方向にトレンチを設定した。その結果、遺構・遺物とも確認できなかったことから、埋蔵文化財包蔵地でないと判断した。

【平石上3号塚】

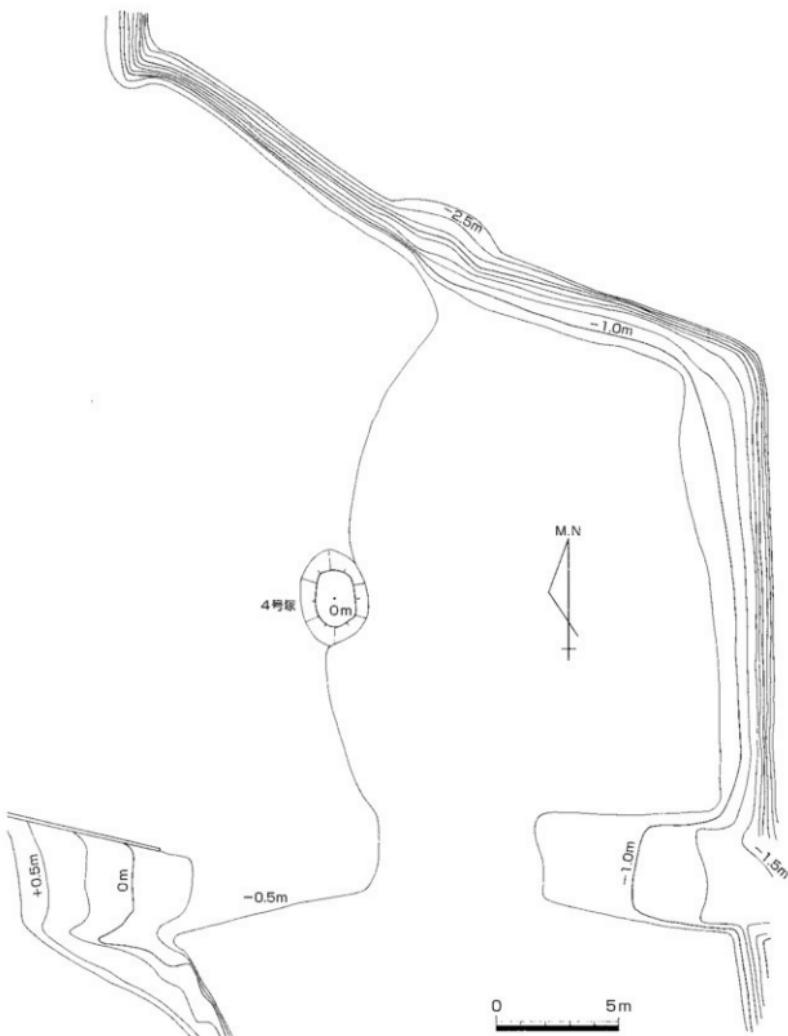
平石上3号塚も、小規模なものであった。この塚を挟む形で、東西方向にトレンチを設定した。その結果、遺構・遺物とも確認できなかったことから、埋蔵文化財包蔵地でないと判断した。

【平石上4号塚】

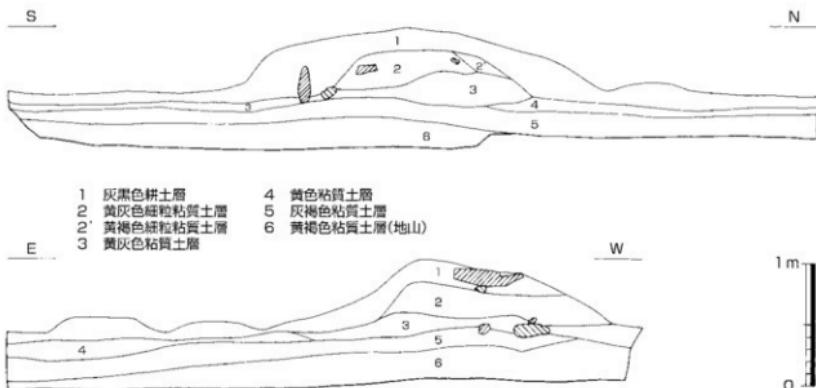
平石上4号塚は、南北約4m、東西約3m、高さ約50cmの規模をもち、不整な楕円形の平面プランをもつものであった。この塚から東および北方向へのびるトレンチを設定し、トレンチがL字形を呈するようにした。調査の結果、遺構・遺物とも確認できなかったが、規模が他の塚と比べ大きいことから、改めて塚本体にトレンチ調査を実施することになった。



第2図 平石上地区における確認調査 位置図（縮尺1/2,500）



第3図 平石上4号塚 地形測量図（縮尺1/200）



第4図 平石上4号塚 断面図（縮尺1/40）

【平石上1号塚の東側隣接地】

先の平石上1号塚の東側にある水田については、地元の聞き取り調査によって石材が埋没しているとの情報を得ていた。そのため、この水田にトレンチ調査を実施することになった。東西方向のトレンチを設定したところ、直列する3個以上の石材が検出され、横穴式石室が埋没している可能性が考慮された。現状保存が困難なことから、記録保存を目的とした発掘調査を実施し、当初は小字名をとって「垂木山（たるきやま）古墳」と呼称し、後に「平石上2号墳」と改称した。

第2節 平石上4号塚の試掘調査（第3・4図）

平石上4号塚は、先述のとおり南北約4m、東西約3m、高さ約50cmを測る不整な楕円形の規模をもち、封土に比較的大形の扁平な石材を包含していたことから、石室をもつ古墳である可能性があった。ただし、周辺部のトレンチ調査では遺構・遺物とも検出されなかつたことから、封土および縁辺を4分割するトレンチを設定した。掘削した結果、遺構・遺物とも確認できず、断面土層からも版築等の古墳を示す特徴が認められなかつたことから、埋蔵文化財包蔵地でないと判断した。ただし、扁平な石材を包含することから、周辺に古墳が存在していた可能性も否定はできない。

第3節 平石上古墳群の分布調査（第5図）

平石上1号墳と平石上塚群の試掘調査と並行して、周辺部における分布調査を実施したところ、数基の古墳が存在することを確認し、これら古墳を総称して「平石上古墳群」と呼称している。本節では、これら古墳について、順に概略を報告するものである。

平石上1号墳は、確認調査前の分布調査で、4基の塚とともに確認された古墳である。他の古墳と少し離れて最も北に位置している。詳細は、第1節で報告したとおりであるが、主体部等が知られていないため年代は不詳である。しかしながら、比較的高い墳丘をもつことや、大型の円墳もしくは前方後円墳の可能性、須恵器が表採されていることを考慮すると、古墳時代後期前半もしくは後半の大型横穴式石室をもつ古墳である可能性がある。

平石上2号墳については、確認調査で発見した横穴式石室墳である。詳細については、本報告書のとお

りである。日山から東へのびる小さな尾根の先端付近に立地している。

平石上3号墳は、日山に連なる小日山から北にのびる丘陵上に立地している。平成11年1月に民間土地分譲に伴う確認調査が実施され、ほぼ南北向きに開口する横穴式石室の基底石とともに、周溝が確認された（山4200）。その結果、直径約13m、高さ2.2m以上の円墳で、石室規模は玄室長約3.4m、玄室幅約1.8mを測ることが明らかになった。石室は、左の袖石が失われているが、右片袖式の可能性がある。周溝から須恵器甕等が出土しており、墳丘や石室の規模・状況等から、古墳時代後期後半のものと考えられる。なお、3号墳は現状保存されることになったため、発掘調査は実施していない。

平石上4号墳は、日山から東へのびる丘陵斜面に立地している。安山岩の板石を包含し、低平で小さな墳丘をもっている。詳細は不明である。

平石上5号墳は、当初、平石上1号塚と呼称していた。確認調査の結果、平石上2号墳に使用された石材と同質の両輝性安山岩片が検出されたため、横穴式石室が埋没している可能性がある。

平石上6号墳は、3号墳調査時に発見されたもので、日山に連なる小日山から北東にのびる丘陵上に立地している。周溝を背後にめぐらした直径約12mの円墳で、比較的低い墳丘をもつ。



第5図 平石上古墳群 分布図 (縮尺1/2,500)

第3章 平石上2号墳の発掘調査

第1節 立地 (第6図)

平石上2号墳は、三谷三郎池が築造された谷に向かって、日山から東へのびる小尾根の先端に位置する。同様な尾根は北側と南側にも幾筋か見られ、それら尾根上に数基の古墳が築造され、平石上古墳群が形成されている。なかでも最も北端に位置する平石上1号墳は、眺望にめぐまれているが、2号墳の位置する尾根は北側への眺望にめぐまれていない。また、東側については、三谷三郎池の東岸を形成している更新世段丘が谷を挟んで前面に広がっている。

地形を細かく観察すると、平石上2号墳が位置する尾根先端の最高所は、約10m四方の不整な四角形で東に突出した畠になっている。この尾根と四角形の畠地に斜行する形で、平石上2号墳の横穴式石室が構築されていた。

地権者によれば、下段の土地に高さを揃えて広い平坦地にしようとしたが、「大形の石が埋まっていたので断念した。」とのことである。この「大形の石」こそ、一部は当初から畠地外縁の斜面に露出していた石材であり、石室羨道部の基底石であった。

2号墳の石室が埋没していた畠と、それに接する南側下段の畠および北側に延びる狭長な畠の三者は約1mの標高差があるが、それらの外側をめぐる北・東・南側の畠とはさらに約1m50cm以上の標高差がある。このことは、やや急傾斜な尾根の先端に平石上2号墳が築造されたことを示している。

第2節 墳丘 (第6・7図)

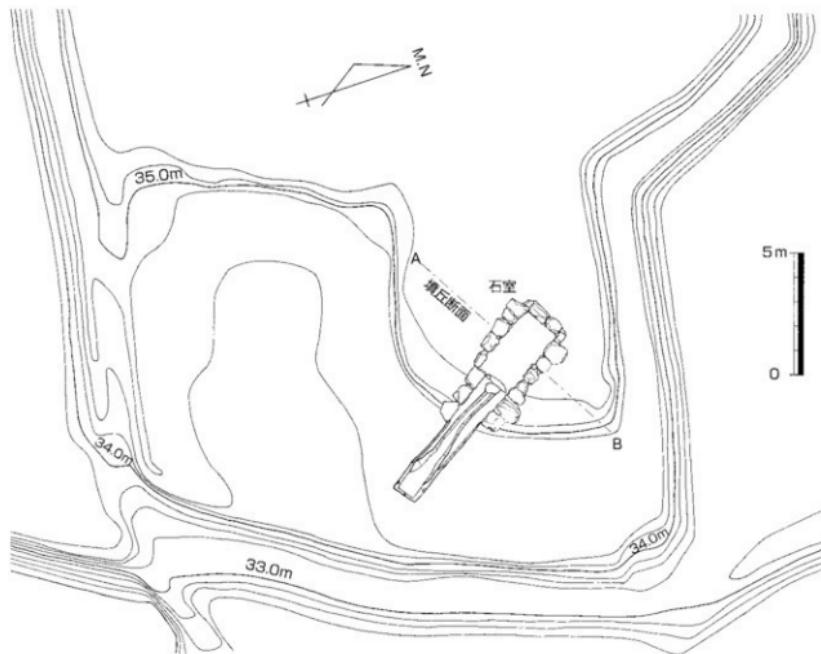
墳丘は、後世の改変により原形が失われておらず、尾根先端部に不整形を呈する畠の一区画としてのみ認識できる状態であった。尾根先端部とくに下段の畠地は、ほぼ長方形で東西約15m、南北約20mを測り、標高は約345mである。この尾根先端部の北側に、約10m四方に削平された不整形の張り出しが、平石上2号墳の墳丘が残存したものである。標高は約35.5mを測る。残存している墳丘高は、上記の標高差で0.75~1mである。

現在の地形は不整形であるが、調査においても墳丘範囲を示す周溝等の遺構が確認できなかったことから、墳丘の平面プランは不明である。また、石室主軸方位が方形の地形とは斜めの位置にあることから、地形から方墳であったと判断することはできない。横穴式石室と地形との位置、墳丘の残存部分の範囲、羨道部の残存長等から考慮して、一般的な横穴式石室墳と仮定すれば、玄室中央を中心に直径15m前後の円墳であった可能性が指摘できる。

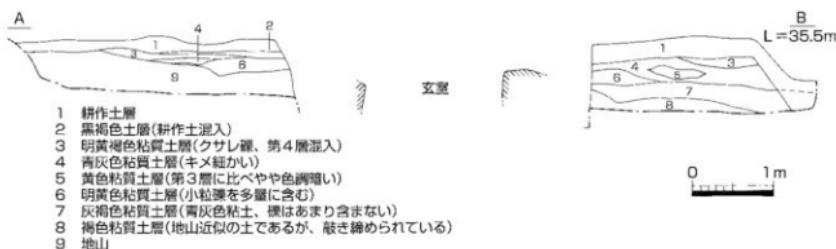
さて、発掘調査においては、玄室中央において石室主軸と直交する方向で墳丘を断ち割り、計9層の上層を確認している。第7図が十層図で、第1・2層は後世の堆積層、第3~8層は墳丘封土、第9層が地山である。さらに、山側（西側）では耕作上層直下で地山を検出したが、谷側（東側）では90cm削削しても地山に到達できなかった。第8層より下は未確認であるが、すぐに地山が検出されるものと推測される。

墳丘封土の各土層は、厚さ20~30cmを測り、通常見られる版築の土層と比較するとやや粗放な工法といえる。しかしながら、掘削作業が非常に困難を極めたことからも、墳丘封土としては充分な用を足していたと想定される。それは、これら上層が周辺の日山や由良山で産出される安山岩 (~ 3500 BC, 山島1950) に由来したもので、極細砂質もしくは粘土質の混在するL層であるため、敲き締めると硬化し、乾燥すると充分な固結度や強度を得られるからである。

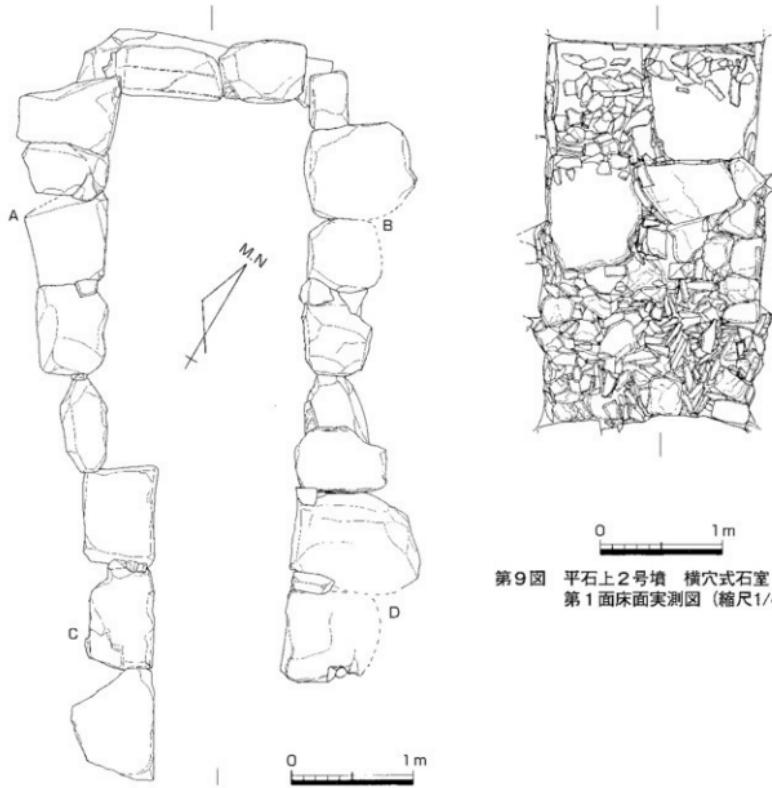
次に墳丘構築過程について検討したい。東から西に傾斜している斜面において、地山を露出させる作業がなされ、墳丘範囲と墓壙の位置が決められたと推測される。墓壙掘削に際しては、山側（東側）で地山を約50cm削っているが、谷側（西側）ではそのままである。墳丘築造と石室構築は、相関的に実施されたものと推測され、多数次にわたって墳丘への盛土や圧延と敲き締めがなされたようである。



第6図 平石上2号墳 地形測量図（縮尺1/200）

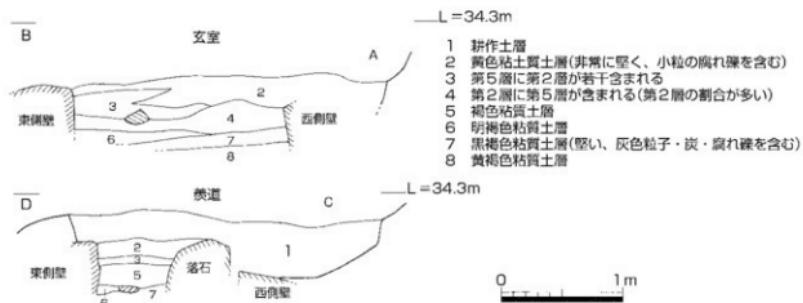


第7図 平石上2号墳 墳丘断面図（縮尺1/60）



第8図 平石上2号墳 横穴式石室上面図(縮尺1/40)

第9図 平石上2号墳 横穴式石室
第1面床面実測図(縮尺1/40)



第10図 平石上2号墳 横穴式石室埋土土層図(縮尺1/40)

第3節 石室（第8～11図）

横穴式石室は、上部の大半が消失しており、基底石もしくはその上の1段のみが残っているだけであり、羨道の先端部も失われている状況であった。そのため、石室の全体像を把握することは不可能である。遺存していた横穴式石室は、右片袖式の平面プランをもち、主軸方位は磁北から30°西に振っており、南に開口していた。

石室の全長は5.60m以上を測る。玄室は、全長3.03m、幅は奥壁側で1.77m、中間で1.85m、玄門側で1.75mを測り、わずかに胴張りの長方形を呈する。羨道は、長さ2.57m以上、羨道幅は玄門側で1.25m、中間で1.20mを測る。また、玄室床面からみた壁面の残存高は55～64cmを測り、2段目の石材が若干内側にせり出していることから、壁面は持送りされていた可能性がある。

石室に使用された石材は、両輝性安山岩で古墳が立地している日山で産出するもので、軟質であることから切り出しや加工等が比較的容易であったと考えられる。また、この石材は平坦面をもつものが多いことから、平坦面を石室内側に向けて石材が配置されていた。このため、平石上2号墳の石室は、通常見られる横穴式石室に比べ整った形態を呈している。

玄室奥壁の最下段にある石材は、使用された石材中で最も大きく、1石のみで奥壁の幅を充たしている。側壁基底石の石材は、東側（左側壁）で3石、西側（右側壁）で4石からなり、東側に比べて西側の石材はやや小振りである。また、両壁とも、奥壁から玄門に向かって次第に小さくなっていく傾向がある。右側壁の袖石は、精美な方形の大きな石材が使用されており、平面プランで見ると明瞭な袖部を形成している。袖石に対応する左側壁では、特別な石材・構築方法は認められない。

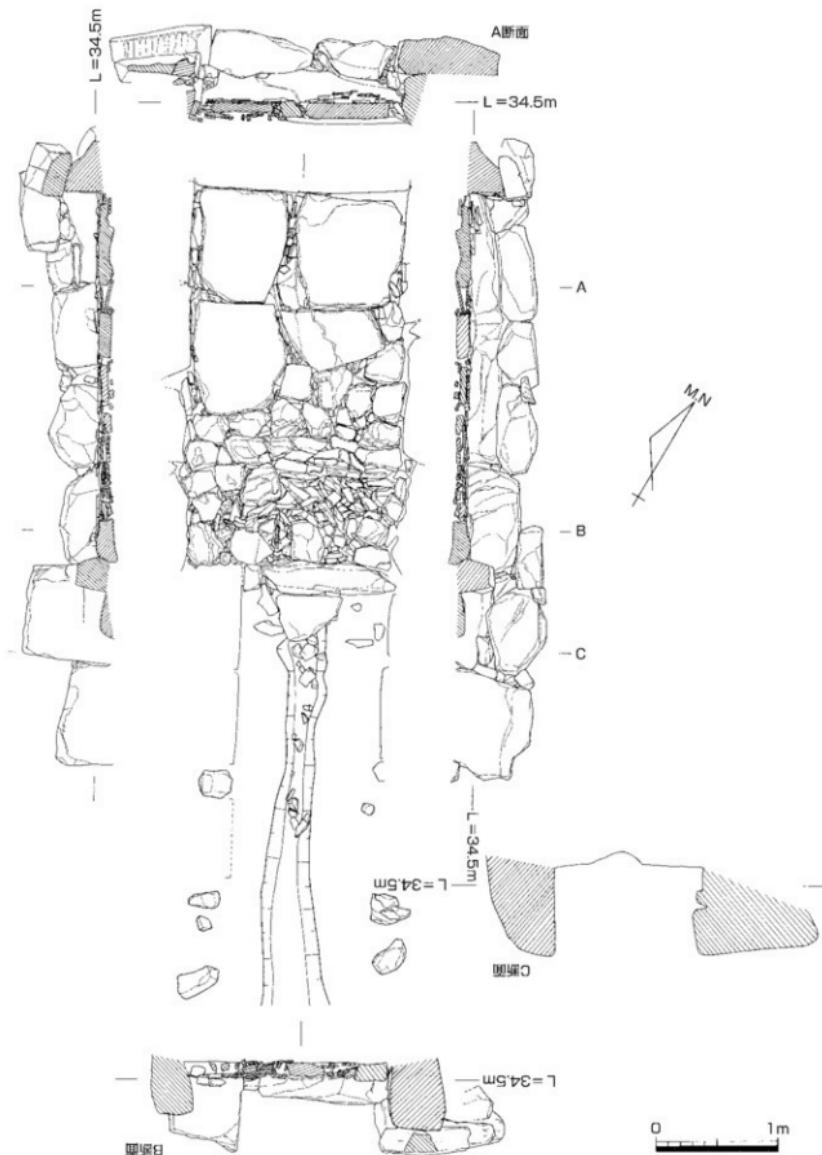
羨道の基底石は、袖石を含めて左右とも2石ずつ残されているだけでなく、根石の存在からさらに左右とも1石ずつは石材があったことが判明している。とくに右側壁の石材は、原位置から動いていたが、第8図では復元している。これを含めて羨道長を2.57mとしたが、羨道床面中央に掘られた排水溝が約5m確認されていることから、羨道はもっと長いものになるとと考えられる。排水溝は、幅を広げつつ低位の玄門方向へ延びている。羨道の床面は、玄門から羨道入りに向かって徐々に下降しているが、これは地形の傾斜を利用しているものと考えられる。

羨道と玄室は、玄門床面に配置された仕切石で明確に区分されている。仕切石は、方柱状の自然石が使用されており、厚みをもつ面を縦位置に充てているため分厚い側面観を呈している。このため、枠材としては前後に倒れやすいことから、前後に根固め用の石材を補填している。また、仕切石の長さが玄門幅に比べて短いために、小形の石材を1石補充している。

玄室の床面は、他の古墳と比べて特異な構造をもっており、それは大型の安山岩板石を床面に敷き並べていることである。まず玄室の奥壁側約1/2を、約50×90cm～90×95cmを測る方形の広い安山岩板石4枚で敷き並べて平坦な床面を造っている。残った玄門側約1/2においては、20～40cm程度で厚さ10cm未満の平たい塊石や、長辺40cm未満で厚さ2～5cm程度の小振りの安山岩板石を張り詰めている。大型の安山岩板石の隙間に小振りの安山岩板石が充填されており、隙間なく床面を石材が埋めている状態である。この床面における使用石材の相違は、石室築造者が区画分けを意識していた可能性がある。

これら床面の石材は、大型の安山岩板石については側壁と同じ両輝性安山岩を使用している。ただし、床面のものは節理に沿って分割されたとみられ加工痕は確認できないが、側壁のものは盤状工具で連続的に削って平坦面を得た際の加工痕が認められる。もう一方の平たい塊石や小振りの安山岩板石については、古銅輝石安山岩類と考えられ、古墳からやや離れるが右清尾山や屋島等で多く産出しているものである。

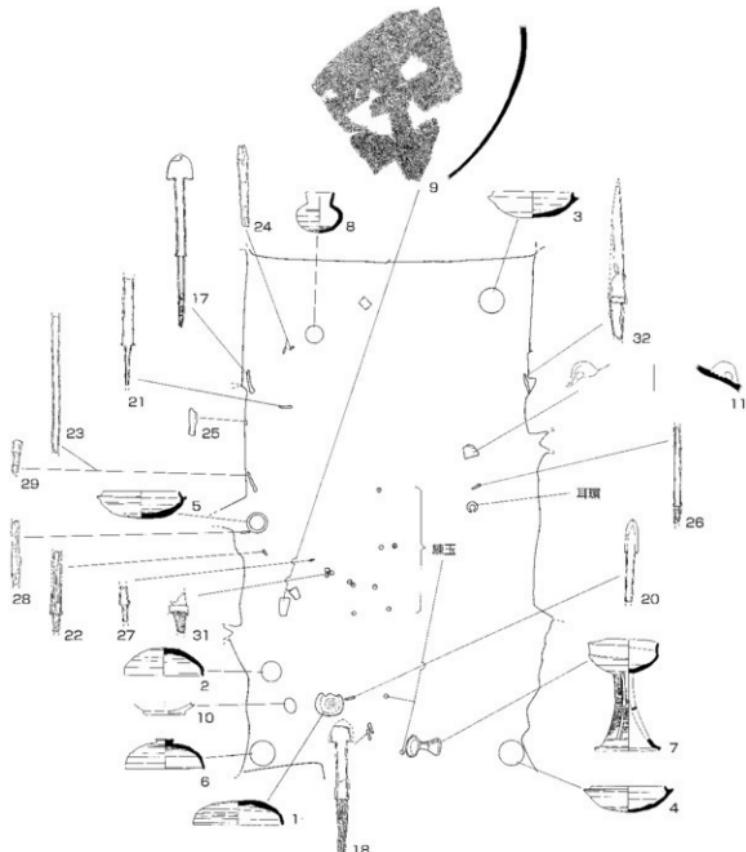
さて、この床面は、大きく3面に分けることができる。最初に検出した第1面は、第2面をベースとして、その上に小振りの安山岩板石を敷いていたものである（第9図）。ただし、この安山岩板石は全面を覆っておらず、壁面寄りにしか確認できない。後で報告する遺物出土状況を考えると、本来は全面を覆っていた可能性もある。第2面は、先に報告したとおりである（第11図）。これら第1面と第2面が追跡と初葬を反映しているかどうかについては判断できないが、石室築造時において第2面を形成した後に第1面の板石を敷き詰めた可能性もある。



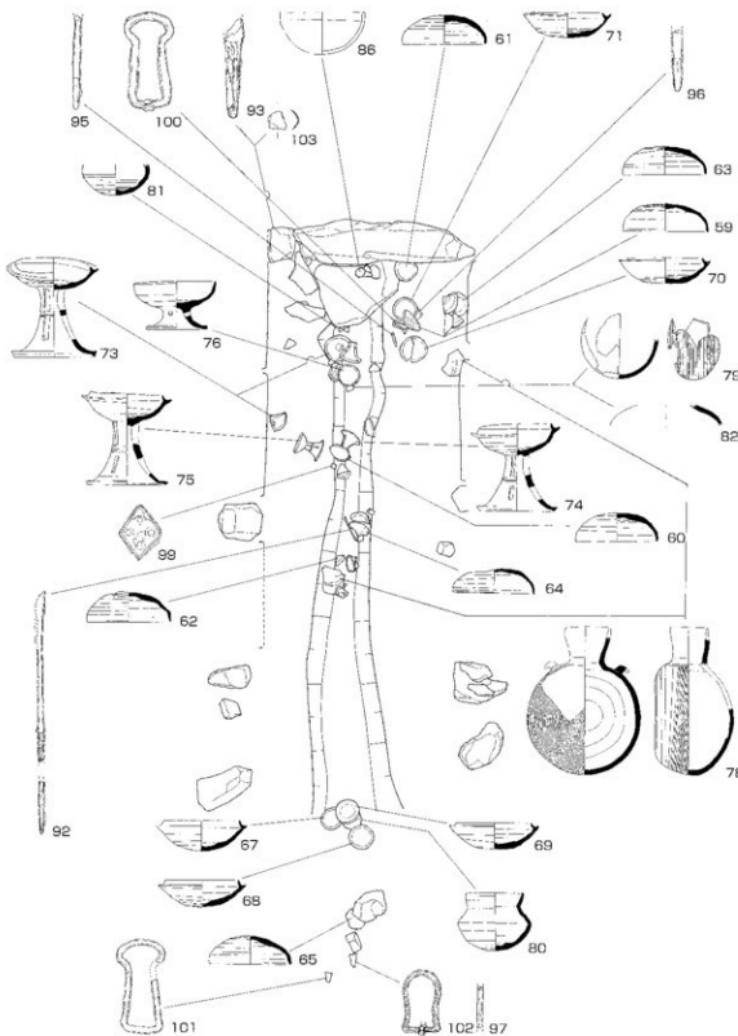
第11図 平石上2号墳 横穴式石室実測図（縮尺1/40, 第2面）

第3面は、床面の下部構造を示すもので、大型板石の東側2石があつた範囲以外において安山岩板石が規則的に敷かれていた（写真図版4-5・6）。この空白が生じた起因は、東側の2石が10数cmの厚さを持つのに対し、西側の2石は5cm前後の厚さしかないことによるものと考えられる。また西側2石と安山岩板石の間には、2~3cmの厚さで褐色砂質土層が認められた。

これら床面の安山岩板石をすべて取り除くと、漢道部の床面とほぼ同じ標高となった。この土床面は、墓壙掘方の底面に相当する。底面は、玄室の奥壁側約1/2の範囲は平坦な面に整えられているが、玄門側1/2は凹面となっている。その形状は、浅くて幅が広いスプーンの凹みが玄門方向に先端を向いている様相を呈しており、玄室内の排水機能を意図したものと考えられる。実際、玄門仕切石の下には、漢道から続く素掘りの排水溝が埋没しており、石室外への排水を目的としている。



第12図 平石上2号墳 玄室遺物出土状況図 (縮尺：玄室1/30, 土器1/8~1/12, 鉄製品1/4)



第13図 平石上2号墳 美道遺物出土状況図 (縮尺: 美道1/30, 土器1/8, 鉄製品1/4)

第4節 遺物出土状況（第12・13図）

出土遺物は、須恵器がもっとも高い割合を占め、鉄製品と装身具が次いで多く、少數の土師器などが存在する。出土した場所については、須恵器は玄室に比べ羨道から出土している点数が格段が多く、鉄製品は玄室・羨道もほぼ同数で、装身具は玄室のみである。

玄室における遺物出土状況は、完形またはそれに近い須恵器が壁面近く特に袖部で出土している。ただし、床面直上で検出され、埋葬時の原位置を保っていると推測される須恵器は、少數である。鉄製品も須恵器同様に壁面近くで出土しているが、小さいこともあってか床面直上で比較的多く検出されている。装身具は、玄室中央からやや南寄りの地点で床面石材に混じって出土しており、埋葬時の原位置からあまり離れていない可能性が高い。

羨道における遺物出土状況は、完形またはそれに近い須恵器が幾つかのグループに分かれて出土している。一つは仕切石近くで杯蓋や杯がまとめて出土しており、これに続いて排水溝に沿って3つのグループが出土している。排水溝のグループは、高杯を中心として杯蓋や提瓶などによって構成されている。ただし、中型の提瓶は仕切石近くと排水溝でも羨道中央付近と離れた地点から破片が出土している。さらに、排水溝でも羨門に比較的近い場所から、杯を中心に杯蓋と壺が出土している。鉄製品では、例えば馬具においても、先の須恵器のグループに混じって複数のグループから出土しており、一箇所に集中しているわけではない。これら羨道から出土した遺物類は、地山に接する状態で出土しているものが多く、ある時期の原位置を保っていると考えられる。

上記の遺物出土状況から推測されること、玄室については、追葬時の片付けや盗掘または石室破壊時に、須恵器や鉄製品が動かされた可能性が高く、装身具についてはほとんど動かされていないと考えられる。一方、羨道は完形またはそれに近い須恵器が多くグループ単位で残っていたことから、埋葬時にはほぼ剥離された状態か、追葬時にまとめて片付けられた可能性がある。ただし、馬具が複数のグループに分かれていることを考慮すると二次的に動いている可能性がある。

第5節 遺物（第14～19図）

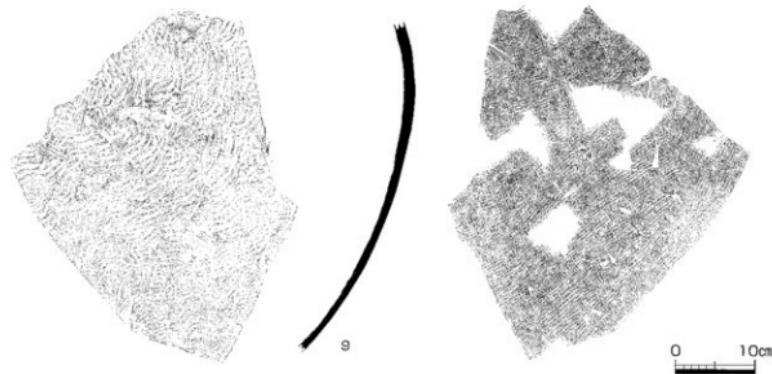
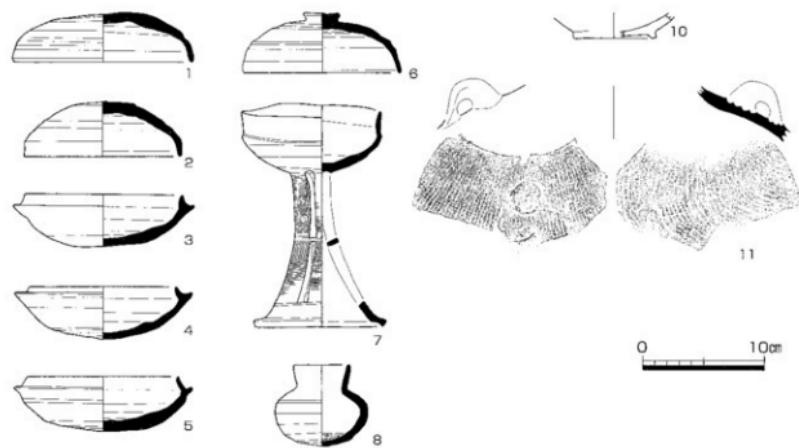
平石上2号墳の調査において出土した遺物類のうち、図示できたものは104点である。土器は総数44点で、須恵器が36点とほとんどを占め、土師器2点、古代の須恵質土器2点と黒色土器4点となっている。他に鉄製品が28点、装身具（練玉）26点、弥生時代の石器5点、近代の銭貨1点がある。なお、銅芯金張耳環が1点出土したが、調査終了後から長期間未整理だったことと、再三の保管場所移転が誘因となって所在不明となっている。本節では、玄室出土遺物（1～58）と羨道出土遺物（59～104）に分けて報告する。

1・2は須恵器杯蓋である。1は完形で、口径15.0cmと大きいが、器高が4.1cmとやや扁平な器形である。稜線は不明瞭だが、回転ヘラケズリは頂部の大半に及んでいる。2も完形で、口径13.0cm、器高4.5cmを測る。稜線は1に比べやや明瞭だが、頂部は未調整である。1は大阪府陶邑編年(出典) TK 43型式でも新しい段階かTK 209型式でも古い段階のものであり、2はTK 209型式でも新しい段階に相当すると考えられる。

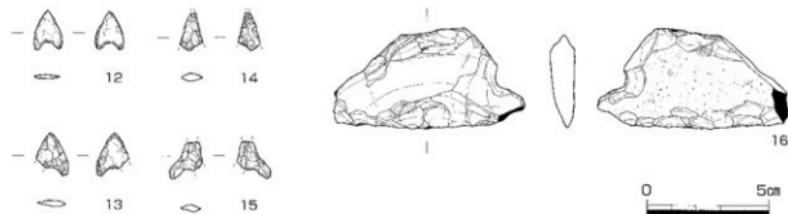
3～5は須恵器杯である。3は1/5を欠損し、口径13.0cm、器高4.3cmを測り、焼成不良である。4はほぼ完形で、口径12.4cm、器高4.3cmを測る。5もほぼ完形で、口径12.4cm、器高4.6cmを測る。口縁部の立ち上がりは短く、底部に回転ヘラケズリが施されている。ただし、5は3・4に比べ口縁部が長く回転ヘラケズリも広範囲に施されておりTK 209型式でも古い段階に相当し、3・4はTK 209型式でも新しい段階に相当すると考えられる。

6は須恵器高杯の蓋で、ほぼ完形であり、口径13.1cm、器高5.0cmを測る。頂部の摘みは扁平で、稜線は円線に近くなっている。頂部の1/2に回転ヘラケズリが施されている。

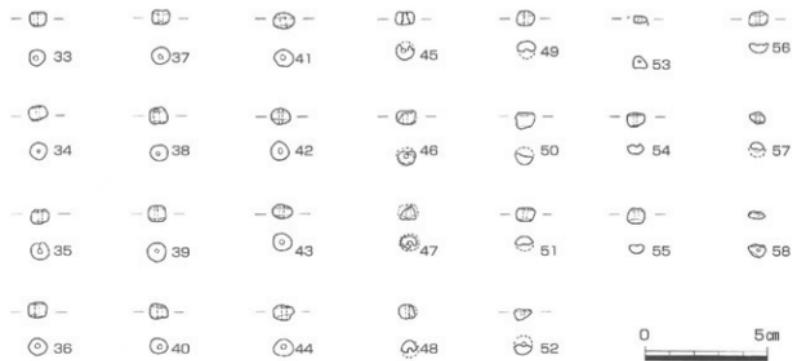
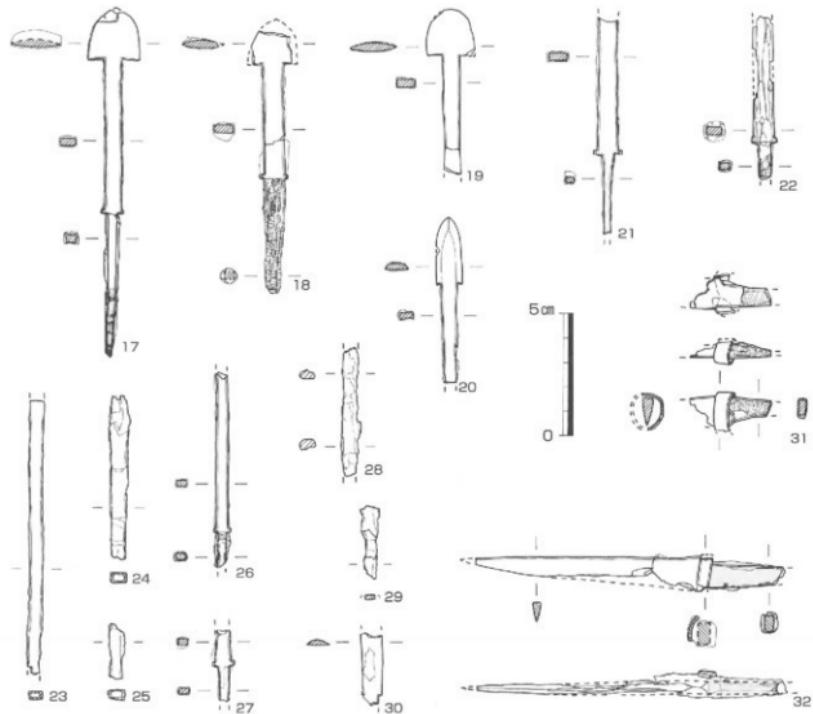
7は須恵器無蓋高杯で、ほぼ完形であり、口径11.6cm、器高18.5cmを測る。脚部は、いわゆる長脚二段透かしで、沈線3条とカキ目が施されている。2方向からの透かしは貫通している。杯部の稜線は凹線に近くなっている。内外面に自然釉が付着している。TK 209型式に相当すると考えられる。



第14図 平石上2号墳 玄室出土遺物実測図① (縮尺1/4, ただし9は1/6)



第15図 平石上2号墳 玄室出土遺物実測図② (縮尺1/2)



第16図 平石上2号墳 玄室出土遺物実測図③ (縮尺1/2)

8は小型の須恵器直口壺で、球形の体部に、やや長い直立した口頭部がつく。9は須恵器壺の破片である。体部中位～底部近くにかけての破片で、表面に格子目の叩き痕とカキ目、裏面に同心円文の当て具痕が残されている。

10は黒色土器縫の底部片で、内面のみに炭素が付着したA類である。9世紀末～10世紀初頭のものと考えられる。11は須恵器耳付壺の体部片である。体部でも頭部につながる肩の部分で、耳が付いていた痕跡が認められる。表面に格子目の叩き痕、裏面に同心円文の当て具痕が残されている。

12～15はサスカイト製の石器で、12は完形で、12・13・15は凹基無基式である。16はサスカイト製の打製石瓶丁で、ほぼ完形である。これら石器は、弥生時代のものである。

17～29は鉄錠である。錐身部、頭部の形状から2型式に分けることができる。17～19・21・22は錐身部が三角形式、頭部断面がやや扁平な長方形を呈する平根有頭錠である。17・18の2点が完存する。錐身部は長さ、幅ともに2cm前後、厚さ4mmを測り、小型である。頭部長は4.6～5.3cmと個体差がある。茎円は棘闇である。17・18・22には茎に糸巻き、矢柄の木質が残る。20・23～29は長頭錠である。遺存状況が悪く、錐身部は20のみで片切刃造りの櫛葉式、茎圓は26・27のみで棘闇であることがわかる。錐身部は長さ2.8cm、幅1.1cm、厚さ2.5mmを測る。23～25・28・29はいずれも頭部の破片であり、断面形から長頭錠の頭部と判断した。26には茎に矢柄の木質が残る。30は片丸造りで両刃の刃部を持つ破片で、やや不自然ではあるが長頭錠の錐身部の可能性を考えておく。これらの鉄錠の時期は、長頭錠は棘闇を持つことからTK43型式併行期以降に位置づけられる（井上1960）。平根有頭錠は棘闇を有し、小型の錐身部を持つことからTK209型式～TK217型式併行期と考えられる（井上1960）。

31・32は刀子である。どちらも両面で柄縁金具を持ち、茎部は関部から茎尻に向て幅狭になってゆく。31の茎部にはわずかに有機質が付着しており、32の茎部には柄の木質がわずかに残存し、その下に有機質が付着している。

33～58は練玉である。上下端が平坦な球形で、直径約7mm、厚さ約6mmを測るが、形はいびつなものが多い。中央の上下方向に直径2mmの孔が貫通している。表面は暗青灰色を呈し、断面にはにぶい黄褐色を呈する。

59～66は須恵器杯蓋である。66以外は完形またはほぼ完形である。口径は13.4～14.0cmで、器高は4.0～5.0cmである。稜線は62のように認識できるものと64のように認識できないものがあるが、総体的に不明瞭である。回転ヘラケズリはほぼ頂部1/2に施されている。これら杯蓋は明確な型式差は認められないが、64は口径・器高とも小さく、回転ヘラケズリの範囲もやや狭いことから、新しい様相を呈している。66は口縁部のみの破片で詳細は不明である。59～65はTK209型式に相当するが、若干の時期差が存在すると考えられる。ただし、59～65の杯蓋は、玄室出土の杯蓋1と比較すると、より新しい様相を呈している。

67～72は須恵器杯である。72以外は完形またはほぼ完形である。口径は11.8～12.4cmで、器高は4.1～5.1cmである。口縁部の立ち上がりは短く、底部に回転ヘラケズリが施されている。これら杯を比較すると、67・68のように口径・器高とも大きく、口縁部の立ち上がりが比較的長いものと、69～71のように口径・器高が小さく、口縁部の立ち上がりが短いものがある。72は小破片で詳細は不明である。67～72はTK209型式に相当するが、時期差が存在すると考えられる。

73～75は須恵器有蓋高杯で、ほぼ完形である。口径12.7～15.1cm、器高14.5～15.5cmを測り、73がもっとも大きく、75がもっとも小さい。全体にゆがみが顕著で、73は杯部が大きく傾いている。杯部には、短く立ち上がる口縁部が付き、内外面とも回転ナダ調整である。脚部は、いわゆる長脚二段透かしで、脚部中位に沈線が2条施されており、2方向からの透かしは貫通している。73の内外面には自然釉が付着している。これら有蓋高杯は、器形や調整から時期差は認められず、どれもTK209型式に相当すると考えられる。

76は須恵器無蓋高杯で、ほぼ完形であり、口径10.0cm、器高8.0cmを測る。短い脚部がつき、3方向から円孔が穿たれている。焼成不良である。TK209型式に相当すると考えられる。

77～79は須恵器提瓶である。77は口縁部の破片で、復元口径3.7cmを測り、外面上にはカキ目が施されている。78は口縁端部を除き、ほぼ完形で、器高22.7cm以上、体部径18.7cmを測る。背面が平坦で表面が丸みを帯びた体部に、鉤形に退化した耳が2つと頸部が付く。体部内面を観察すると、表側を円盤充填法により塞いでいる。体部表面～側面にはカキ目が、背面には回転ヘラケズリが施されており、表面には自然

軸が付着している。79は体部の破片で、復元体部径が12.7cmを測る小型のものである。体部内面の表側を円盤充填法により塞いでいる。体部表面～背面にはカキ日が、背面1/2には回転ヘラケズリが施されている。77・79は破片であり判断できないが、78は形態からTK209型式に相当すると考えられる。

80は須恵器直口壺で、算盤玉形の体部に、やや長くわずかに内湾する口頸部がつく。口径9.0cm、器高9.5cmを測り、底部1/2に回転ヘラケズリが施されている。内外面の上側に自然軸が付着し、底部には焼成時に生じた輪状の痕跡が斜めに残っている。81は須恵器壺の底部で、体部下位に沈線が1条、底部には回転ヘラケズリが施されている。82は須恵器短頭壺と想定される体部の破片である。

83・84は須恵器壺の破片である。83は口頸部～体部にかけての破片で、体部の表面には平行目の叩き痕、裏面には同心円文の当て具痕が残されている。84は頸部の破片で、内外面に自然軸が付着している。

85は小型の土師器壺である。底部が平坦な球形に、短く外反する口頸部がつく。86は土師器鉢で、半球形を呈し、口縁部がわずかに直立する。仕切石の上面から出土している。

87・88は須恵器上器杯である。口径12.8cmと13.0cm、器高4.0cmと3.4cmを測る。底部を回転ヘラ切り後にナデている。10世紀初頭～前半のものである。89～91は黒色土器碗で、89・90は口縁部、91は底部の破片である。内面のみに炭素が付着したA類である。玄室出土の10と合わせて同一個体になるかどうかは不明であるが、同じ頃のものと考えられる。

92は鉄釘である。完形品の片刃式長頭釘で、茎関は棘関、茎には糸巻きと矢柄の木質が残存している。時期は、棘関を有することからTK43型式併行期以降である。(岡1980)。

93・94は刀子である。どちらも両関で、柄部には木質が顯著に残り、柄縁から柄尻に向けて幅狭になり、93の柄尻は丸く収めている。

95～97は棒状の鉄製品である。断面が円形であることから、鉄釘の可能性が考えられる。

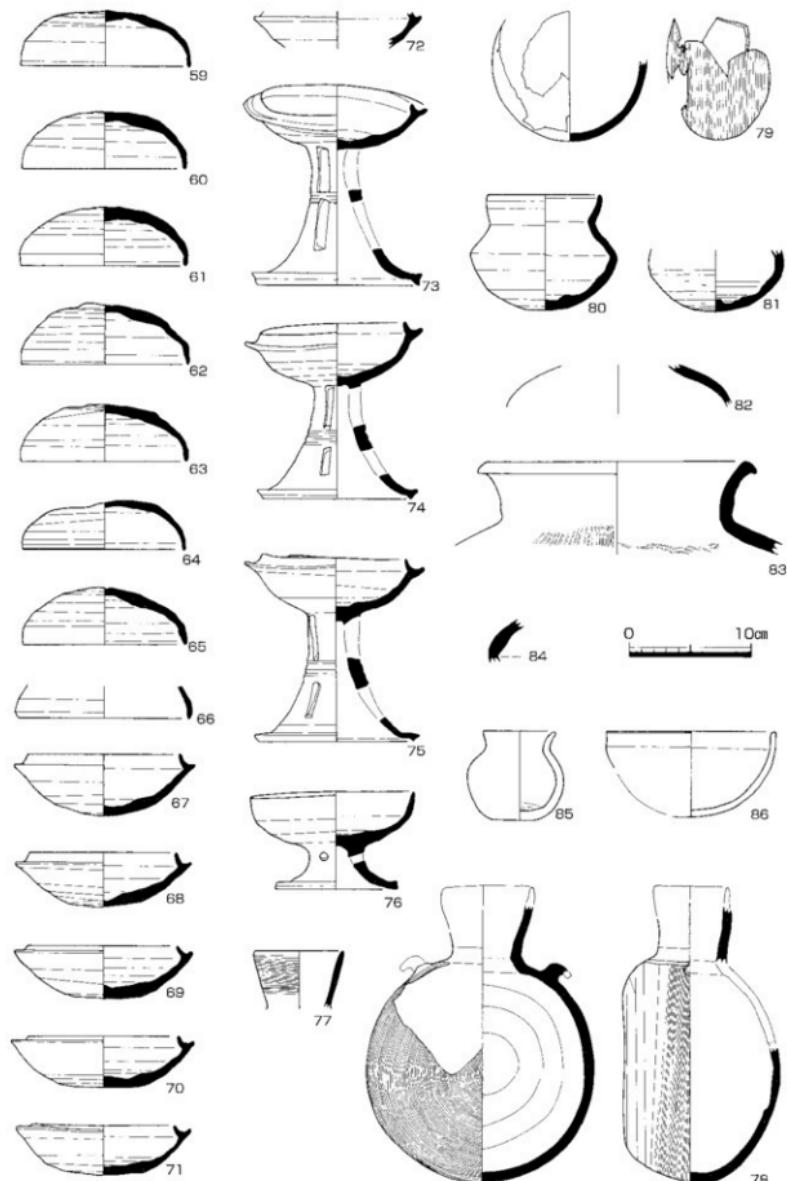
98～102は馬具である。98・99は鉄地金銅装の飾金具である。98は半円形と方形を組み合わせた爪形を呈する。鍔頭径6.5mmの鉄が2枚配され、鉄の裏側には金銅が付着している。革帶の先端に装着されたものである。99は菱形で、4枚が配され、痕跡から直径9mmの鉄と考えられる。革帶の交点に装着されたものである。100～102は鉸具である。100・101はほぼ同形で、対になって用いられたものと思われる。100には刺金の基部がわずかに残る。102も刺金の基部が残っている。いずれも輪金下部の内幅はおよそ2.2cmを示し、爪形飾金具の幅2.4cmと近似することから、革帶の幅は2cm程度であったと推定できる。

103は金銅製の刀子縁金具である。93・94のどちらかに伴うものであると考えられる。

104は明治時代の通貨で、表面に「半錢」「二百枚換一圓」、裏面に「大日本」「明治十年」の文字が陽刻されている。

以上、出土遺物について報告してきた。出土した須恵器のうち時期が判明するものは、おおむねTK209型式に相当し、古墳の築造年代を示すものと考えられる。ただし、同じTK209型式であっても細かい時期差が存在し、これは初葬と追葬に由来するものであろう。須恵器杯蓋および杯を比較すると、杯蓋1や杯5は回転ヘラケズリの範囲や口縁部の立ち上がりからもっとも古い様相を示す。逆に、杯蓋2・65や杯4・70～72はもっとも新しい様相を示し、それ以外の杯蓋60～64・66や杯3・68・69は中間的様相を示す。しかし、差が小さいものもあり断言できない。いずれにせよTK209型式全般にわたって、初葬とそれ以後の追葬が数回行われたと考えられる。

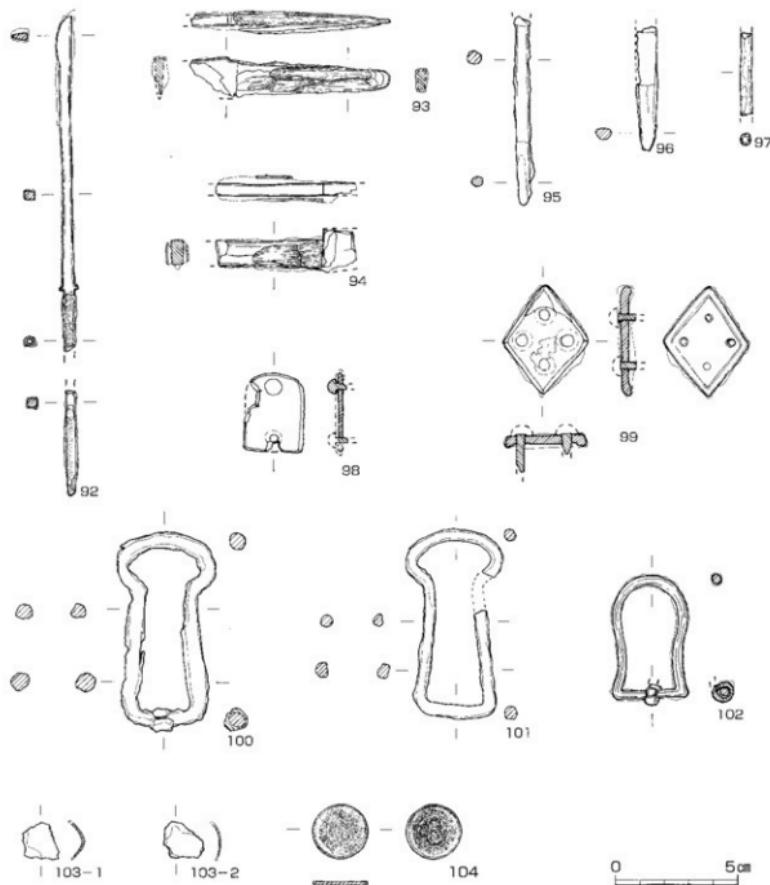
一方、黒色土器のように平安時代中期の遺物が見られることから、この時期には石室が開口していくいたと考えられる。



第17図 平石上2号墳 美道出土遺物実測図①（縮尺1/4）



第18図 平石上2号墳 羨道出土遺物実測図② (縮尺1/4)



第19図 平石上2号墳 羨道出土遺物実測図③ (縮尺1/2)

件名	種別	器種	法量(㎤)		同 種	色 調	胎 土	備考	
			口径	内径					
14 1	陶器	杯	15.0	4.1	外面：目録ナメ、底部3/4周輪ヘラケズリ 内面：目録ナメ	外面：灰白5/3 内面：灰白5/3	■		
14 2	陶器	杯	13.0	4.5	外面：目録ナメ、底部未調査	外面：灰白6/7 内面：灰白6/7	やや粗		
14 3	陶器	杯	13.0	4.3	外面：目録ナメ、底部1/2周輪ヘラケズリ 内面：目録ナメ	外面：灰白8/8 内面：目録8/8	■		
14 4	陶器	杯	12.4	4.3	外面：目録ナメ、底部1/2周輪ヘラケズリ 内面：目録ナメ	外面：灰白6/6 内面：灰白6/6	■		
14 5	陶器	杯	12.4	4.6	外面：目録ナメ、底部2/3周輪ヘラケズリ 内面：目録ナメ	外面：灰白10Y6/6 内面：灰白10Y7/7	■		
14 6	陶器	杯	13.1	5.0	外面：目録ナメ、底部1/2周輪ヘラケズリ 内面：目録ナメ	外面：灰白6/7 内面：灰白6/7	■		
14 7	陶器	杯	11.6	10.5	18.5	外面：目録ナメ、洋灰2/3周輪ヘラケズリ 内面：目録ナメ	外面：模様10G3/3 内面：灰白5/7	■	腹部：沈縛3条、透かし2段2方向、自然釉
14 8	陶器	杯	4.6	6.7	外面：目録ナメ、底部未調査	外面：灰白8/8 内面：灰白8/8	■		
14 9	陶器	杯	(295)	—	外面：目録ナメ、底部未調査 内面：目録ナメ文端て具痕	外面：灰73Y5/5 内面：灰73Y5/5	■		
14 10	陶土器八角瓶	瓶	6.1 (2.1)	2.1	外面：透成 内面：透成	外面：黄6/2Y4/4 内面：にない・黄微10Y6/7/4	1mm以下の石英、良石を含む		
14 11	陶器	杯	(45)	—	外面：透成、アテ 内面：透成文端て片貝	外面：灰5Y5/5 内面：灰5Y5/5	■		
17 59	陶器	杯	14.0	4.5	外面：目録ナメ、底部1/2周輪ヘラケズリ 内面：目録ナメ	外面：青灰8/6/1 内面：灰白9/6/1	■		
17 60	陶器	杯	13.5	4.7	外面：目録ナメ、底部1/2周輪ヘラケズリ 内面：目録ナメ	外面：灰5Y6/6 内面：灰5Y6/6	■		
17 61	陶器	杯	13.8	4.8	外面：目録ナメ、底部1/2周輪ヘラケズリ 内面：目録ナメ	外面：灰10N7/7 内面：オーリーブ灰5G6/6/1	■		
17 62	陶器	杯	13.9	5.0	外面：目録ナメ、底部1/2周輪ヘラケズリ 内面：目録ナメ	外面：灰5S/5 内面：灰5S/5	■		
17 63	陶器	杯	13.8	4.7	外面：目録ナメ、底部1/2周輪ヘラケズリ 内面：目録ナメ	外面：灰白6/7 内面：灰白6/7	■		
17 64	陶器	杯	13.4	4.0	外面：目録ナメ、洋灰2/3周輪ヘラケズリ 内面：目録ナメ	外面：灰10Y5/1 内面：灰10Y5/1	■		
17 65	陶器	杯	13.5	4.7	外面：目録ナメ 内面：目録ナメ	外面：灰5S/5 内面：灰5S/5	■		
17 66	陶器	杯	(142)	—	外面：目録ナメ、底部1/2周輪ヘラケズリ 内面：目録ナメ	外面：灰5S/5 内面：灰5S/5	■		
17 67	陶器	杯	12.4	5.1	外面：目録ナメ、底部1/2周輪ヘラケズリ 内面：目録ナメ	外面：灰5S/5 内面：灰5S/5	■		
17 68	陶器	杯	12.2	4.5	外面：目録ナメ、底部1/2周輪ヘラケズリ 内面：目録ナメ	外面：灰5S/7/1 内面：灰5N7/7	■		
17 69	陶器	杯	12.4	4.3	外面：目録ナメ、底部1/2周輪ヘラケズリ 内面：目録ナメ	外面：灰10N5/5 内面：青灰8/6/1	■		
17 70	陶器	杯	12.5	4.3	外面：目録ナメ、底部1/2周輪ヘラケズリ 内面：目録ナメ	外面：青灰8/6/1 内面：青灰8/6/1	■		
17 71	陶器	杯	11.8	4.1	外面：目録ナメ、底部1/2周輪ヘラケズリ 内面：目録ナメ	外面：灰白6/7 内面：灰白6/7	■		
17 72	陶器	杯	(30)	—	外面：目録ナメ 内面：目録ナメ	外面：灰6Z5Y8/1 内面：灰6Z5Y8/1	■		
17 73	陶器	杯	15.1	14.9	15.5	外面：目録ナメ 内面：目録ナメ	外面：灰10N7/7 内面：灰5Y5/5/1	■	腹部：沈縛2条、透かし2段2方向、自然釉
17 74	陶器	杯	14.7	13.1	14.5	外面：目録ナメ 内面：目録ナメ	外面：灰5N7/7 内面：灰5N6/6	■	
17 75	陶器	杯	12.7	12.6	13.5	外面：目録ナメ 内面：目録ナメ	外面：灰5N7/7 内面：灰5N7/7	■	腹部：沈縛2条、透かし2段2方向
17 76	陶器	杯	10.0	13.0	8.0	外面：目録ナメ、杯底部2/3周輪ヘラケズリ 内面：目録ナメ	外面：灰10Y5V8/1 内面：灰10Y5V8/1	■	腹部：凹孔3方内
17 77	陶器	杯	3.7	(47)	—	外面：目録ナメ 内面：目録ナメ	外面：灰6Y10R5/1 内面：灰6N6/6	■	
17 78	陶器	杯	(227)	—	外面：透成目録ナメ、表裏カ目、裏側目録ヘラケズリ 内面：四輪ナメ、裏側充填	外面：灰10Y4R4/2 内面：扁平灰10Y3R3/1	■		
17 79	陶器	瓶	13.7	(165)	—	表裏：共通カ目、裏裏1/2周輪ヘラケズリ 内面：目録ナメ	外面：灰5Y6/1 内面：灰5Y6/1	■	
17 80	陶器	杯	9.0	9.5	—	外面：目録ナメ、底部1/2周輪ヘラケズリ 内面：目録ナメ	外面：オーリーブ灰5Y3/2 内面：オーリーブ灰5Y3/2	■	外表面：自然釉
17 81	陶器	杯	21.0	(52)	—	外面：目録ナメ、底部回転ヘラケズリ 内面：目録ナメ	外面：灰5N/6 内面：灰5N/6	■	体部下部：沈縛1条
17 82	陶器	杯	(3.6)	—	—	外面：目録ナメ 内面：目録ナメ	外面：灰8X4 内面：灰8X4	■	
17 83	陶器	杯	21.0	(7.6)	—	外面：目録ナメ、平行目明と表 内面：目録ナメ、同心円内文端て具痕	外面：灰5S/5 内面：灰5N6/6	■	外表面：自然釉
17 84	陶器	杯	(3.6)	—	—	外面：目録ナメ 内面：目録ナメ	外面：灰5Y6/1 内面：灰5Y6/1	■	
17 85	陶器	杯	6.0	7.9	—	外面：目録ナメ 内面：X-2ナメ、底輪ヘラケズリ	外面：神25Y6E-8 内面：灰5Y6E-8	1mm以下の石英、良石を含む	
17 86	土器	杯	14.0	7.0	—	外面：目録ナメ 内面：目録ナメ	外面：灰5Y6/1 内面：灰5Y6/1	2mm以下の石英、良石を含む	
18 87	風呂場	湯呑	12.8	7.7	4.0	外面：目録ナメ、底輪3周ヘタ切り後ナメ 内面：目録ナメ	外面：灰5Y6/1 内面：灰5Y6/1	1) 頭部外側：墨跡 2) 頭部内側：火燐痕	
18 88	風呂場	湯呑	13.0	6.8	—	外面：目録ナメ、底部回転ヘタ切り後ナメ 内面：目録ナメ	外面：灰5Y7/1 内面：灰5Y7/1	■	
18 89	黒土器八角瓶	瓶	11.2	(1.6)	—	外面：透成 内面：透成	外面：にない・黄微10Y6/4 内面：灰5Y6/5	1mm以下の石英、良石を含む	
18 90	黒土器八角瓶	瓶	12.0	(2.0)	—	外面：透成 内面：透成	外面：灰5Y6/5 内面：灰5Y6/5	1mm以下の石英、良石を含む	
18 91	(黒色)土器八角瓶	瓶	6.6	(1.2)	—	外面：透成 内面：透成	外面：灰5Y6/6 内面：灰5Y6/6	1mm以下の石英、良石を含む	
20 103	陶器	杯	(3.0)	—	—	外面：ナメ 内面：ナメ	外面：灰5N/6 内面：灰5N/6	■	体部：竹簪文

第1表 平石上2号墳 出土遺物観察表①

右括弧の()は、継ぎ・半透の数を表す。

種別 番号	報告 番号	器種	寸法(cm)			調査	色調	石材	備考
			長さ	幅	厚さ				
15 12		石頭	1.5	1.2	0.2			サスカイト	重量 0.1g
15 13		石頭	1.2	1.3	0.3			サスカイト	重量 0.4g
15 14		石頭	1.6	1.0	0.3			サスカイト	重量 0.2g
15 15		石頭	1.6	1.4	0.3			サスカイト	重量 0.2g
15 16		石頭	7.8	4.1	1.1			サスカイト	重量 35.0g
16 17		石頭	7.8	4.1	0.8				
16 18		石頭	1.6	0.8					
16 19		石頭	6.8	2.0	0.5				
16 20		石頭	6.8	1.2	0.5				
16 21		石頭	8.9	0.8	0.4				
16 22		石頭	6.6	0.9	0.5				
16 23		石頭	11.2	0.5	0.3				
16 24		石頭	6.7	0.6	0.4				
16 25		石頭	2.2	0.2	0.1				
16 26		石頭	6.0	0.7	0.5				
16 27		石頭	2.9	0.5	0.4				
16 28		石頭	5.2	0.7	0.1				
16 29		石頭	3.9	0.4	0.2				
16 30		石頭	3.1	1.1	0.3				
16 31		刀子	3.4	1.5	1.1				
16 32		刀子	12.6	1.5	1.3				
16 33		刀子	0.6	0.7					
15 24		刀子	0.5	0.5					
15 25		刀子	0.7	0.6					
15 26		鍔工	0.8	0.6					
16 37		鍔工	0.7	0.6					
16 38		鍔工	0.7	0.6					
16 39		鍔工	0.7	0.6					
16 40		鍔工	0.7	0.6					
16 41		鍔工	0.9	0.7					
16 42		鍔工	0.8	0.7					
16 43		鍔工	0.7	0.6					
16 44		鍔工	0.9	0.6					
16 45		鍔工	0.7	0.3					
15 46		鍔工	0.8	0.6					
16 47		鍔工	0.7	0.5					
16 48		鍔工	0.7	0.6					
16 49		鍔工	0.7	0.6					
16 50		鍔工	0.7	0.6					
16 51		鍔工	0.8	0.6					
16 52		鍔工	0.7	0.4					
16 53		鍔工	0.5	0.2					
16 54		鍔工	0.5	0.2					
16 55		鍔工	0.7	0.6					
16 56		鍔工	0.7	0.6					
16 57		鍔工	0.6	0.5					
16 58		鍔工	0.7	0.4					
19 92		石頭	14.1	0.2	0.4				
19 93		刀子	0.3	0.3	0.5				
19 94		刀子	0.3	0.3	0.9				
19 95		刀子	0.7	1.4	0.9				
19 96		石頭	7.8	0.5	0.5				
19 97		石頭	5.1	0.6	0.5				
19 98		石頭	3.1	0.5	0.5				
19 99		施金具	3.5	2.5	0.9				
19 100		施金具	3.5	4.6	0.9				
19 101		施金具	2.8	2.0	0.9				
19 102		施金具	5.0	3.0	0.4				
19 103.1		刀子鍔金具	1.3	1.3	0.1				
19 103.2		刀子鍔金具	1.4	1.6	0.1				
19 104		半鏡	2.5	0.1					明治十年

第2表 平石上2号墳出土遺物観察表②

第3章 まとめ

第1節 平石上2号墳の概要

平石上2号墳は、墳丘および横穴式石室の大半が失われており、調査では石室の基底石を検出したのみであった。しかしながら、出土遺物は完形に近いものが多数あり良好な状態であった。本節では、これまで報告した内容を箇条書きにして、まとめとしたい。

① 墳丘の形態や規模は、調査では明確にできなかったが、周辺の地形分析から、直径15m前後の円墳と想定される。また、断面観察では明確な版築は確認できなかったが、風化した黒雲母安山岩を含む土壌を使用して堅固な墳丘を築造していることが明らかになった。

② 横穴式石室は、全長5.60m以上を測る右片袖式で、南向きに開口している。玄室は、全長3.03m、幅は奥壁側で1.77m、中間で1.85m、玄門側で1.75mを測り、わずかに胴張りの長方形を呈する。羨道は、長さ2.57m以上、羨道幅は1.20~1.25mを測る。

③ 横穴式石室に使用されていた石材は、古墳が立地している日山で産出する両輝性安山岩である。この石材は軟質で加工が容易であり、また平坦面をもつものが多いことから、石室構築にあたっては平坦面を内側に向けていた。

④ 横穴式石室の床面は、三重構造になっている。第1面は小型の安山岩板石を敷き並べており、床面築造の最終段階にある。第2面は、大型の安山岩板石4枚を奥壁側に、小型の安山岩板石と平たい塊石を玄門側に敷き並べており、床面構造の主体をなす。とくに大型の安山岩板石の使用は県内に類例が多く、特異な事例である。第3面は小型の安山岩板石を敷き並べており、中層の板石等の安定を図る基礎的なものである。大型の安山岩板石は石室石材と同じ両輝性安山岩であるが、小型の安山岩板石は地元ではなく高松平野の他所から運ばれたものと考えられる。

⑤ 出土遺物には完形のものが多く、出土状況は良好であった。玄室出土の土器は原位置を留めていないものが多いが、裝身具は中央にまとまっている。羨道出土の土器は、幾つかのグループに分かれまとまって出土している。

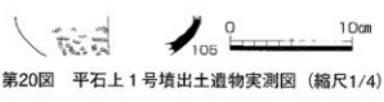
⑥ 出土した須恵器は、TK209型式に相当する。ただし、細かい時期差が存在することから、初葬の後に数回の追葬があったと考えられる。7世紀第1四半期を中心とする築造時期が想定される。また、出土遺物には特異なものは見受けられず、一般的な横穴式石室墳から出土するものである。平安時代の土器も出土しており、この墳には石室が開口していた可能性がある。

第2節 平石上古墳群について

平石上古墳群については、第2章第3節で報告したとおりである。未調査の古墳が多いため検討は難しいが、最初に築造されたのは平石上1号墳であると推測される。墳丘の規模から、古墳時代後期前半もしくは後半の横穴式石室をもつ古墳である可能性がある。墳丘から須恵器片が表採されている。次いで築造されたのは、今回報告した2号墳で、3号墳も石室規模が近いことから同じ後期後半のものであろう。4~6号墳については、今後の調査によるが、2・3号墳と近い時期である可能性が指摘できる。いずれにせよ平石上古墳群は、日山東麓に営まれた横穴式石室を主体部にもつ後期古墳群である。ただし、これら古墳群に暮らした人々が住んでいた集落については知られておらず、古墳群の更なる調査を含めて、周辺における今後の調査に期待したい。

参考文献（五十音順）

- 川島郷土誌編集委員会1995『川島郷土誌』
関義則1986『古墳時代後期鉄器の分類と編年』『日本古代文化研究』第3号 PHALANX—古墳文化研究会—
田辯昭三1981『須恵器大成』角川書店
三谷郷土史編集委員会1988『三谷郷土史』
山本英之2000『平石上3号墳』『香川県埋蔵文化財調査年報 平成10年度』香川県教育委員会



第20図 平石上1号墳出土遺物実測図（縮尺1/4）

第Ⅲ部 石舟池古墳群

第1章 調査の経緯と経過

第1節 調査の経緯

高松市三谷町に所在する石舟池（いしふねいけ）は、全長88mの前方後円墳である三谷石舟古墳を南側の堤代わりとしていることで有名である。その由来については、石舟池が三谷石舟古墳の周溝を利用したとする説（[仁科1998、水田基1940](#)）や近世頃に築造された溜池とする説があったが、平成3～4年にかけて高松工芸高校郷土史研究会が実施した三谷石舟古墳測量調査（[西本1990](#)）や今回報告する調査によって、後者であることが判明している。

さて、この石舟池の整備計画が、高松市三谷土地改良区により「ため池等整備事業（小規模）石舟池計画」として立案され、平成元年度から5ヶ年計画で施工されることとなった。計画は、三谷石舟古墳の後円部と繋がって築造されている堤防の改修を目的としていた。工事内容は、総延長518mを測る堤防の内面を階段状に削除し、盛土を抜き替えて表面をコンクリートブロック張りとして強化するものであった。あわせて底部分については、堆積したヘドロ等を除去とともに一部可能な範囲は底土を削除して貯水量の増加を図るものである。初年度は、後円部から北東に延びる約100mの区間が対象で、毎年度ごとに順次西へ施工するものであった。

石舟池の南側汀線が三谷石舟古墳の墳裾となること、また改修される堤防の南東端が古墳後円部に直結していることから、高松市教育委員会は土地改良区と協議を行った。その結果、上記の箇所については事前の確認調査や立会調査を実施することで合意した。ただし、堤防については、古墳から離れることや近世頃に築造されたものとの認識から、事前の調査等は必要ないものと判断された。

第2節 調査の経過

【第1次調査】

平成元年11月14日～12月6日にかけて、堤防が古墳後円部に取り付く部分で、墳裾と周溝の存在を確認するため、立会調査を実施した。この結果、古墳に関係する周濠や埴輪等の遺構・遺物は確認できなかつたが、墳裾から約8m離れた堤防内において箱式石棺1基を検出し、石舟池1号石棺と呼称した。

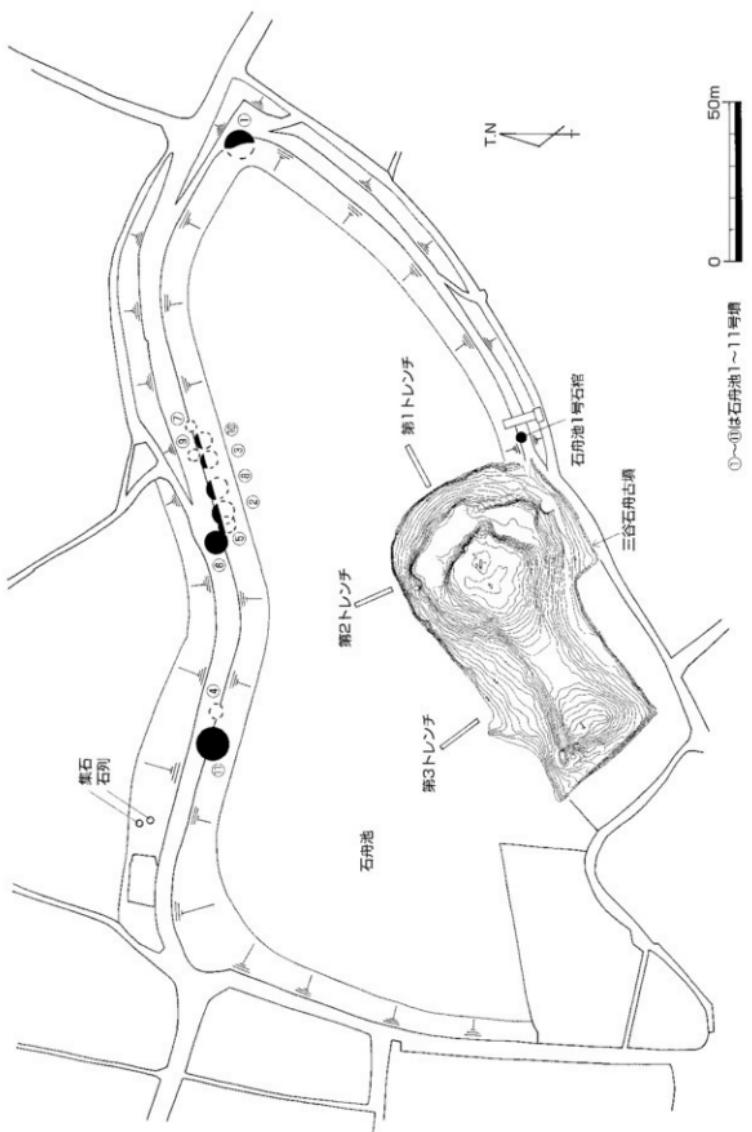
【第2次調査】

当初、工事予定地が古墳から100m以上離れた堤防であることから、埋蔵文化財包蔵の可能性は低いものとして立会調査等は計画しなかった。ところが、平成2年12月25日に土地改良区から本市教委に「作業中、堤防から石棺が出た」と通報があった。さっそく現地で確認したところ、横穴式石室（当時は豊穴式石室と認識）をもつ古墳であることが判明し、石舟池1号墳と呼称した。そして、平成3年1月5日～31日にかけて確認調査を実施した。

【第3次調査】

平成3年度においては、前年度の経緯から随時、立会調査を実施することになった。その結果、東西に延びる石舟池北辺の堤防内から、削平された小型の円墳が密集して9基確認され、石舟池2～10号墳と呼称した。本市教委と土地改良区で協議した結果、各古墳の平面図を作成するとともに、横穴式石室が残っていた2・3・5号墳については発掘調査を実施することで合意した。調査は、平成3年11月6日～12月18日にかけて実施し、横穴式石室の基底部と床面を検出するとともに、須恵器や鉄製品等の遺物が出土した。石室や出土遺物から、古墳時代後期後半の群集墳であることが明らかになった。

さらに、渋澤工事予定地の池底において、三谷石舟古墳の墳丘側で試掘調査を実施したが、周溝等の遺構は確認できなかった。



【第4次調査】

平成4年度においては、前年度同様に立会調査を実施した。平成4年11月5日～12月4日にかけて、石舟池4号墳および新たに確認した石舟池11号墳の周溝を調査した。このほか、石舟池北西端の樋管設置工事では、堤防内部において中世までの遺物を伴う石列等を検出した。

第2章 調査の成果

第1節 遺跡の概要

石舟池古墳群の調査については、次節以降で詳細を報告するが、一覧表にしたのが次の第3表のとおりである。また、調査成果の速報を目的として、これまで5冊の概報（日本1990・1991、同編1992、未光1993A・B）に概要を掲載しており、本報告書と概報で内容を異にしている箇所があるが、本報告書をもって正式な報告とする。

遺跡または調査地名	調査次数	時 代	遺 構	遺 物
石舟池1号石棺	第1次調査	古墳時代中期？	箱式石棺	なし
石舟池1号墳	第2次調査	古墳時代後期後半	横穴式石室、墳丘、周溝	須恵器、管玉等
石舟池2号墳	第3次調査	古墳時代後期後半	横穴式石室、墳丘	須恵器、鉄製品、ガラス玉等
石舟池3号墳	第3次調査	古墳時代後期後半	横穴式石室、墳丘	須恵器
石舟池4号墳	第4次調査	古墳時代後期後半	石室残骸	須恵器
石舟池5号墳	第3次調査	古墳時代後期後半	横穴式石室、墳丘	なし
石舟池6号墳	第3次調査	古墳時代後期後半	墳丘、周溝	土師器等細片
石舟池7号墳	第3次調査	古墳時代後期後半	墳丘	なし
石舟池8号墳	第3次調査	古墳時代後期後半	墳丘	なし
石舟池9号墳	第3次調査	古墳時代後期後半	石室残骸	須恵器、鉄製品
石舟池10号墳	第3次調査	古墳時代後期後半	墳丘	なし
石舟池11号墳	第4次調査	古墳時代後期後半	墳丘、周溝	土師器細片
石列	第4次調査	中世以降	塊石の石列	土師質土器等
集石	第4次調査	不明	安山岩の集石	なし
三谷石舟古墳北側トレンチ調査	第3次調査	なし	なし	須恵器、土師器、土師質土器等

※第1～4次調査は、それぞれ平成元～4年度に相当する。

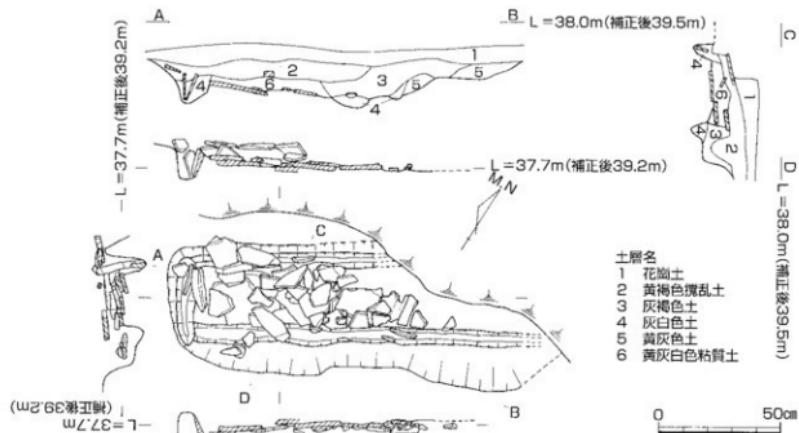
第3表 石舟池古墳群調査一覧

第2節 石舟池1号石棺（第22図）

石舟池1号石棺は、三谷石舟古墳の後円部に堤防が取り付く付近で確認された箱式石棺である。墳裾から約8m離れた堤防内において、堤防上面から約2m下がった位置である。

石棺は、N-59°-Eに主軸をおく長方形プランであるが、東端が失われていた。墓壙は残存長1.45m、幅55cmを測り、隅丸の不整な長方形である。上部を削平されており、10～15cmしか残っていないかった。このため、石棺も大半が失われており、床面で10～20cm程度の安山岩板石の散布を確認できただけである。ただし、側壁は失れていたものの、その掘り方を確認できたことから、石棺の内法は長さ1.3m以上、幅25～30cmであることが推測できる。石棺内の土層を観察すると、第1～3層は現代に近い堆積層、第4・5層は時期不明の堆積層、第6層は部分的にしか残っていなかったが床面に張られていた粘土と考えられる。

出土遺物がないため、築造年代は不明であるが、三谷石舟古墳に近接して築かれていることを考慮すると、三谷石舟古墳の周辺埋葬施設である可能性が指摘できる。なお、石舟池1号石棺周辺で実施した立会調査では、石棺以外に古墳と関係する遺構・遺物は確認できなかった。



第22図 石舟池1号石棺 平面・断面・土層図 (縮尺1/20)

第3節 石舟池1号墳 (第23~25図)

石舟池1号墳は、堤防の東端において確認した古墳である。事業者からの通報を受けて、現地に赴いた際には、内側をひな壇状に削られた堤防の断面において、横穴式石室の横断面と墳丘断面が露出していた。また、墳丘手前のひな壇において、周溝が残存していることも確認できた。掘削がこれ以上及ばないことから、調査による掘削は行わず、墳丘および石室の断面図作成および周辺の平面図作成を実施することになった。なお、露出していた石室を当初は竪穴式石室と認識し石舟池古墳と呼称していた(伊藤1990)が、石舟池2・3号墳の調査事例より横穴式石室に修正している。

【墳丘】

確認できた墳丘は、断面の崩れた土段頭形と周溝を約1m分だけである。そのため墳形は判然としないが、2~11号墳の事例から一般的な円墳と想定でき、その場合は直徑8~10mと推定される。墳高は現存約1mであるが、石室も含めて上部が削られており、もっと高かったものと考えられる。

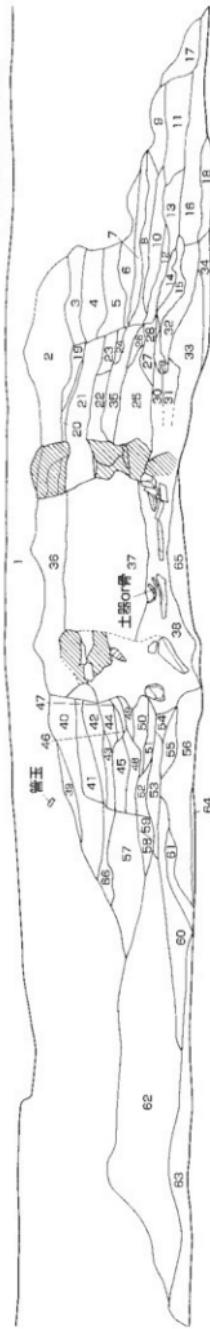
墳丘の断面観察では、版築により築造していることが看取でき、厚さ約10cmごとにシルト質極細砂を重ねている。さらに、石室から60~70cmの箇所で土層が一端途切れていることから、石室に封土を被せた後に、さらに封土を被せて墳丘を形成したと考えられる。石室周辺の版築は丁寧であり、緻密に築造されたとともに、石室構築と墳丘築造が並行して行われたと考えられる。墳丘の両端には、幅約1.5m、深さ約20cmの周溝が掘削されており、黒褐色シルト質極細砂が堆積している。

【石室】

横穴式石室は、内法で幅約80cm、残存高約60cmを測り、主軸は東西方向であると想定される。開口方向は不明であるが、2・3号墳の事例から西向きの可能性がある。側壁は、小見頭大の兩輝性安山岩を4~5段に垂直に積んでおり、床面には安山岩の板石を敷いている。

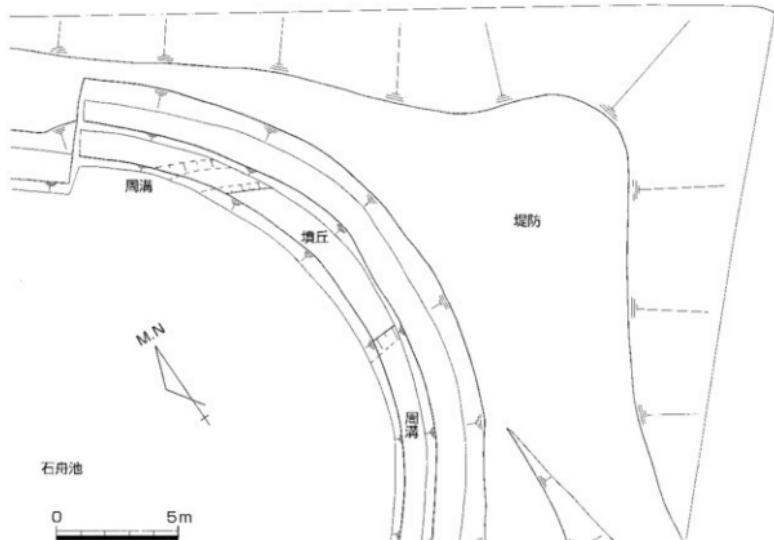
【遺物】

遺物は、石室や墳丘封土からは出土しておらず、墳丘を覆っていた堤防盛土内から出土している。そのため、厳密には1号墳に伴うものかどうかは不明である。

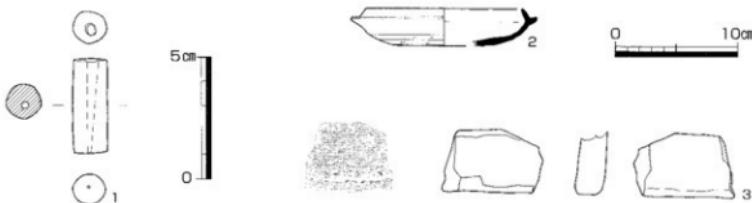


1	花崗土(岩防盛土) (2.5Y7-1) シルト質粘土砂	35	黒褐色(2.5Y5-2) シルト質粘土砂
2	明褐色(2.5Y6-2) シルト質粘土砂	36	暗褐色(2.5Y5-2) シルト質粘土砂
3	灰褐色(2.5Y7-3) シルト質粘土砂	37	朱褐色(2.5Y5-2) シルト質粘土砂
4	浅黄色(2.5Y8-6) シルト質粘土砂	38	浅黄色(2.5Y7-4) シルト質粘土砂
5	淡黄色(2.5Y8-4) シルト質粘土砂	39	紫褐色(2.5Y7-6) シルト質粘土砂
6	褐色(2.5Y6-1) シルト質粘土砂	40	紫褐色(2.5Y7-4) シルト質粘土砂
7	紫褐色(2.5Y6-6) シルト質粘土砂	41	赤褐色(2.5Y6-1) シルト質粘土砂
8	紫褐色(2.5Y6-5) シルト質粘土砂	42	新褐色(2.5Y3-1) シルト質粘土砂
9	灰褐色(2.5Y6-2) シルト質粘土砂	43	黒褐色(2.5Y5-1) シルト質粘土砂
10	第5層と同じ	44	黄褐色(2.5Y5-3) シルト質粘土砂
11	第5層と同じ	45	茶褐色(2.5Y5-2) シルト質粘土砂
12	褐色(2.5Y5-2) シルト質粘土砂	46	褐色(10YR3-3) シルト質粘土砂
13	第9層と同じ	47	草绿色(10YR2-2) シルト質粘土砂
14	褐灰色(2.5Y4-2) シルト質粘土砂	48	灰褐色(10YR4-2) シルト質粘土砂
15	褐灰色(2.5Y4-1) シルト質粘土砂	49	深褐色(10YR5-2) シルト質粘土砂
16	第9層と同じ	50	深褐色(10YR4-4) シルト質粘土砂
17	褐褐色(2.5Y5-4) シルト質粘土砂	51	オーブ褐色(2.5Y4-3) シルト質粘土砂
18	褐灰色(2.5Y4-1) シルト質粘土砂		
19	灰褐色(2.5Y6-2) シルト質粘土砂		
20	第19層と同じ		
21	褐色(2.5Y5-1) シルト質粘土砂		
22	褐色(2.5Y5-6) シルト質粘土砂		
23	第12層と同じ		
24	明褐色(2.5Y6-6) シルト質粘土砂		
25	第5層と同じ		
26	第21層と同じ		
27	第21層と同じ		
28	第21層と同じ		
29	褐色(2.5Y5-1) シルト質粘土砂		
30	第7層と同じ		
31	明褐色(2.5Y7-6) シルト質粘土砂		
32	灰褐色(2.5Y7-1) シルト質粘土砂		
33	灰白色(5Y7-1) シルト質粘土砂		
34	褐色(10YR4-4) シルト質粘土砂		
35	褐色(10YR4-3) シルト質粘土砂		
36	褐色(10YR5-2) シルト質粘土砂		
37	褐色(10YR5-3) シルト質粘土砂		
38	褐色(10YR7-4) シルト質粘土砂		
39	褐色(10YR7-5) シルト質粘土砂		
40	褐色(10YR7-6) シルト質粘土砂		
41	褐色(10YR7-7) シルト質粘土砂		
42	褐色(10YR7-8) シルト質粘土砂		
43	褐色(10YR7-9) シルト質粘土砂		
44	褐色(10YR7-10) シルト質粘土砂		
45	褐色(10YR7-11) シルト質粘土砂		
46	褐色(10YR7-12) シルト質粘土砂		
47	褐色(10YR7-13) シルト質粘土砂		
48	褐色(10YR7-14) シルト質粘土砂		
49	褐色(10YR7-15) シルト質粘土砂		
50	褐色(10YR7-16) シルト質粘土砂		
51	褐色(10YR7-17) シルト質粘土砂		
52	褐色(10YR7-18) シルト質粘土砂		
53	褐色(10YR7-19) シルト質粘土砂		
54	褐色(10YR7-20) シルト質粘土砂		
55	褐色(10YR7-21) シルト質粘土砂		
56	褐色(10YR7-22) シルト質粘土砂		
57	褐色(10YR7-23) シルト質粘土砂		
58	褐色(10YR7-24) シルト質粘土砂		
59	褐色(10YR7-25) シルト質粘土砂		
60	褐色(10YR7-26) シルト質粘土砂		
61	褐色(10YR7-27) シルト質粘土砂		
62	褐色(10YR7-28) シルト質粘土砂		
63	褐色(10YR7-29) シルト質粘土砂		
64	褐色(10YR7-30) シルト質粘土砂		
65	褐色(10YR7-31) シルト質粘土砂		
66	褐色(10YR7-32) シルト質粘土砂		

第23図 石舟池 1号地 塚丘断面図 (縮尺1/30)



第24図 石舟池1号墳 周辺地形測量図（縮尺1/200）

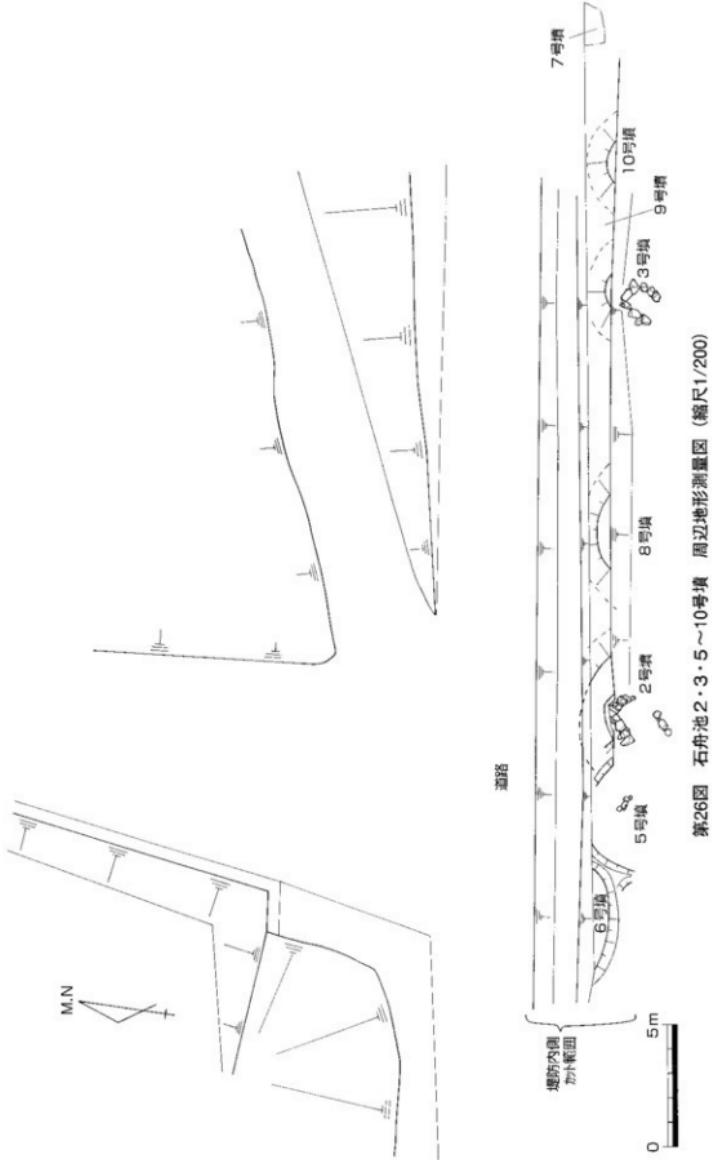


第25図 石舟池1号墳 出土遺物実測図（縮尺：管玉1/2, 土器1/4）

1は碧玉製管玉で、直径1.4cm、長さ3.9cmを測る。穿孔は片方のみから施している。周辺の類例としては、天神山古墳群でより小型のものが出土している。^{（参考文献202）} 2は須恵器杯で、口径12.8cm、器高3.1cmを測り、やや扁平な器形である。口縁部はやや長く延び、底部1/2に回転ヘラケズリが施されている。大阪府陶邑編年（明治1881）TK 209型式に相当すると考えられる。3は円筒埴輪の底部片と推測されるもので、内面にヨコハケ調整が認められる。

第4節 石舟池2号墳（第26～32図）

石舟池2・3・5～10号墳は、石舟池北辺の堤防の中央において密集している古墳群である。内側をひな境状に削られた堤防の断面や平坦部において、墳丘の断面や横穴式石室を確認した。墳丘断面については、掘削がこれ以上及ばないことから調査による掘削は行わなかったが、横穴式石室については現状保存が困難だったことから記録保存を目的とした発掘調査を実施した。



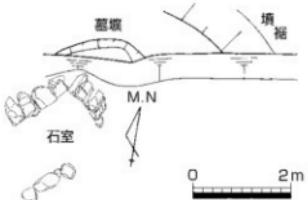
第26圖 石舟池2・3・5～10号坝 周辺地形測量図 (縮尺1/200)

【墳丘】

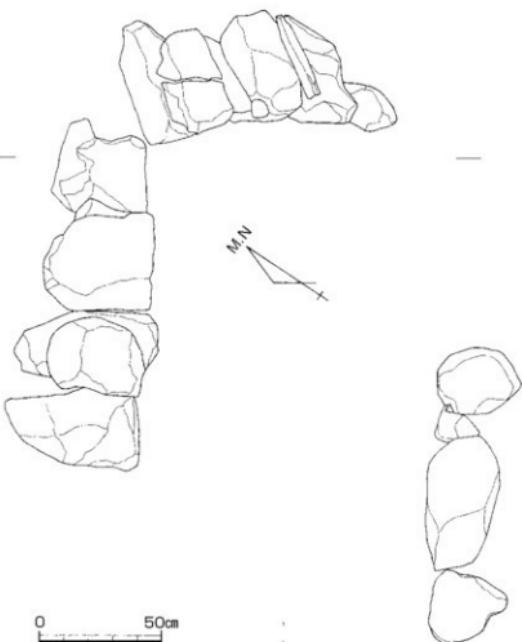
横穴式石室、墳丘裾および墓壙を検出した。墳丘の南側は失われ、北端は堤防内に埋もれ、北東の一部分を検出したにすぎない。墳丘北西では、5号墳と墳丘が重複しており、調査時の所見では2号墳が5号墳の上に覆っていたが、2号墳の北西墳裾は明確でなかった。わずかに検出した墳裾を元に、石室の想定中央部を中心とした場合、直径9m前後の円墳となる可能性がある。また、墳丘の大部分は削平されて失われており、版築等の状況を確認できなかった。石室床面より背面の墳裾が高いことから、旧地形は南向きの斜面であり、おそらく背面を削って墳丘を形成したと考えられる。なお、墳裾と石室の間において、墓壙北端をわずかに検出している。

【石室】

横穴式石室の奥壁側半分を検出した。窓道にあたる部分は、後世の削平により失われており、さらに石室を斜行する形で、東西方向に重機による搅乱の溝が石室を壊している。主軸は、磁北から55°東に傾いており、南北方向に向口している。規模は、幅1.2m、長さ2.6m以上を測るが、前方が欠損しているため、袖石の有無は確認できなかった。奥壁は3段、右側壁は奥壁から3石分が最高3段。左側壁は途中の3石が基底石のみ残っていた。奥壁の基底石

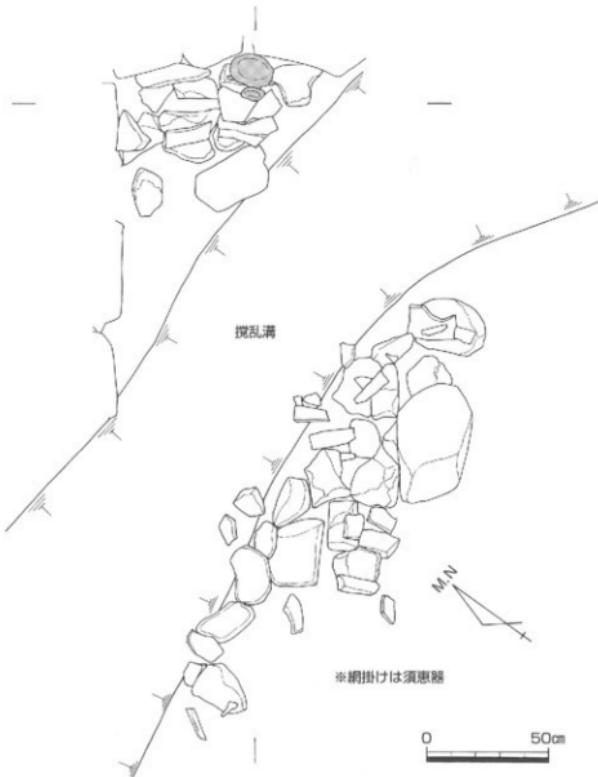


第27図 石舟池2号墳 平面図（縮尺1/100）



第28図 石舟池2号墳 石室上面実測図（縮尺1/20）

は、1石ではなく3石を並列している。基底石は50cm前後の大きめの石材であるが、2段目より上は30cm前後と小振りのものである。この石材は、地元の日山で産出する両輝性安山岩の塊石で、これを主に小口積みにしている。墓壙と石室の関係では、石室中央では基底石下端より上で墓壙の底面が検出されており、奥壁や側壁の基底石を置く部分は更に掘り進められていることが分かる。



第29図 石舟池2号墳 第2次床面実測図（縮尺1/20）

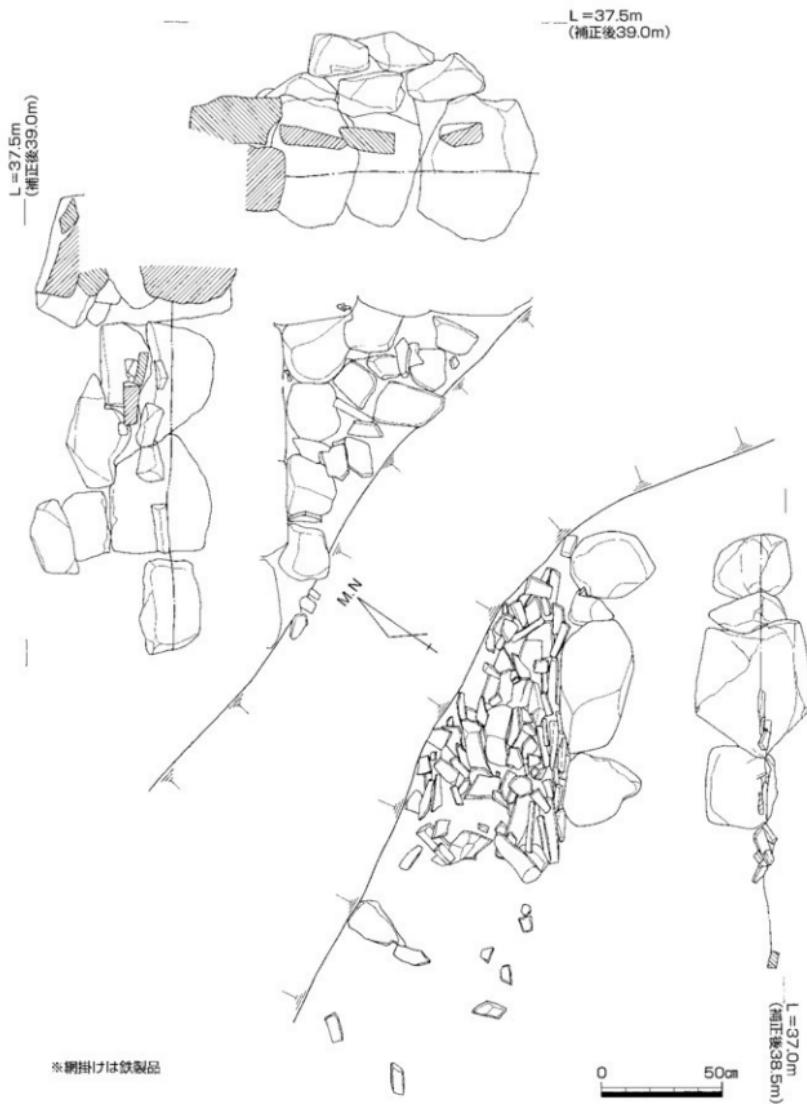
床面検出は3回実施したが、実際の床面は2面である。さらに、奥壁側と入口側の床面は重機による搅乱溝で分断された上に、入口側の床面が奥壁側より約10cm沈下していたことから、調査において奥壁側と入口側の床面を、それぞれ違う面で同時に検出することとなった。第30図のとおりである。なお、報告書掲載にあたっては、実測図は修正しているが、写真は調査時のみである。

(奥壁側)	(入口側)
第2次床面	第2次床面
第1次床面	第2次床面
墓壙底面	第1次床面

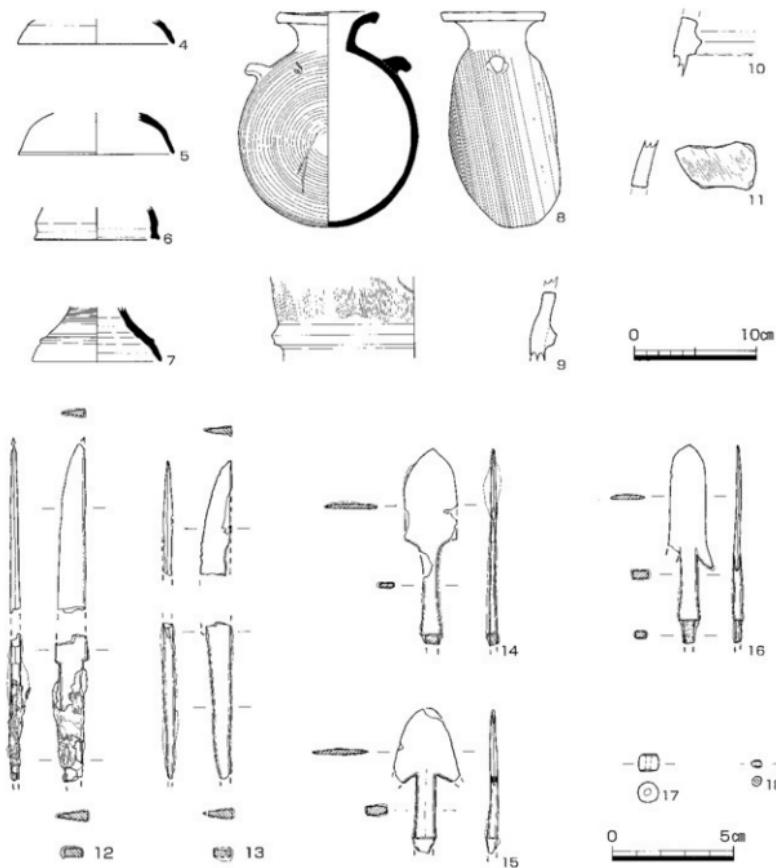
第30図 2号墳 床面状況

が、石舟池2号墳と直接関わるものではないと考えられる。

床面構造は、墓壙底面に安山岩板石を二重に敷いて第1次床面とし、その上に入頭大の塊石を並べて第2次床面としている。ただし、石材の使い分けは厳密でなく、両面でそれぞれ違う石材が混じっている。この床面の違いが、第1次と第2次の埋葬面を反映しているかどうかは不明である。第2次床面で須恵器提瓶が出土し、第1次床面で鉄製品や玉を検出しているが断定はできない。石材のうち、安山岩板石は付近で産出するものでなく、塊石は石室石材と同じ日山石である。なお、第1次床面の板石間で円等埴輪片が数点出土した



第31図 石舟池2号墳 石室および第1次床面実測図（縮尺1/20）

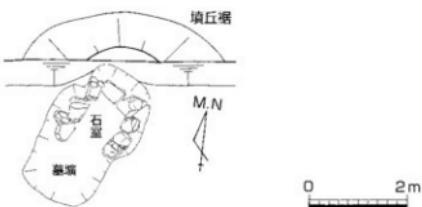


第32図 石舟池2号墳 出土遺物実測図（縮尺：土器1/4、鉄製品・玉1/2）

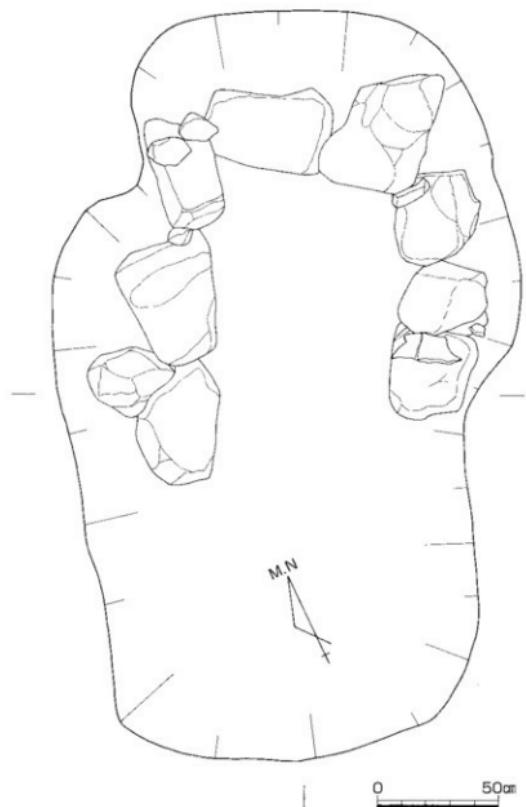
【遺物】

石室から須恵器、円筒埴輪片、鉄製品、ガラス玉が出土している。

4は須恵器杯蓋の口縁部片で、復元口径は12.8cmである。5は須恵器高杯の蓋の可能性がある口縁部片で、復元口径は12.5cmである。6は須恵器短頸壺の蓋の口縁部片で、復元口径10cmを測り、口縁端部に平扣面がある。7は須恵器壺の脚部片で、外面に凸線とカキ目が巡っている。8は須恵器捕瓶で、完形品である。口頭部はラッパ状に大きく開き、邊部に平坦面をもつが、把手は退化して鉤形になっている。体部表面にカキ目、裏面に回転ヘラケズリが施されている。これら須恵器は、T K43型式に相当すると考えられる。9～11は円筒埴輪の体部片で、円形の透かしや断面台形のタガをもち、外面の調整はタテハケである。堅く焼き締まっているが、土師質の色調を呈する。9の復元最大径は23.4cmを測り、小型である。川西編年（川西1978）のIV～V期に相当すると考えられる。



第33図 石舟池3号墳 平面図 (縮尺1/100)



第34図 石舟池3号墳 墓壇および石室上面実測図 (縮尺1/20)

12・13は刀子である。どちらも刀身中ほどが欠損しており、全長は不明である。12は両開で、茎部は柄の木質が残っており、関部から茎尻に向けて幅を減じてゆく。13は関部の依存状況が悪いが、刃側のみの片開を想定しておく。茎部は関部から茎尻に向けて幅を減じている。

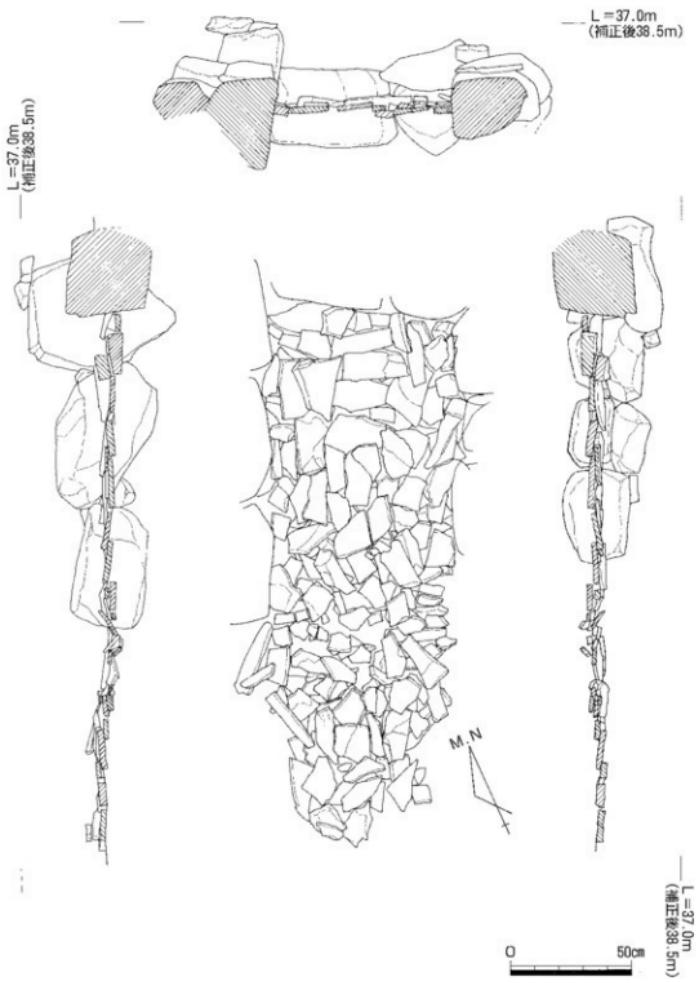
14～16は鉄鎌である。いずれも茎関が直角関の半根有頭鎌である。14は鎌身部形態が柳葉式で、鎌身関はナデ関である。15は腸抉三角形式で、他の2点に比べてやや重厚なつくりである。腸抉は小孔による割付の後に、2方向から切り込まれている。16は腸抉柳葉式である。腸抉は15とは異なり1方向から切り込まれ、端部は外反する。茎関が直角関であることから、これらの鉄鎌の時期はTK43型式～TK209型式併行期に位置づけられる（岡田6）。

17・18はガラス玉である。

第5節 石舟池3号墳 (第33～36図)

【墳丘】

横穴式石室および墳丘裾を検出した。墳丘の大半は失われ、北側の一部分を検出したにすぎない。墳丘北東に9号墳の石室残骸と接しているが、重複関係は不明である。検出した墳裾を元に、墓壇中央を中心とした場合、直径6～7mの円墳となる。また、墳丘の大部分は削平されて失われており、版築等の状況を確認できなかった。石室床面より背面の墳裾が高いことから、旧地形は南向きの斜面であり、背面を削って墳丘を形成したと考えられる。



第35図 石舟池3号墳 石室実測図 (縮尺1/20)

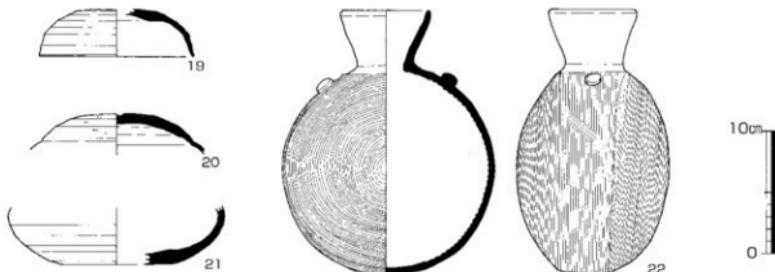
【石室】

横穴式石室の奥壁側半分を検出した。羨道にあたる部分は、後世の削平により失われているが、大きくなっていると考えられる。主軸は、磁北から 25° 東に傾いており、南南西方向に開口している。規模は、幅0.8m、長さ2.2m以上を測り、床面の状況から無袖式の可能性があるが、断定はできない。奥壁は2石で構成される基底石、両側壁も奥壁から3石分の基底石しか残っていないかった。基底石の大きさは、2号墳と同じ50cm前後の石材で、地元の日山で産する兩輝性安山岩である。墓壙と石室の関係では、石室中央では基底石下端より上で墓壙の底面が検出されており、奥壁や側壁の基底石を置く部分は更に掘り進められていることが分かる。墓壙は、南北3m、東西1.9mを測る隅丸の不整な長方形である。石室床面には、墓壙底面の上に安山岩板石を二重に敷き詰めており、2号墳の第1次床面と同様な構造である。この安山岩板石は、付近で産出しないものである。

【遺物】

石室から須恵器が出土しており、奥壁北側から提瓶が原位置を保って検出されている。

19は須恵器杯蓋の口縁部片で、復元口径は12.8cmを測り、頂部1/2に回転ヘラケズリが施されている。20は須恵器蓋の可能性がある破片で、外側に回転ヘラケズリが認められる。21は須恵器壺の底部片で、外側に回転ヘラケズリが認められる。22は須恵器提瓶で、完形品である。口頭部は緩やかに逆「ハ」の字形に開き、端部を丸くおさめ、把手は退化してボタン形になっている。体部表の全面にカキ目が施されている。これら須恵器は、TK209型式に相当すると考えられる。



第36図 石舟池3号墳 出土遺物実測図（縮尺1/4）

第6節 石舟池4号墳（第37・38図）

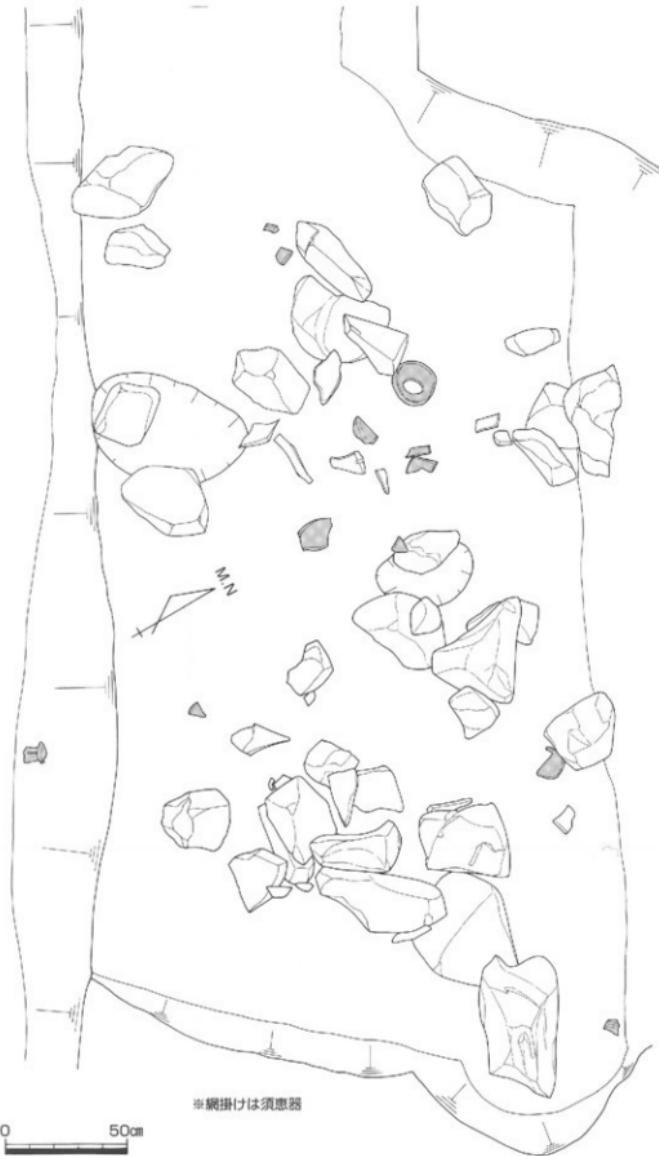
石舟池4・11号墳は、2・3・5～10号墳と約50m離れて、石舟池北辺の堤防の西側中央において確認された。内側をひな壇状に削られた堤防の断面や平坦部において、4号墳の横穴式石室および11号墳の墳丘裾を確認した。

【墳丘】

調査範囲内では確認できなかった。おそらく墳丘背面にあたる堤防内部には墳丘裾が残っていると想定されるが調査対象範囲外である。

【石室】

横穴式石室は全壊しており、散乱する石材と抜取穴を確認するとともに、須恵器がまとまって出土した。石舟池4号墳は、搅乱が著しい。石材の抜取穴は、約65cm×約45cmのものと、約40cm×30cmの2基を確認しており、抜取穴の中心を結んだ直線は、磁北から 58° 東へ振っている。旧地形は南向き斜面であることから、南西または南東に開口していた可能性がある。石材は、2・3号墳と同様に、兩輝性安山岩と安山岩板石が認められる。

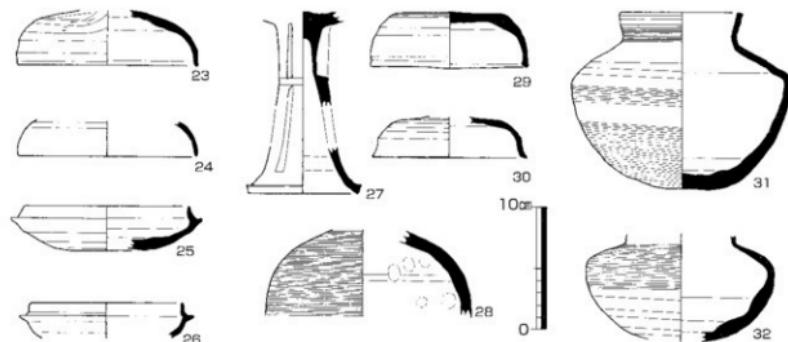


第37図 石舟池4号墳 石室平面図（縮尺1/20）

【遺物】

散乱していた石室石材とともに須恵器が出土している。

23・24は須恵器杯蓋の口縁部片で、復元口径はともに14.6cmを測り、23の頂部1/2に回転ヘラケズリが施されている。25・26は須恵器杯で復元口径は13.5cmと12.2cmを測る。口縁部はやや長く延び、25の底部1/2に回転ヘラケズリが施されている。27は須恵器高杯の脚部片で、いわゆる長脚二段透かしのタイプであるが、下段は方形の透かし部分が欠損している。透かしは3方向から入れられているが、上段の透かしは貫通しておらず、脚端部も大きく広がっておらず、退化傾向が著しい。28は須恵器壺の体部上半と想定される破片で、球形の体部外面にカキ目が施されている。29は須恵器短頸壺の蓋の破片で、復元口径は13cmを測り、頂部にはカキ目が施されている。胎土・焼成および色調から31と組み合う可能性がある。30も須恵器短頸壺の蓋である可能性があるが、29と口縁端部や頂部の調整が異なっていることから断定はできない。復元口径は12.5cmを測り、頂部には回転ヘラケズリが施されている。31・32は須恵器短頸壺で31はほぼ完形品、32は2/3ほどの残りである。口径は31が10cm、32が推定で8.5cmと31より小型である。外面に回転カキ目が施されており、31は底部にまで及ぶが、32の底部には回転ヘラケズリの調整が残されている。これら須恵器は、TK209型式の古い段階に相当すると考えられる。



第38図 石舟池4号墳 出土遺物実測図（縮尺1/4）

第7節 石舟池5号墳（第39・40図）

【墳丘】

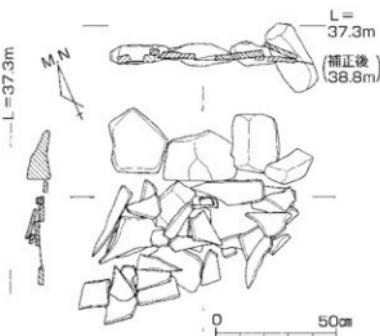
横穴式石室と墳丘裾を検出した。墳丘北側のみが残っており、北端は堤防内に埋もれている。墳丘東側では、2号墳と墳丘が重複しており、調査時の所見では2号墳が5号墳の上に覆っていた。墳裾から復元される墳形は、直径5～6mの円墳となる。また、墳丘の大部分が削平されていたことから、版築等の状況は確認できなかった。遺物も出土しなかった。

【石室】

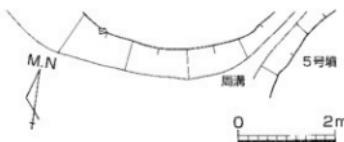
横穴式石室の奥壁基底石が3石と床面の奥壁寄りを検出したにすぎない。主軸は、磁北から23° 東へ振っており、南南西へ開口していたと考えられる。奥壁の石材は両輝性安山岩、床面の石材は安山岩の板石であり、2・3号墳と共に石材の使い分けをしている。



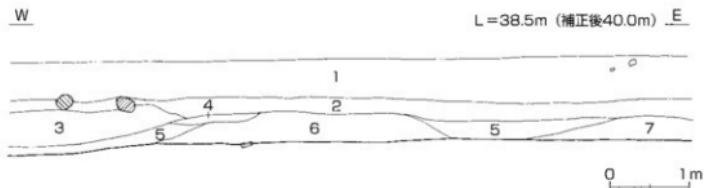
第39図 石舟池5号墳 墳丘平面図（縮尺1/100）



第40図 石舟池5号墳 石室実測図（縮尺1/20）



第41図 石舟池6号墳 墳丘平面図（縮尺1/100）



1 黄色および白色の斑点状粘質土
2 黄灰色粘質土
3 黄灰色粘質土（第2層より粗い）
4 黄灰色粘質土（第2層より粗い、第3層との違い不明）
5 黑褐色シルト質細砂（有機質を含む、周溝埋土）
6 黄褐色白色粘質土（安山岩板石を含む、填丘）
7 5号填填丘

第42図 石舟池6号墳 墳丘断面図（縮尺1/60）

第8節 石舟池6号墳（第41・42図）

【墳丘】

墳丘裾と断面を検出した。墳丘南端のみを確認しており、他は堤防内に埋もれている。墳丘南東では、5号墳と接して周溝を共有している。墳裾から復元される墳形は、直径8m前後の円墳となる。また、墳丘の大部分が削平されていたことから、断面観察（第6層）でも版築等の状況は確認できなかった。なお、第5層は周溝または墳裾に堆積していた土層と考えられる。

【石室】

石室は、堤防内に埋もれており確認できなかったが、安山岩板石を墳丘断面で確認している。

【遺物】

墳崩で、土師器片と須恵器片が出土しているが、細片のため同化できなかった。

第9節 石舟池7号墳

【墳丘】

10号墳から東へ約3m離れたところで、南北0.5m以上、東西約3mの範囲で、石室の石材とみられる同様性安山岩と安山岩板石が散乱していた。4号墳と同様に古墳の痕跡と考えられるが、詳細は不明である。遺物も出土しなかった。

【石室】 上記のとおり

第10節 石舟池8号墳（第43図）

【墳丘】

北側の墳丘裾のみを検出でき、北端は堤防内に埋もれている。石室も含めて、壊されて残っていない。墳丘西側で2号墳が近く、周溝を共有していた可能性もあるが確認できない。墳裾から復元される墳形は、直径7m前後の円墳となる。また、墳丘の大部分が削平されていたことから、版築等の状況は確認できなかった。遺物も出土しなかった。

第11節 石舟池9号墳（第26・45図）

【墳丘】

3号墳と10号墳の間において、南北1m以上、東西約2mの範囲で、石室の石材とみられる両輝性安山岩と遺物が散乱していた。4号墳と同様に古墳の痕跡と考えられるが、詳細は不明である。

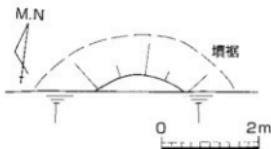
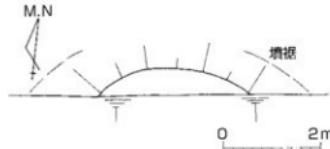
【遺物】

33は須恵器杯の口縁部片で、復元口径は12.8cmを測り、口縁部はやや長く延びる。34は須恵器短頸壺の口縁部片である。35は須恵器短頸壺の破片で、復元口径は7.4cmと小型で、肩の屈曲が強い。底部外面に回転ヘラケズギが施されている。36は須恵器壺の体部肩附近の破片である。これら須恵器は、TK43型式に相当すると考えられる。37はU字鋏先である。基部から刃先に向けてほぼ同じ幅である。着柄部分が広がっており、基部で破損している。また、補修を試みたのか、広がった部分を叩いた痕跡が見られる。

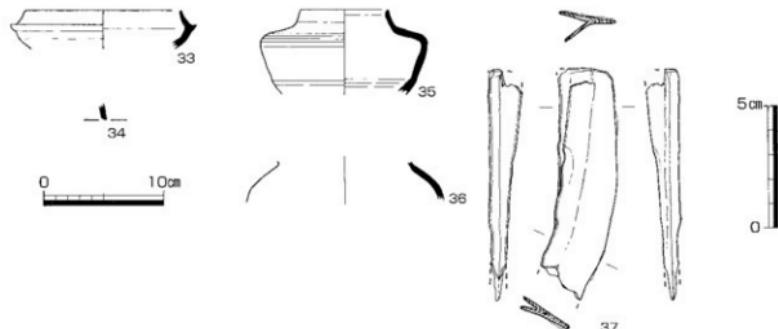
第12節 石舟池10号墳（第44図）

【墳丘】

北側の墳丘裾のみを検出できただけである。石室も含めて墳丘の大部分は、壊されて残っていない。墳



第43図 石舟池8号墳 墳丘平面図（縮尺1/100） 第44図 石舟池10号墳 墳丘平面図（縮尺1/100）



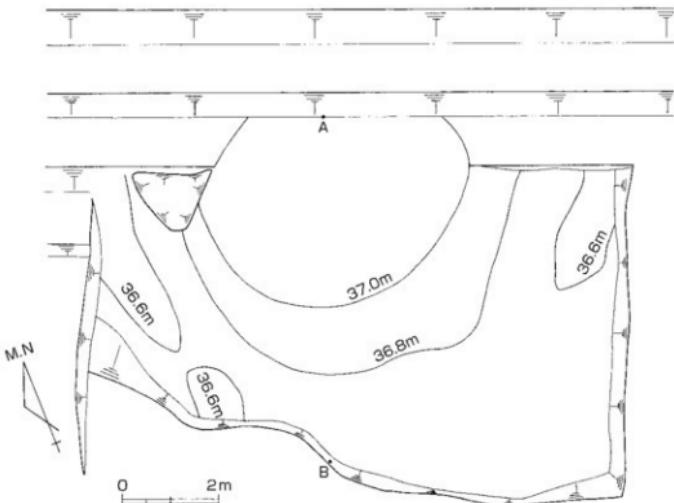
第45図 石舟池9号墳 出土遺物実測図（縮尺：土器1/4、鉄製品1/2）

丘西側で3号墳が近く、周溝を共有していた可能性もあるが確認できない。墳裾から復元される墳形は、直径7m前後の円墳となる。また、墳丘の大部分が削平されていたことから、版築等の状況は確認できなかった。遺物も出土しなかった。

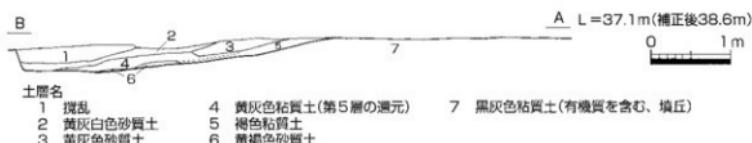
第13節 石舟池11号墳（第46・47図）

【墳丘】

墳丘南側で、全体の約3/5を検出し、残りは堤防内に埋もれている。ただし、墳丘上部は石室も含めて削平されて残っていなかった。墳丘東側および西側では周溝が認められるが、南側では不明瞭となっており、南向き斜面において背面を削って墳丘を成形したことが分かる。墳丘は直徑約10.6mの円墳であり、古墳群中において最大規模を誇る。なお、墳丘の大部分が削平されていたことから、版築等の状況は確認できなかった。また、遺物も出土しなかった。



第46図 石舟池11号墳 墳丘平面図（縮尺1/100）



第47図 石舟池11号墳 墳丘覆土断面図（縮尺1/60）

第14節 横管付近の調査（第48～51図）

石舟池北辺の堤防西端において、堤防を分断する1号横管設置工事に伴う立会調査を実施した。その結果、堤防内部において、安山岩質凝灰岩の石列と安山岩板石の集石を検出した。

【石列】

堤防基底部において、地山をわずかに掘り込んだ凹地を石列で囲む遺構を確認した。堤防の土層観察から、この石列は石舟池堤防築造以前のものと考えられる。復元される旧地形では、古墳群が立地する東側丘陵と、石舟池西側の丘陵に挟まれた谷に相当する。約30cm大の安山岩質凝灰岩を1～2段積んでおり、延長2m以上の石列が北東から南西にやや不整な弧状に延びる。弧の内側にあたる地山は深さ約15cmの浅い皿状に掘りくぼめられている。

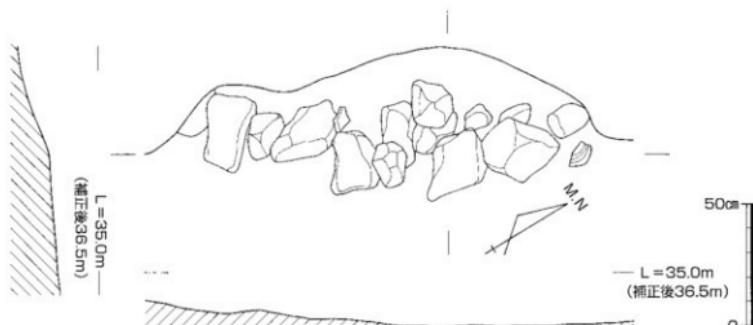
石列付近において若干の遺物が出土している。38・39は上師質土器杯の破片で、復元口径11.2cmと14.4cmを測り、39の底面には板ナデが認められる。38は13世紀後半、39は13世紀のものである。40・41は須恵質土器鉢の破片である。42は土師質の平瓦片で、両面に縄叩き痕が残る。43は砂岩の砥石片である。これらは、おおむね13世紀のものと考えられ、中世前半においては堤防がまだ築造されていなかったと考えられる。また、石列については、谷に位置することを考慮すると、水場的な性格を有するものと推定される。

【集石】

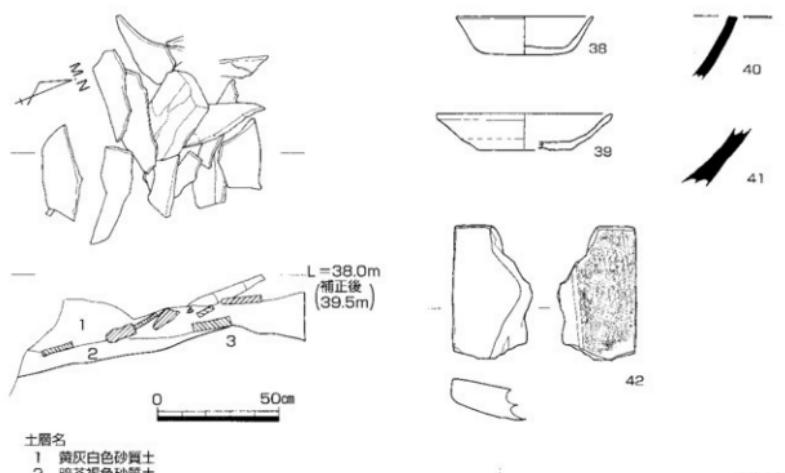
堤防内部の中位において、安山岩板石の集石を確認した。約1m四方の範囲において、約40cmの長さの板石を少しづつ重ねて集めている。堤防築造時の盛土上に置かれたものと考えられる。出土遺物もなく、集石の目的は不明である。



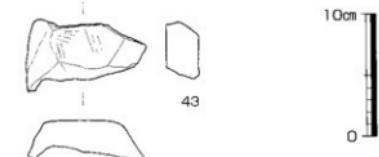
第48図 ユル付近 平面図（縮尺1/200）



第49図 石列遺構 平面・断面図 (縮尺1/20)



第50図 集石遺構 平面・断面図 (縮尺1/20)



第51図 石列遺構 出土遺物実測図 (縮尺1/4)

第15節 三谷石舟古墳 周辺部の調査（第52～54図）

石舟池の底において、堆積しているヘドロを除去する浚渫工事が予定されていた。工事範囲は三谷石舟古墳の墳丘に及ばないものの、古墳に付随する遺構が存在する可能性があることから、墳丘外側にトレントレンチ調査を実施することになった。これは、石舟池を古墳の周溝と考えた旧説に対する検証でもあった。

【トレントレンチ】

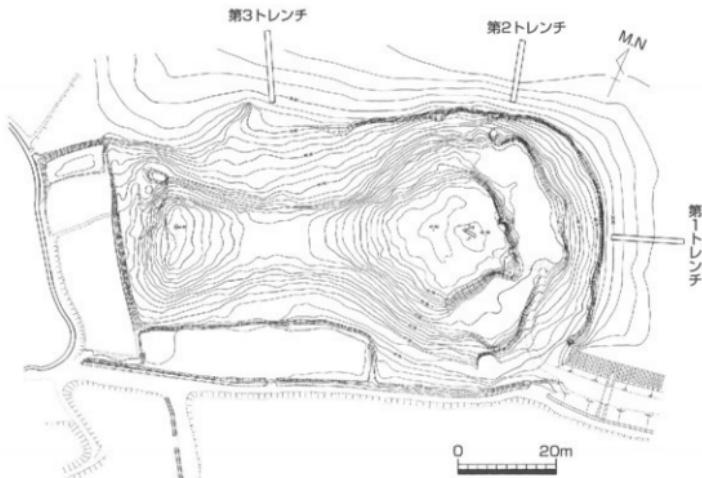
第1トレントレンチは、後円部東側に接して、古墳の主軸にほぼ合わせて設定した。第2トレントレンチは後円部北側に接して、第3トレントレンチは前方部北側に接して、それぞれ古墳の主軸にほぼ直交する形で設定した。トレントレンチ幅は1mで、長さは第1・3トレントレンチが15m、第2トレントレンチが13mである。地山である白色凝灰岩が露出するまで掘削したが、どのトレントレンチも約30cmで地山に達し、古墳に伴う遺構等は検出できなかつた。旧地形は、東および北へゆるやかに傾斜する斜面である。堆積層は、上層にヘドロがあり、その下に粘質土層やバイラン土層が堆積していた。

以上のことから、石舟池は古墳の周溝ではないことが明らかになった。また、古墳南側に谷が存在し、古墳西端ではさらに西側の丘陵と統いていることから、三谷石舟古墳が西から東へのびる丘陵の先端付近の頂部を利用して築造されていると考えられる。

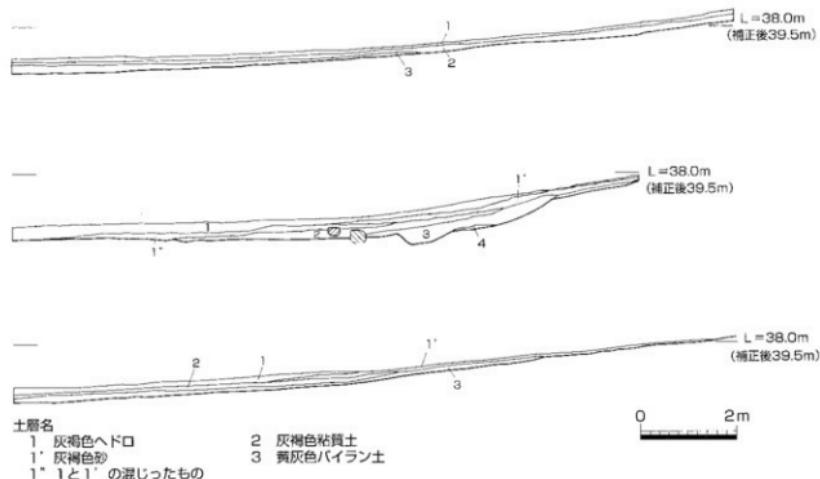
【遺物】

図化できた7点を報告する。48～50は第2トレントレンチのヘドロ層、45は第3トレントレンチのヘドロ層から出土した。44・46は後円部の裾付近で、47は池底で表採したものである。

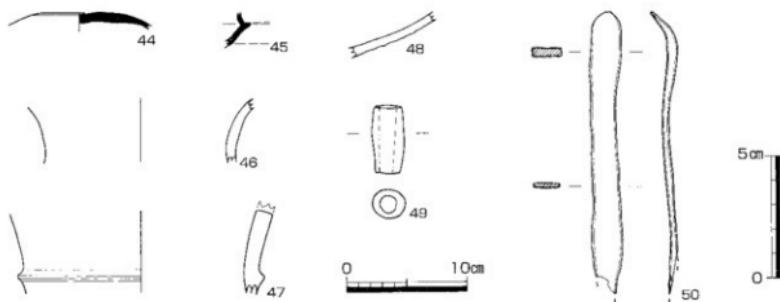
44は須恵器杯蓋で、頂部1/3に回転ヘラケズリが施されている。45は須恵器杯で、やや長めの口縁部が立ち上がる。44・45とも、石舟池古墳群と同じTK209型式でも古い段階のものと考えられる。46は土師器広口壺の可能性がある頸部片である。47は円筒埴輪の体部片で、復元径は20.4cmを測り、タガが巡るとともに、透かしが切り込まれている。46・47とも摩滅が著しいが、古墳時代のものである。48は土師質土器鍋の底部片で、外面に格子目の叩き痕が残されており、中世のものである。49は陶器の土鍤で、時期は不明である。50は鏂状の工具である。扁平な頸部が刃部手前で厚みを増した後、反るよう屈曲し鋒に至る。刃部は鋒部分にわずかに形成される。



第52図 三谷石舟古墳周辺トレントレンチ配置図（縮尺1/1,000, 國木1992に加筆）



第53図 三谷石舟古墳周辺トレンチ土層図（縮尺1/100）



第54図 三谷石舟古墳周辺トレンチ出土遺物実測図（縮尺：土器1/4, 鉄製品1/2）

第3章　まとめ

第1節　石舟池古墳群の概要

石舟池古墳群は、堤防内に埋没していた11基の古墳を今回の調査で確認することができた。調査の対象が堤防内側の法面に限られていたため、築造された古墳の数は、消滅したものも含めて、かなりの数に及ぶと想定される。確認できた遺構は、墳丘部の一部、横穴式石室の基底石や残骸といった状態で良好ではなかった。また、出土遺物も限られた状態ではあるが、本節ではこれまで報告した内容を簡略書きにして、まとめとしたい。

① 古墳群は、東西にのびる丘陵の南斜面に密集して築造されており、直徑10m以下の小型円墳によって構成されている。密集度が高く、墳丘を接するだけではなく、重複しているものも見られる。確認された11基は、まとまりから大きく3つのグループに分けることができた。東から1号墳のグループ、2・3・5～10号墳のグループ、4・11号墳のグループである。

② 主体部は、小型の横穴式石室を採用しており、無袖式の可能性がある。壁面の石材には地元日山で産出する兩押性安山岩の塊石を、床面には付近では産出しない安山岩板石を使用している。石材の選択方法は、西へ約1km離れた平石上2号墳でも同様である。高松平野でも、三谷地域に限定されることから、この地域の横穴式石室の特徴である。

③ 出土した須恵器がTK43型式～TK209型式であることから、6世紀後半～7世紀初頭に古墳群が築造されたと考えられる。しかも、須恵器の型式差が少ないと見られる。比較的短期間において相次いで築造されたようである。小型の石室であること、須恵器の型式差が少ないと見られる。出土遺物の量も少ないと見られる。追葬の回数は少なかったと想定される。古墳の築造順序については、まず2・9号墳がTK43型式併行期に築造され、次いで1・3・4号墳がTK209型式併行期に築造されている。なお、2号墳の墳丘が5号墳の墳丘を覆っていたとする調査時の所見に従えば、5号墳は2号墳より先行することになる。他の古墳については、出土遺物がないため、前後関係は明らかでない。

第2節　石舟池古墳群出土の円筒埴輪について

石舟池2号墳の石室床面から出土した円筒埴輪片は、報告のとおり川西編年IV～V期に相当すると考えられる。石舟池底から出土した円筒埴輪片も摩滅が著しいが、復元形から同様なものと考えられる。これら円筒埴輪片は、石舟池古墳群の築造時期（TK43型式～TK209型式）と離れているだけでなく、三谷石舟古墳が和田編年（高木1987）の4期に相当すると考えられていること（大久保1996）から、三谷石舟古墳の築造年代とも離れている。また、周辺にも川西編年IV～V期の円筒埴輪をもつ古墳が存在していない。そこで問題となるのは、円筒埴輪片がどこから石室床面に混入したかである。可能性がある点では、石舟池古墳群が立地する同じ丘陵上に当該期の古墳が存在するとの想定である。ただし、その割には破片数が少なく、2号墳の石室床面に集中している点で疑問が残る。もう一方は、石室床面の安山岩板石に紛れて運ばれたとする想定である。この安山岩板石の产地については、高松平野の北部にあたる石清尾山、屋島や五色台などが推定できるが、いずれにせよ遠方である。また、三谷石舟古墳の墳丘側縁に安山岩板石を積んだ「基礎状施設の外護列石」が存在していること（岡本2002）から、ここから板石を運んだ可能性は高いが、円筒埴輪片と三谷石舟古墳の年代とは合致しない。いずれにせよ現時点では、円筒埴輪の出自については不明であり、今後の周辺における調査が期待される。

第3節　三谷石舟古墳周辺調査の概要

三谷石舟古墳の墳裾で実施した調査で明らかになった点は、次の2点である。

① 石舟池は古墳の周溝ではないことである。古墳南側に谷が存在し、古墳西端ではさらに西側の丘陵へと地形が続いていることから、三谷石舟古墳が西から東へのびる丘陵の先端付近の頂部を利用して築造されたものと考えられる。

② 箱式石棺墓である石舟池1号石棺が確認されたことにより、三谷石舟古墳に伴う周辺埋葬施設が存在する可能性が指摘できることである。ただし、箱式石棺の詳細な年代が不明であるため、ここでは可能性の範囲にとどめたい。

第4節 石舟池3号墳の横穴式石室移築について

調査期間中に現地を見学した仏生山小学校関係者から、埋蔵文化財を学校教育や地域振興に役立てたいと要望があったことから、本市教委は土地改良区とも協議を行ない、もっとも残りが良い3号墳の石室を同校へ移築することになった。また、2号墳の石室石材も補填材として使用することになった。移築は当時の6年生児童130人があたり、2日間にわたって校庭内で石室復元作業をしたところ、予定どおりに横穴式石室の基底部を再現することができた。ちょうど創立百周年を迎えた同校では、児童が地域の遺跡や資料館を調べて年表を作るなど、石室移築に備えて熱心に郷土学習に取り組まれていた。

参考文献（五十音順）

- 大久保徹也1995「讃岐」「全国古墳編年集成」石野博信編 雄山閣出版
川西宏幸1978「円筒埴輪総論」「考古学雑誌」第64巻第4号
川雄聰1992「三谷石舟池古墳群」「香川県埋蔵文化財調査年報 平成3年度」香川県教育委員会
本田都部会郡誌編纂部1940「木田郡誌」
木光甲正1993A「石舟池古墳群」「香川県埋蔵文化財調査年報 平成4年度」香川県教育委員会
木光甲正1993B「石舟池古墳群」「高松市内埋蔵文化財試掘調査概報（平成3年度、4年度）」高松市教育委員会
問義則1986「古墳時代後期鐵劍の分類と編年」「日本古代文化研究」第3号 PHALANX—古墳文化研究会
國木健司1992「三谷石舟古墳測量調査報告書」高松工芸高校郷土史研究会
田辺昭三1981「須恵器大成」角川書店
松田重治・田所希代江2001「天神山古墳群」二木町教育委員会
三谷郷土史編集委員会1988「三谷郷土史」
山本英之1990「三谷石舟池1号石棺」「香川県埋蔵文化財調査年報 平成元年度」香川県教育委員会
山本英之1991「石舟池古墳」「香川県埋蔵文化財調査年報 平成2年度」香川県教育委員会
和田晴吾1987「古墳時代の時期区分をめぐって」「考古学研究」第34巻第2号

番号	報告書 登録番号	品種	計量(㌘)	調査		色調	胎土	備考	
				外観	内観				
25	1	管土	1.4	外白：回転ナメ、底部1/2回軋ヘラケズリ 内白：回転ナメ		外面：灰N4/ 内面：灰N4/		審	
25	2	加藤器 柱	12.8	(3.1)		外面：灰N4/ 内面：灰N4/		審	
25	3	円筒埴輪	13.2	(3.2)	外面：ヨコナメ、鉛錆压痕 内面：ヨコナメ	外面：灰N4/ 内面：灰N4/	外面：灰N4/ 内面：灰N4/	審	
25	4	加藤器 柱	12.8	(2.0)	外面：回転ナメ 内面：回転ナメ	外面：灰N4/ 内面：灰N4/	外面：灰N4/ 内面：灰N4/	審	
25	5	加藤器 柱	12.5	(3.4)	外面：回転ナメ 内面：回転ナメ	外面：灰N4/ 内面：灰N4/	外面：灰N4/ 内面：灰N4/	審	
25	6	加藤器 柱	10.0	(2.7)	外面：回転ナメ 内面：回転ナメ	外面：灰N4/ 内面：灰N4/	外面：灰N4/ 内面：灰N4/	審	
25	7	圓筒埴 輪	10.6	(4.5)	外面：回転ナメ、灰白目 内面：回転ナメ	外面：灰N4/ 内面：灰N4/	外面：灰N4/ 内面：灰N4/	外観：問題1条	
32	8	加藤器 柱	8.0	体部厚 14.7	17.6	外面：回転ナメ 内面：回転ナメ	外面：灰N4/ 内面：灰N4/	審	
32	9	円筒埴輪	盛大径 23.4	(7.0)	外面：タテナメ、ヨコナメ	外面：明赤N4/ 内面：明赤N4/	外面：明赤N4/ 内面：明赤N4/	直線下の右美、 透かし	
32	10	円筒埴輪		(4.8)	内面：ヨコナメ	外面：灰N4/ 内面：灰N4/	外面：灰N4/ 内面：灰N4/	円形透かし	
32	11	円筒埴輪		(4.0)	外面：タテナメ 内面：ナメ	外面：明赤N4/ 内面：明赤N4/	外面：明赤N4/ 内面：明赤N4/	円形透かし	
32	12	刀子	瓦5 6.1	幅5 1.3	厚5 0.4	外面：灰N4/ 内面：灰N4/	外面：灰N4/ 内面：灰N4/	直線下の右美、 透かし	
32	13	刀子	瓦5 6.2	幅5 1.1	厚5 0.7	外面：灰N4/ 内面：灰N4/	外面：灰N4/ 内面：灰N4/	直線下の右美、 透かし	
32	14	鉄錆	瓦5 8.1	幅5 2.2	厚5 0.2	外面：回転ナメ 内面：回転ナメ	外面：灰N4/ 内面：灰N4/	直線下の右美、 透かし	
32	15	鉄錆	瓦5 8.3	幅5 2.3	厚5 0.2	外面：回転ナメ 内面：回転ナメ	外面：灰N4/ 内面：灰N4/	直線下の右美、 透かし	
32	16	鉄錆	瓦5 8.2	幅5 1.5	厚5 0.2	外面：回転ナメ 内面：回転ナメ	外面：灰N4/ 内面：灰N4/	直線下の右美、 透かし	
32	17	ガラス玉	瓦5 6.9	幅5 0.7	厚5 0.5	外面：回転ナメ 内面：回転ナメ	外面：灰N4/ 内面：灰N4/	直線下の右美、 透かし	
32	18	ガラス玉	瓦5 9.4	幅5 0.8	厚5 0.4	外面：回転ナメ 内面：回転ナメ	外面：灰N4/ 内面：灰N4/	直線下の右美、 透かし	
36	19	圓筒埴 輪	12.8	(3.8)	外面：回転ナメ、底部1/2回軋ヘラケズリ 内面：回転ナメ	外面：灰N4/ 内面：灰N4/	外面：灰N4/ 内面：灰N4/	審	
36	20	圓筒埴 輪		(3.4)	外面：回転ナメ、底部1/2回軋ヘラケズリ 内面：回転ナメ	外面：灰N4/ 内面：灰N4/	外面：灰N4/ 内面：灰N4/	審	
36	21	圓筒埴 輪		(9.2)	外面：回転ナメ、底部1/2回軋ヘラケズリ 内面：回転ナメ	外面：灰N4/ 内面：灰N4/	外面：灰N4/ 内面：灰N4/	審	
36	22	圓筒埴 輪	7.0	体部厚 17.4	21.6	外面：回転ナメ、去留カキ目、裏側回軋ヘラケズリ後方 内面：回転ナメ	外面：灰N4/ 内面：灰N4/	外面：灰N4/ 内面：灰N4/	審
36	23	圓筒埴 輪	11.6	4.6	外面：回転ナメ、面部1/2回軋ヘラケズリ 内面：回転ナメ	外面：灰N4/ 内面：灰N4/	外面：灰N4/ 内面：灰N4/	審	
38	24	圓筒埴 輪	14.6	(2.9)	外面：回転ナメ 内面：回転ナメ	外面：灰N4/ 内面：灰N4/	外面：灰N4/ 内面：灰N4/	審	
38	25	圓筒埴 輪	13.5	3.6	外面：回転ナメ、底部1/2回軋ヘラケズリ 内面：回転ナメ	外面：灰N4/ 内面：灰N4/	外面：灰N4/ 内面：灰N4/	審	
38	26	圓筒埴 輪	12.2	(1.9)	外面：回転ナメ 内面：回転ナメ	外面：灰N4/ 内面：灰N4/	外面：灰N4/ 内面：灰N4/	審	
38	27	圓筒埴 輪	8.9	(1.60)	外面：回転ナメ 内面：回転ナメ	外面：灰N4/ 内面：灰N4/	外面：灰N4/ 内面：灰N4/	脚部：沈淀1条、透かし2段3方向	
38	28	圓筒埴 輪		(7.1)	外面：回転ナメ、オホ目 内面：回転ナメ	外面：灰N4/ 内面：灰N4/	外面：灰N4/ 内面：灰N4/	審	
38	29	圓筒埴 輪	13.0	4.6	外面：回転ナメ 内面：回転ナメ	外面：灰N4/ 内面：灰N4/	外面：灰N4/ 内面：灰N4/	審	
38	30	圓筒埴 輪	12.5	(3.4)	外面：回転ナメ、通常回軋ヘラケズリ 内面：回転ナメ	外面：灰N4/ 内面：灰N4/	外面：灰N4/ 内面：灰N4/	審	
38	31	圓筒埴 輪	10.0	14.5	外面：回転ナメ 内面：回転ナメ	外面：灰N4/ 内面：灰N4/	外面：灰N4/ 内面：灰N4/	審	
38	32	圓筒埴 輪	9.9	外面：回転ナメ 内面：回転ナメ	外面：灰N4/ 内面：灰N4/	外面：灰N4/ 内面：灰N4/	審		
38	33	圓筒埴 輪	12.8	(3.1)	外面：回転ナメ 内面：回転ナメ	外面：灰N4/ 内面：灰N4/	外面：灰N4/ 内面：灰N4/	審	
35	34	圓筒埴 輪		(1.30)	外面：回転ナメ 内面：回転ナメ	外面：灰N4/ 内面：灰N4/	外面：灰N4/ 内面：灰N4/	審	
35	35	圓筒埴 輪	7.4	(6.9)	外面：回転ナメ、底面回軋ヘラケズリ 内面：回転ナメ	外面：灰N4/ 内面：灰N4/	外面：灰N4/ 内面：灰N4/	審	
35	36	圓筒埴 輪		(3.20)	外面：回転ナメ 内面：回転ナメ	外面：灰N4/ 内面：灰N4/	外面：灰N4/ 内面：灰N4/	審	
35	37	油丸	瓦5 9.5	幅5 2.5	厚5 1.6	外面：回転ナメ 内面：回転ナメ	外面：灰N4/ 内面：灰N4/	外面：灰N4/ 内面：灰N4/	直線下の右美、 透かし
51	38	土師器 上器	11.2	7.7	(3.2)	外面：回転ナメ 内面：回転ナメ	外面：灰N4/ 内面：灰N4/	外面：灰N4/ 内面：灰N4/	直線下の右美、 透かし
51	39	土師器 下器	14.4	7.6	3.0	外面：回転ナメ 内面：回転ナメ	外面：灰N4/ 内面：灰N4/	外面：灰N4/ 内面：灰N4/	直線下の右美、 透かし
51	40	土師器 下器		(5.2)	外面：回転ナメ 内面：回転ナメ	外面：灰N4/ 内面：灰N4/	外面：灰N4/ 内面：灰N4/	直線下の右美、 透かし	
51	41	土師器 盤		(1.30)	ナメ ナメ	外面：回転ナメ 内面：ナメ	外面：灰N4/ 内面：灰N4/	直線下の右美、 透かし	
51	42	平瓦	瓦5 11.0	幅5 0.6	厚5 1.1	外面：回転ナメ 内面：回転ナメ	外面：灰N4/ 内面：灰N4/	外面：灰N4/ 内面：灰N4/	直線下の右美、 透かし
51	43	砾石	4.0	9.7	2.4	外面：回転ナメ 内面：回転ナメ	外面：灰N4/ 内面：灰N4/	外面：灰N4/ 内面：灰N4/	直線下の右美、 透かし
54	44	原陶 杯		(1.5)	外面：回転ナメ、底部1/2回軋ヘラケズリ 内面：回転ナメ	外面：灰N4/ 内面：灰N4/	外面：灰N4/ 内面：灰N4/	直線下の右美、 透かし	
54	45	原陶 盤		(3.0)	外面：回転ナメ 内面：回転ナメ	外面：灰N4/ 内面：灰N4/	外面：灰N4/ 内面：灰N4/	直線下の右美、 透かし	
54	46	土師器 灰皿		(5.3)	外面：回転ナメ 内面：回転ナメ	外面：灰N4/ 内面：灰N4/	外面：灰N4/ 内面：灰N4/	直線下の右美、 透かし	
54	47	円筒埴輪	盛大径 20.4	(7.7)	外面：回転ナメ 内面：回転ナメ	外面：灰N4/ 内面：灰N4/	外面：灰N4/ 内面：灰N4/	直線下の右美、 透かし	
51	48	土師器 上器		3.8	専用格子1印押痕 内面：ナメ	外面：灰N4/ 内面：ナメ	外面：灰N4/ 内面：ナメ	直線下の右美、 透かし	
54	49	陶器 土器	長さ 5.7	幅 2.7	厚さ 2.3	外面：ナメ	外面：ナメ	外観：オリーブ系SY5/2 内面：ナメ	
54	50	鉢	長さ 5.7	幅 2.7	厚さ 2.3	外面：ナメ	外面：ナメ	外観：オリーブ系SY5/2 内面：ナメ	

第4表 石舟池古墳群出土遺物觀察表

第IV部 総括

第1章 高松平野における片袖式横穴式石室について

今回報告した平石上2号墳は、片袖式の横穴式石室を埋葬主体部としてもつが、高松平野では両袖式の横穴式石室が多く見受けられる。そこで、高松平野における横穴式石室の規模や分布を通して、両者の違いを浮き彫りにしたい。なお、石室研究においては、平面プランのみならず立体的な構造なども対象とする必要があるが、基底部しか残っていない石室も多く、今回は紙数の都合もあり平面プランを中心に論及する。

【横穴式石室の導入期】

高松平野では、大阪府陶邑編年(山田1981)のTK43～TK217型式併行期にかけて、横穴式石室が多数築造されているが、その導入時期は讃岐西部に比べて遅れるようである。讃岐西部では、MT15型式やTK10型式併行期といった6世紀前半には横穴式石室が確実に導入されている一方、高松平野で確実なのは6世紀後葉であるTK43型式併行期の時期である。ただし、平野南東部にある丸山古墳の横穴式石室は、古い様相を呈すことから6世紀前半にまで遡る可能性(西本1996)があり、平野東部で複室構造をもっていた小山古墳(消滅)も同様である。今後、6世紀前半の横穴式石室が確認される可能性は高いが、それでも導入期の石室数を比較した場合、讃岐西部が高松平野より圧倒的に多い状況である。

【時期別に見た横穴式石室の平面プラン】

第5表は、高松平野に所在している横穴式石室のうち、石室の平面プランや規模が判明しているものを一覧表にしたものである。行政区画では主に高松市で、木田郡三木町も含めている。

石室の形態を時期別で見た場合、TK43型式併行期には両袖・片袖式とも両者が見られる。無袖式は現在のところTK217型式併行期に登場するが、TK209型式併行期には採用されている可能性がある。TK217型式併行期になると、石室の小型化が進むが、両袖・片袖式とも残っており、平野東部では無袖式が顕著に見られる。

【玄門部における比較検討】

高松平野に所在する横穴式石室の玄門部には、袖石に大型の石材を縱長に使用し、その上に擋石(まぐさしい)を載せる玄門立柱と呼ばれるものが多く、九州型の影響と解釈されている。両袖式は、袖石と擋石の間に1～2石が入るものも含めて玄門立柱がほとんどを占め、新しい時期になると平木2号墳のように玄門立柱でないものも見られる。片袖式は、袖石に大型石材を縱長に使用するが、反対の壁には立柱がないものがほとんどである。ただし、丸山古墳のように古い時期のものは袖石も小型の石材を使用しており、東赤坂古墳のように石室が比較的大型のものは玄門立柱を意識している。

【横穴式石室の規模】

第55図は、高松平野に所在している横穴式石室の玄室長と幅を、両袖・片袖式に分けてグラフ化したものである。これによると、玄室長3.8m以上、同幅2.3m以上になると両袖式のみが占め、以下だと両袖式と片袖式が混在している。このことは、床面積が9m²以上の大型石室には、片袖式が採用されず、両袖式のみを採用していることを示している。さらに論及するなら、大型石室を構築するだけの力を有する首長墓には、片袖式が採用されていないことを示している。尖端、小型の片袖式石室である野倉4号墳のように、被葬者が低位階層であると捉えることが可能な例もある(屋主2006)。ただし、床面積に起因する両袖・片袖式の採用については、大型石室が構造上の理由により両袖式を採用している可能性もあり、石室規模だけでなく墳丘や陪葬品組成も含めた総合的な検討が必要である。

【横穴式石室の分布】

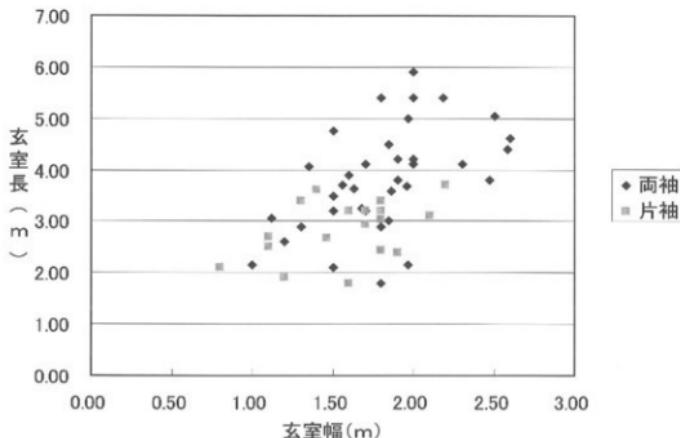
第56図は、高松平野に所在している横穴式石室を両袖・片袖・無袖式に分けて、地図上に表したものである。このうち、玄室床面積が約9m²以上のものは、大きい印としている。まず平野東部では、両袖または無袖式のみで占められ、片袖式が全く見られないことである。平野西部でもほぼ同様で、平木4号墳のみが片袖式であるが、この古墳の袖石は残っておらず石材の抜き取り穴から片袖式と推測されているだけである。平野北部の石清尾山周辺では、21基中15基が両袖式、5基が片袖式と、両袖式が約7割を占めて片袖式が混じる。ただし、片袖式5基のうち調査されたのは1基のみで、他の4基の実態は分かっていない。平野南部では、他の地域と様相が一変する。18基中13基が片袖式で、両袖式が5基となり、片袖式が約7割を占める。このように、高松平野では、平野南部においてのみ片袖式が積極的に採用されているのである。さらに、平野南部で両袖式を採用している古墳を見ると、香東川に面し川原石を石材に使用している龍満山1号墳や春日川に面した中山田3・4号墳は、大型河川に面していることから両袖式採用地域の影響が想定でき、矢野面古墳は床面積が9m²を超える大型石室である。

【まとめ】

以上の検討結果から、高松平野における片袖式の横穴式石室は、次のような評価ができる。

① 首長墓級と呼ぶにふさわしい大型の横穴式石室は、すべて両袖式であり、片袖式は採用されていない。ただし、その理由については、政治的選択がなされたのか、石室の構造力学上によるものかは明らかでない。

② 平野の地域別における分布状況を見ると、片袖式は平野南部で約7割を占め圧倒的に多い。ただし、①の原則は南部でも守られている。片袖式が多い理由については明らかでないが、平野で最古の横穴式石室を有する丸山古墳は注目できる。片袖式である丸山古墳の影響下に、平野南部で片袖式が広まった可能性があるが、現段階では推測の範囲内である。一方、平野東部では小山古墳、平野西部では山野塚古墳や古宮古墳といった古い時期の古墳で両袖式が採用されているが、6世紀前半に遡る古墳の内部構造が不明確であるため、今後の調査事例の増加が待たれる。



第55図 高松平野における主要な横穴式石室の規模グラフ



第56図 高松平野における主要な横穴式石室分布図（縮尺1/100,000）

番号	古墳名	石室	玄室 (m)			築造時期	主な副葬品	参考文献
			長さ	平均幅	面積 (m ²)			
1	久本古墳	両袖	4.60	2.60	11.96	TK209	須恵器、鏡陶、鉄鏡、鉄柶	Q
2	山下古墳	両袖	5.05	2.50	12.63	(未調査)		B
3	小山古墳	両袖	4.10	2.30	9.43	(未調査)		J
4	長尾1号墳	両袖	3.00	1.85	5.55	(未調査)		J
5	塗谷1号墳	無袖		1.00		TK217	土師器	R
6	塗谷2号墳	無袖		1.00		TK217	須恵器	R
7	塗谷3号墳	無袖		1.00		TK217	鉄釘	R
8	久米池南道跡1号	無袖		0.60		TK217	須恵器	P
9	久米池南道跡2号	無袖		0.80		TK217	須恵器	P
10	金石2号墳	両袖	3.58	1.86	6.68		(なし)	A B
11	平尾1号墳	両袖	3.69	1.96	7.23		須恵器	A B
12	満潤塚古墳	両袖	4.39	2.38	11.33	(未調査)		J
13	山古古墳	両袖	3.25	1.68	5.46	(未調査)		J
14	鳳呂谷古墳	両袖	2.90	1.80	5.22	TK217	須恵器、土師器、鉄釘	V
15	石清尾山12号墳	両袖	3.50	1.50	5.25		須恵器、金環、ガラス玉	L, N
16	石清尾山3号墳	両袖	3.21	1.50	4.82	TK209	須恵器、金環、鉄釘	L, N
17	石清尾山4号墳	両袖	5.00	1.97	9.85		須恵器、土師器	M, N
18	石清尾山5号墳	両袖	2.15	1.97	4.24	(未調査)		L, N
19	石清尾山7号墳	無袖		1.06			須恵器、刀子	L, N
20	石清尾山10号墳	右片袖	2.67	1.46	3.90	TK209	須恵器、金環、鉄製品	M, N
21	石清尾山13号墳	両袖	2.10	1.50	3.15	TK43~TK209	須恵器、刀子、鉄鎌	M, N
22	石清尾山12号墳	両袖	2.15	1.00	2.15	(未調査)		N
23	北山浦1号墳	両袖	3.90	1.60	6.24	(未調査)		J, N
24	北山浦2号墳	右片袖	1.80	1.60	2.88	(未調査)		J, N
25	奥の池2号墳	両袖	4.50	1.85	8.33	(未調査)		J, N
26	野山1号墳	右片袖	3.10	2.10	6.51	(未調査)		J, N
27	野山2号墳	左片袖	3.20	1.60	5.12	(未調査)		J, N
28	浮羅寺山1号墳	両袖	4.05	1.35	5.47	(未調査)		J, N
29	浮羅寺山4号墳	両袖		2.35		(未調査)		J, N
30	浮羅寺山10号墳	両袖	3.63	1.63	5.92	(なし)		J, N
31	浮羅寺山11号墳	片袖				(未調査)		J, N
32	浮羅寺山13号墳	両袖				(未調査)		J, N
33	南山通9号墳	両袖	4.75	1.50	7.13	TK209~TK217	須恵器、金環、ガラス玉	O
34	南山通11号墳	両袖	4.10	2.00	8.20	TK209	須恵器、土師器、銀環、馬具、鉄鎌、鉄錐	O
35	南山通13号墳	両袖	2.60	1.20	3.12	TK209	須恵器、土師器、鉄釘	O
36	伊正原古墳	両袖	3.80	1.90	7.22	(未調査)		K
37	山野塚山古墳	両袖	5.40	2.00	10.80	TK43*	(なし)	S
38	古宮古墳	両袖	5.90	2.00	11.80	TK43~TK209	須恵器、金環、ガラス玉、馬具、太刀、刀装具	S
39	鬼無人冢古墳	両袖	5.40	2.18	11.77	TK209	須恵器、土師器、馬具、鉄釘	S
40	平木1号墳	両袖	5.40	1.80	9.72	TK209~TK217	須恵器、土師器、金環、太刀、武具	S
41	平木2号墳	両袖	2.90	1.30	3.77	TK217	須恵器	S
42	平木3号墳	両袖	3.70	1.56	5.77	TK217	(なし)	S
43	平木1号墳	左片袖	3.60	1.40	5.04	TK217	須恵器、土師器	S
44	石ヶ原古墳	両袖	4.20	1.90	7.98	(未調査)		I
45	牛山1号墳	右片袖	3.20	1.80	5.76	TK209~TK217	須恵器、土師器、銀環、刀、鉄錐	AA
46	龍渕山1号墳	両袖	4.10	1.70	6.97	TK209	須恵器、銀環、ガラス玉、馬具、刀子、鉄錐	F
47	横岡山古墳	左片袖	2.90	1.80	5.22	TK209	須恵器、刀、馬具	E
48	東赤坂古墳	右片袖	3.70	2.20	8.14	(未調査)		E, H
49	浅野1・2号古墳	左片袖	3.20	1.70	5.44	TK209	須恵器、耳環、切子玉	A, G
50	万塚古墳	右片袖	2.41	1.80	4.39	TK209	須恵器、金環、ガラス玉、馬具、太刀、鉄錐	G, T
51	矢野山古墳	両袖	3.80	2.47	9.39	TK209*	須恵器	U
52	平石上2号墳	右片袖	3.03	1.80	5.45	TK209	須恵器、耳環、練下、刀子、鉄錐	不詳
53	平石上3号墳	右片袖	3.40	1.80	6.12		須恵器	Z
54	中山田1号墳	両袖	3.20	1.70	5.44		須恵器、銀環、勾玉、管玉、馬具、短刀、鉄錐	C
55	中山田4号墳	両袖	4.20	2.00	8.40		須恵器	C
56	鴨谷古墳	右片袖					須恵器、銀環、ガラス玉	C
57	丸川古墳	左片袖	2.40	1.90	4.56	(未調査)		H
58	勝負谷1号墳	両袖	1.80	1.80	3.21		須恵器	W
59	天神山1号墳	右片袖	2.70	1.10	2.97	TK43~TK209	須恵器、銀環、勾玉、管下、馬具、鉄錐	Y
60	大神山3号墳	右片袖	3.40	1.30	4.42	TK43~TK209	須恵器、金環、管下、ガラス玉、馬具、鉄錐	Y
61	西土居6号墳	左片袖	2.10	0.80	1.68		須恵器、刀子	X
62	西土居15号墳	右片袖	2.50	1.10	2.75	TK43~TK209	須恵器、ガラス玉、鉄錐、軽鍊車	X
63	野村4号墳	右片袖	1.90	1.20	2.28	TK209	須恵器、刀子、鉄錐	D
64	西蒲谷1号墳	両袖	3.06	1.12	3.43	TK209	須恵器、鉄釘	A C

第5表 高松平野における主要な横穴式石室の比較表

第2章 三谷町周辺の表採遺物について

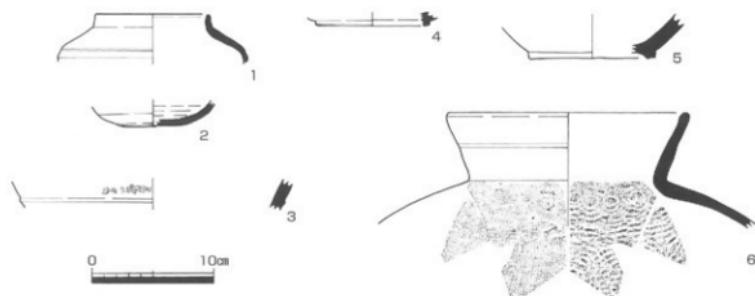
第1節 石舟池周辺の表採遺物（第57・58図）

石舟池周辺では、須恵器が表採されており、今回報告することにより、石舟池古墳群を評価する上での一助としたい。

1は石舟池南西付近で出土した須恵器短頸壺で、石舟池古墳群と同じ時期のものである。2・3は松池から出土したものであり、2は須恵器壺の底部、3はおそらく壺の口縁部で波状文が施されている。詳細な時期は不明だが、古墳時代のものと推測される。4・5は次郎池から出土したもので、4は須恵器杯の底部、5は須恵器壺の底部である。どちらも高台を貼り付けしており、平安時代のものと推測される。6は



第57図 石舟池周辺図（縮尺1/5,000）



第58図 石舟池周辺表採遺物実測図（縮尺1/4）

岡池南付近から出土したもので、須恵器甕である。真っ直ぐな口縁部が外傾してのび、体部外面には平行目の叩き痕とカキ目が、内面には同心円文の当て具痕が残されている。石舟池古墳群と同じ時期のものと推測される。

これら須恵器から推測されることは、石舟池南西付近や松池、岡池南付近において、古墳時代後期末の古墳群や集落跡が埋没している可能性である。また、次郎池では平安時代の遺跡が存在している可能性が推測できる。今後の調査によって、これら推測は明らかにされることであろう。

第2節 三谷三郎池遺跡の表探遺物（第59～63図）



第59図 三谷三郎池遺跡位置図（縮尺1/10,000）

高松市	香川県	宮本メモ
A	C	B
B	D	A
C	A	C
D	B	

第6表 三谷三郎池遺跡地区比較表

地区別に分けると、A地区から出土した7~19・26と、C地区から出土した20~24・27と、地区不明の25である。乗松氏が報告されていた資料は、おもにB地区（旧称は三郎池南遺跡）であることから、今回は内容が不明であったA・C地区的報告となる。20・21・24・27は1973年に宮本氏と安部藤夫氏により表探されたもので、25以外の残りは全て1990~91年に末光甲正氏により表探されたものである。なお、今回は図化で

三谷三郎池遺跡は、貯水量180万tを誇る大規模な溜池である三谷三郎池の池底に所在している。三谷三郎池の築造時期は不明だが、江戸時代以降、拡張や改修が繰り返されており、丘陵の谷間を利用した溜池となっている。そのため、旧地形では丘陵斜面や谷間に立地していた遺跡が水没または侵食され、池底に遺物が散布している状態となった。

地元研究者による遺物表探が断続的に行われ、一部の資料は公表されている（高木1981、松井1987、高松市1990）。特に乗松真也氏は、弥生時代中期中葉～後期初頭の土器・石器を詳細に報告するとともに、高松平野における同時期の遺跡動態に着目し、「高地性集落」がもつ意味についても一石を投じられている（高木2003）。

さて、遺物の分布は池全体に及ぶのではなく、第59図のとおり4ヶ所に分かれており、それぞれA~D地区と呼称されている。ただし、機関や研究者によって地区別の呼称が異なり、それを比較したのが第6表である。地元の研究者である宮本琢磨氏は、昭和時代後半において熱心に

多くの資料を表探されたようで、その宮本氏に関するメモが「宮本メモ」である。「香川県」とは、香川県教育委員会の遺跡台帳によるものである（高木2003）。「高松市」は、高松市教育委員会の遺跡台帳によるもので、今回報告する資料の注記から、この呼称を使用するが、将来的には変更される場合がある。

図化できた資料は、第60~63図7~27の21点である。地

区別に分けると、A地区から出土した7~19・26と、C地区から出土した20~24・27と、地区不明の25である。乗松氏が報告されていた資料は、おもにB地区（旧称は三郎池南遺跡）であることから、今回は内容が不明であったA・C地区的報告となる。20・21・24・27は1973年に宮本氏と安部藤夫氏により表探されたもので、25以外の残りは全て1990~91年に末光甲正氏により表探されたものである。なお、今回は図化で

きなかったが、宮本氏により表採された石器を写真図版20に掲載している。

【A地区】

三谷三郎池西岸の中央よりやや南に位置する。旧地形は、日妻山から北東にのびる小さな尾根の東側斜面にあたる。池辺には、初期須恵器を焼成していたことで有名な三谷三郎池西岸窯跡がある。

7～9は弥生土器である。7は壺で、上下に拡張させた口縁部に凹線を2条めぐらしている。8は高杯の脚部で、全体的に厚手で、端部をわずかに拡張させている。9は底部の破片である。7・8の特徴から弥生時代後期前半のものと考えられる。

10～16は須恵器である。10は杯蓋で、外面の稜は不明瞭である。11・12は杯で、短いかえりが付く。13は壺の可能性がある口縁部である。14は短頸壺用と推測される蓋である。15は壺の体部片である。16は壺の可能性がある口縁部で、肥厚させた端部外面に板状工具の圧痕をめぐらせている。10～12は7世紀前半(古墳時代後期)のものであり、他も近い時期のものと考えられる。

17は龍泉系の青磁碗で、外面に錦蓮丸が見られる。18は十師質土器擂鉢で、内面に擂目が残る。19は備前焼擂鉢で、内面に擂目が残る。これらは中世のものである。26は棒状の鉄製品で、用途・時期とも不明である。

【C地区】

三谷三郎池から南西へ細くのびる部分にあたる。旧地形は、馬山と日妻山の間にある谷部にあたり、A～D地区の中でもっとも範囲が広い。

20・21は土師器高杯の杯部で、扁平な半球形を呈し、20の外面には刷毛目が残る。口径は20が13.9cm、21が13.4cmを測る。22は須恵器壺の口縁部で、端部を内側に折り曲げている。23は須恵器壺の頭部～体部で、体部外面に格子目の叩き痕が残る。24は土師器壺で、底部を欠くがほぼ完形である。残された痕跡から、丸底に5個の円形透かしをもつタイプと復元できる。口縁部は聞き気味にのび、口径は23.6～24.6cmを測る。体部中位には、左右対称に上向きの取っ手が付き、その上面には刻み目が深く入っている。外面には刷毛目が施されている。27は、棒状の鉄製品で、用途・時期とも不明である。

さて、これら出土遺物のうち、土師器については時期が推測可能である。高杯は、形態や口径から、片桐孝浩氏による香川県における須恵器出現前後の土師器編年(片桐2000)でVI期(T K 23型式)に相当し、古墳時代中期後葉のものである。瓶についても、同じタイプのものがⅤ期(平成13年度原開遺跡SH207)に1点のみの出土が存在する。しかしながら、5個の円形透かしをもつ瓶は、東予(愛媛県)における土師器編年(片桐2000)では、前期末または中期初頭(T K 216～208型式)に相当する。ここでは、地域性や全体を通して見て、C地区から出土した土師器は、古墳時代中期後葉のものとしておきたい。

出土地区不明の25は、ほぼ完形の弥生土器壺で、口径15cm、器高18.8cmを測るやや小型のものである。強く「く」の字形に屈曲する頭部から、口縁部はそのまま大きく開いている。球形の体部最大径は上位にあり、底部は上げ底となっている。体部外面には縱方向の刷毛目、内面には縦または斜め方向のヘラケズりが施されている。さらに口縁部内面にも、横方向の刷毛目が見られる。弥生時代後期前半(第62000)のものと考えられる。

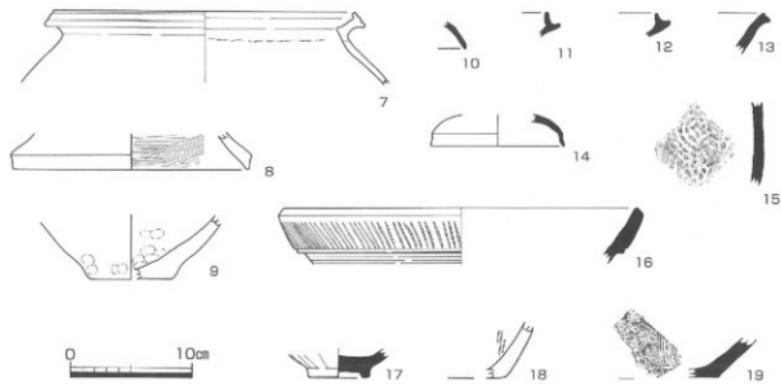
【石器】

写真図版20の28～58がC地区出土の石鎚、59～66がB地区(宮本氏のA地区)出土の石鎚、石錐、打製石庖丁である。28～40が平基無茎に、41が円基無茎に、42～58が凹基無茎に、59～62が凸基有茎に分類できる石鎚である。63～65は石錐で、66は打製石庖丁である。どれもサヌカイト製である。

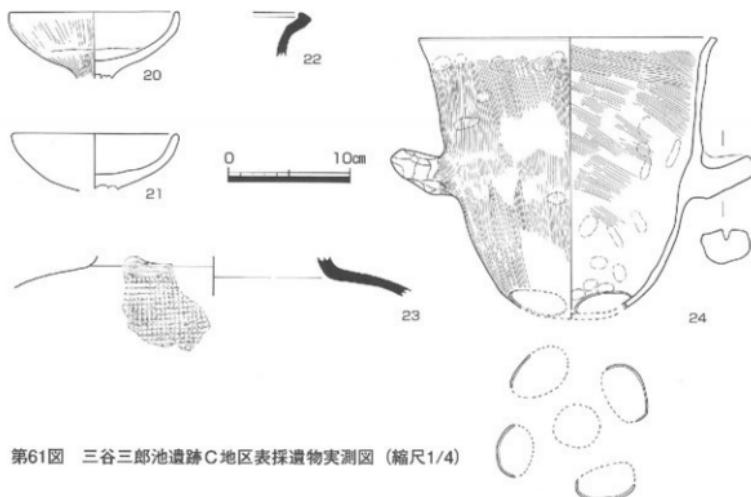
【まとめ】

A地区出土の7世紀前半に属する須恵器については、昭和58年に実施された三谷三郎池西岸窯跡の発掘調査ともほぼ整合する。この調査では、初期須恵器窯である西岸窯跡の窯本体前庭部付近を横断する形で溝が掘られており、その底から7世紀代の須恵器壺がほぼ1個体分出土している。おそらくA地区には、7世紀の集落等が存在していた可能性が指摘できる。

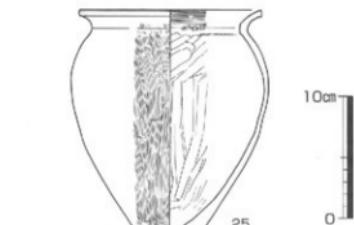
C地区出土の古墳時代中期後葉の土師器については、中期前半頃と推定される三谷三郎池西岸窯跡との関係が注目できる。西岸窯跡より後出するが、中期～後期前半の遺跡数が少ない高松平野において、三谷地域で継続的に人の活動が認められる事例である。



第60図 三谷三郎池遺跡A地区表探遺物実測図 (縮尺1/4)



第61図 三谷三郎池遺跡C地区表探遺物実測図 (縮尺1/4)



第62図 三谷三郎池遺跡表探遺物実測図 (縮尺1/4)



第63図 三谷三郎池遺跡A・C地区表探
鉄製品実測図 (縮尺1/2)

参考文献（五十音順）

片桐孝浩2002「須恵器出現前後の土師器について」

『四国横断自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告 第43冊 煙窓遺跡』香川県教育委員会ほか
國木健司1995「香川の横穴式石室」「四国における横穴式石室の成立と展開」古代学協会四国支部第9回大会資料
柴田昌見2005「古墳時代中期の土器様相に関する予察」

『久枝遺跡・久枝II遺跡・本郷I遺跡』財團法人愛媛県埋蔵文化財センター

高松市歴史資料館1996「高松市歴史資料館収蔵資料目録～考古資料～」

田辺昭三1981「須恵器大成」角川書店

信里芳紀2006「野倉4号墳」香川県教育委員会

乗松真也2005「三谷三郎池遺跡出土の弥生時代資料」「香川県歴史博物館調査研究報告」第1号

乗松真也2006「高松平野における弥生時代後期の土器編年」「香川県歴史博物館調査研究報告」第2号

松木敏三1984「香川県」「埋蔵文化財研究会第16回研究集会資料」

松木豈胤1987「弥生時代・土器」香川県史 第13巻 資料編 考古』香川県

横穴式石室出典文献（五十音順）

A.井上勝之・中原耕男1973「香川町浅野八王子古墳調査報告」「文化財保護協会報」第58号 香川県文化財保護協会

B.香川県教育委員会1980「高松市・山下古墳調査報告」

C.香川県教育委員会1983「新編香川叢書 考古篇」

D.香川県教育委員会2006「野倉4号墳」

E.香川町史編集委員会1970「香川町史」

F.香川町教育委員会2003「龍満山古墳群～1号墳～」

G.香川町教育委員会2005「舟岡古墳」

H.國木健司1995「香川の横穴式石室」「四国における横穴式石室の成立と展開」古代学協会四国支部

I.国分寺町文化財保護委員会1980「国分寺町の文化財」

J.小竹一郎「高松市文化財(史跡)分布調査報告書」

K.下笠居村史編集委員会1956「下笠居村史」

L.高松市教育委員会1971「高松市石清尾山古墳群緊急発掘調査概報(第1次)」

M.高松市教育委員会1972「高松市石清尾山古墳群緊急発掘調査概報(第2次)」

N.高松市教育委員会1973「石清尾山塊古墳群調査報告」

O.高松市教育委員会1985「南山浦古墳群調査報告書」

P.高松市教育委員会1989「久米池南遺跡発掘調査報告書」

Q.高松市教育委員会2004「久本古墳」

R.高松市教育委員会2004「藤谷古墳群」

S.高松市教育委員会2005「押高古墳群・押高池北西古墳-」

T.中原耕男1971「方塚古墳発掘調査報告」「文化財保護協会報」特別号10 香川県文化財保護協会

U.浜田重人1997「高松市三谷町矢野面古墳測量報告」「香川考古」第6号 香川考古刊行会

V.風呂谷古墳発掘調査団1993「風呂谷古墳発掘調査報告書」

W.埋蔵文化財発掘調査團1974「香川県木田郡三木町岳山周辺における埋蔵文化財調査報告書」

X.三木町教育委員会2003「西土居遺跡群」

Y.三木町教育委員会2001「天神山古墳群」

Z.山本英之2000「平石上3号墳」「香川県埋蔵文化財調査年報 平成10年度」香川県教育委員会

A.A.香川県教育委員会1995「四国横断自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告 第18冊 国分寺楠井遺跡」

A.B.高松市教育委員会2007「高松市内遺跡発掘調査概報 -平成18年度国庫補助事業-」

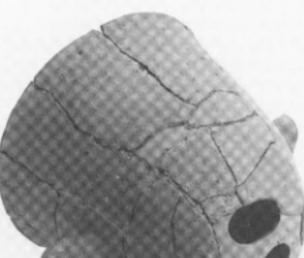
A.C.香川県教育委員会2007「高松東道路建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告 第11冊 西浦谷遺跡」

被認 名	被認 名	法規 (cm)			調査	色調	地 上	備 考
		口径	底径	高さ				
58 1	須底春 冠乳管	9.2	(4.1)	外面: 刺輪ナデ 内面: 刺輪ナデ	外面: 黒5Y6/1 内面: 黒5Y6/1	黒		
58 2	須底管		(2.2)	外面: 刺輪ナデ 内面: 刺輪ナデ	外面: 黒5Y6/1 内面: 黒5Y6/1	黒		
58 3	須底管		(2.5)	外面: 刺輪ナデ 内面: 刺輪ナデ	外面: 黒5Y6/1 内面: 黒5Y6/1	黒		
58 4	須底管 环	8.4	(1.1)	外面: 刺輪ナデ 内面: 刺輪ナデ	外面: 黒5Y6/1 内面: 黒5Y6/1	黒		
58 5	須底管		(10.2)	外面: 刺輪ナデ 内面: 刺輪ナデ	外面: 黒5Y6/1 内面: オリーブ5G5Y6/1	黒		
58 6	須底管 茎	19.6	(9.3)	外面: 刺輪ナデ 平行刃の半球底、カキ目 内面: 刺輪ナデ 深心円文の点て馬糞	外面: 黒5Y6/1 内面: 黒5Y6/1	黒		
60 7	须毛王 茎	12.4	(5.9)	外面: 刺輪ナデ 内面: 刺輪ナデ	外面: 黒5Y6/1 内面: 黒5Y6/1	黒	頭部: 計付突起 1 条、波状紋	
60 8	须毛王 茎 高杯	19.1	(3.1)	外面: 刺輪ナデ 内面: 刺輪ナデ	外面: 黒5Y6/1 内面: 黒5Y6/1	黒		
60 9	须毛王 茎 底	6.6	(5.3)	外面: 刺輪ナデ 内面: 刺輪ナデ	外面: 黒5Y6/1 内面: 黒5Y6/1	黒		
60 10	须毛王 茎 环		(2.2)	外面: 刺輪ナデ 内面: 刺輪ナデ	外面: 黒5Y6/1 内面: 黒5Y6/1	黒		
60 11	须毛王 茎 环		(2.0)	外面: 刺輪ナデ 内面: 刺輪ナデ	外面: 黒5Y6/1 内面: 黒5Y6/1	黒		
60 12	须毛王 茎 环		(2.1)	外面: 刺輪ナデ 内面: 刺輪ナデ	外面: 黒5Y6/1 内面: 黒5Y6/1	黒		
60 13	须毛王 茎 环		(3.4)	外面: 刺輪ナデ 内面: 刺輪ナデ	外面: 黒5Y6/1 内面: 黒5Y6/1	黒		
60 14	须毛王 茎 环	11.0	(2.6)	外面: 刺輪ナデ 内面: 刺輪ナデ	外面: 黒5Y6/1 内面: 黒5Y6/1	黒		
60 15	须毛王 茎 环		(6.7)	外面: 刺輪ナデ 内面: 刺輪ナデ	外面: 黒5Y6/1 内面: 黒5Y6/1	黒		
60 16	须毛王 茎	31.2	(4.6)	外面: 刺輪ナデ 内面: 刺輪ナデ	外面: 黒5Y6/1 内面: 黒5Y6/1	黒	口端部: 混生文、沈綴 1 条	
60 17	新葉或葉青迹 茎	39	(2.4)	外面: 刺輪ナデ、鯛歯	外面: 黒5Y6/1 内面: 黒5Y6/1	黒		
60 18	新葉或葉青迹 茎 环		(4.5)	外面: 刺輪ナデ 内面: 刺輪ナデ	外面: 黒5Y6/1 内面: 黒5Y6/1	黒	口端部: 混生文、沈綴 1 条	
60 19	新葉或葉青迹 茎 环		(3.2)	外面: 刺輪ナデ 内面: 刺輪ナデ	外面: 黒5Y6/1 内面: 黒5Y6/1	黒		
61 20	土坪莎 茎	13.9	(5.5)	外面: 刺輪ナデ ハミガキ、後合裏	外面: 黒5Y6/1 内面: 黒5Y6/1	黒		
61 21	土坪莎 茎	13.4	(4.6)	外面: 刺輪ナデ 内面: 刺輪ナデ	外面: 黒5Y6/1 内面: 黒5Y6/1	黒		
61 22	土坪莎 茎 环		(3.6)	外面: 刺輪ナデ 内面: 刺輪ナデ	外面: 黒5Y6/1 内面: 黒5Y6/1	黒		
61 23	土坪莎 茎 环		(3.2)	外面: 刺輪ナデ、桔子目字有	外面: 黒5Y6/1 内面: 黒5Y6/1	黒		
61 24	土坪莎 茎 环		(2.1)	外面: 刺輪ナデ	外面: 黒5Y6/1 内面: 黒5Y6/1	黒		
61 25	土坪莎 茎 环	21.6	(2.1)	外面: 頭方側のハケ目、舌承孔痕 内面: 頭方側のハケ目、舌承孔痕	外面: 黒5Y6/1 内面: 黒5Y6/1	黒	底部に達し 4 次の一部が残る	
62 25	须毛王 茎 环	15.0	47	外面: 刺輪ナデ、範方側のハケ目 内面: ニコナデ、範方側のハケ目	外面: 黒5Y6/1 内面: 黒5Y6/1	黒		
63 26	铁製品	海	厚 5 長 13	外面: 刺輪ナデ 内面: 刺輪ナデ	外面: 黒5Y6/1 内面: 黒5Y6/1	黒		
63 27	铁製品		0.5	外面: 刺輪ナデ	外面: 黒5Y6/1 内面: 黒5Y6/1	黒		

第7表 石舟池周辺および三谷三郎池遺跡 表探遺物観察表

被認 名番号	被認 名番号	法規 (cm)			石材	石頭類	備 考
		長さ (cm)	幅 幅 (cm)	厚さ (cm)			
20 28	石頭	3.4	2.0	0.7	4.4	サスカイト 平面無	未認定
20 29	石頭	2.7	2.3	0.5	3.2	サスカイト 平面無	未認定
20 30	石頭	2.8	2.1	0.5	3.0	サスカイト 平面無	未認定
20 31	石頭	2.9	2.1	0.5	3.0	サスカイト 平面無	未認定
20 32	石頭	1.7	1.6	0.4	2.9	サスカイト 平基無	未認定
20 33	石頭	2.2	1.7	0.4	3.2	サスカイト 平基無	未認定
20 34	石頭	1.8	1.6	0.3	0.8	サスカイト 平基無	未認定
20 35	石頭	(1.9)	1.3	0.3	0.8	サスカイト 平基無	未認定
20 36	石頭	2.0	1.1	0.5	3.1	サスカイト 平基無	未認定
20 37	石頭	1.4	(1.0)	0.3	0.6	サスカイト 平基無	未認定
20 38	石頭	2.1	1.5	0.3	1.2	サスカイト 平基無	未認定
20 39	石頭	2.0	1.6	0.3	1.2	サスカイト 平基無	未認定
20 40	石頭	1.5	1.2	0.2	0.5	サスカイト 平基無	未認定
20 41	石頭	2.9	1.0	0.5	1.3	サスカイト 平基無	未認定
20 42	石頭	1.7	1.6	0.4	0.9	サスカイト 平基無	未認定
20 43	石頭	(2.0)	1.6	0.4	1.4	サスカイト 平基無	未認定
20 44	石頭	2.3	1.4	0.3	1.0	サスカイト 平基無	未認定
20 45	石頭	1.5	1.2	0.3	0.6	サスカイト 平基無	未認定
20 46	石頭	2.2	1.7	0.4	1.5	サスカイト 平基無	未認定
20 47	石頭	2.2	1.6	0.3	0.7	サスカイト 平基無	未認定
20 48	石頭	2.8	(0.6)	0.5	0.9	サスカイト 平基無	未認定
20 49	石頭	2.5	(0.6)	0.3	0.7	サスカイト 平基無	未認定
20 50	石頭	2.0	1.5	0.2	0.6	サスカイト 平基無	未認定
20 51	石頭	1.7	(1.1)	0.2	0.3	サスカイト 平基無	未認定
20 52	石頭	(1.8)	(1.3)	0.3	0.6	サスカイト 平基無	未認定
20 53	石頭	(1.5)	(1.3)	0.3	0.4	サスカイト 平基無	未認定
20 54	石頭	(1.7)	1.5	0.3	0.6	サスカイト 平基無	未認定
20 55	石頭	(1.4)	1.2	0.3	0.6	サスカイト 平基無	未認定
20 56	石頭	(1.3)	1.2	0.3	0.4	サスカイト 平基無	未認定
20 57	石頭	2.4	1.4	0.3	1.0	サスカイト 平基無	未認定
20 58	石頭	2.3	0.11	0.4	0.7	サスカイト 平基無	未認定
20 59	石頭	(3.1)	1.7	0.4	1.7	サスカイト 平基無	未認定
20 60	石頭	(3.2)	1.4	0.4	1.6	サスカイト 平基無	未認定
20 61	石頭	(2.7)	1.6	0.3	1.8	サスカイト 平基無	未認定
20 62	石頭	(2.8)	1.5	0.3	1.6	サスカイト 平基無	未認定
20 63	石頭	(3.2)	1.7	0.5	3.2	サスカイト 平基無	未認定
20 64	石頭	(2.8)	1.4	0.3	1.9	サスカイト 平基無	未認定
20 65	石頭	(2.8)	1.4	0.3	1.9	サスカイト 平基無	未認定
20 66	打孔石塊	4.0	(9.6)	1.1	6.00	サスカイト	

第8表 石舟池周辺および三谷三郎池遺跡 表探石製品観察表



第61図24



1 横穴式石室全景（前面から）



5 横穴式石室奥壁



2 横穴式石室（羨道から）



6 横穴式石室右側壁（玄室奥壁側）



3 横穴式石室（奥壁から）



7 横穴式石室右側壁（玄室玄門側）



4 横穴式石室羨道（玄門から）



8 横穴式石室右側壁（羨道）



1 横穴式石室左側壁（玄室奥壁側）



5 横穴式石室玄室右奥隅



2 横穴式石室左側壁（玄室玄門側）



6 横穴式石室玄室左奥隅



3 横穴式石室左側壁（羨道玄門側）



7 横穴式石室玄室右手前隅



4 横穴式石室左側壁（羨道羨門側）



8 横穴式石室玄室左手前隅



1 横穴式石室仕切石（羨道から）



5 玄室第1面床面（玄門側、奥壁から）



2 横穴式石室羨道（左側壁から）



6 玄室第1面床面（奥壁側、奥壁から）



3 墳丘断ち割り状況（玄室右側壁から）



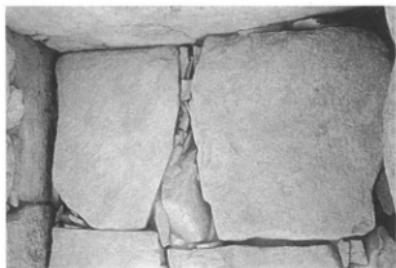
7 玄室第1面床面（奥壁側、玄門から）



4 横穴式石室と風景（北から南を望む）



8 玄室第1面床面（玄門側、玄門から）



1 玄室第2面床面（奥壁側、上から）



5 玄室第3面床面（玄門から）



2 玄室第2面床面（中央奥壁側、上から）



6 玄室第3面床面（奥壁から）



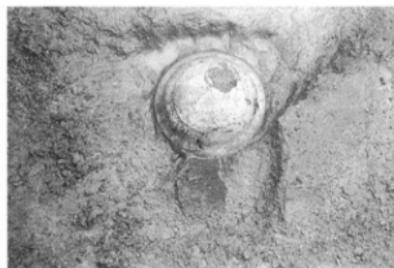
3 玄室第2面床面（中央玄門側、上から）



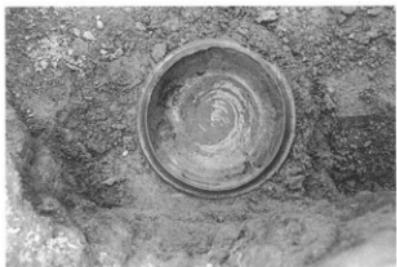
7 玄室遺物出土状況（第12図1）



4 玄室第2面床面（玄門側、上から）



8 玄室遺物出土状況（第12図3）



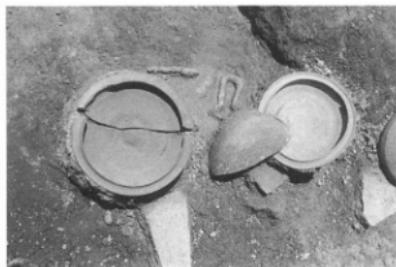
1 玄室遺物出土状況（第12図5）



5 羨道遺物出土状況（第13図73・76）



2 玄室遺物出土状況（第12図7）



6 羨道遺物出土状況（第13図59・70・71・95・100）



3 羨道遺物出土状況（玄門側、左側壁から）



7 羨道遺物出土状況（玄門側、中央から）



4 羨道遺物出土状況（第13図74・75）



8 羨道下層遺物出土状況（玄門側、玄門から）



1 羨道下層遺物出土状況（玄門側、左側壁から）



5 羨道排水溝埋土堆積状況（羨門から）



2 羨道遺物出土状況（第13図67～69・80）



6 平石上4号塚全景（西から）



3 玄室埋土堆積状況（奥壁から）



7 平石上4号塚断面（南西から）



4 羨道埋土堆積状況（玄門から）



8 平石上4号塚断面（北東から）



1



2



3



4



5



6



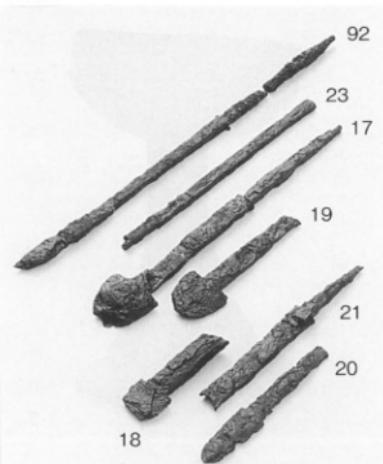
7



9



11





67



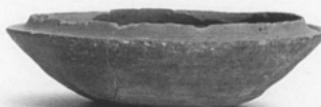
73



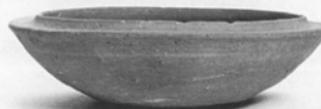
68



74



69



70



71



75



76



85



78



86



87



80



88



83



98

101

99

100

102



1 1号石棺全景（南東から）



5 1号墳検出状況近景（西から）



2 1号石棺近景（南東から）



6 1号墳南側周溝断面（西から）



3 1号石棺と三谷石舟古墳（東から）



7 1号墳填丘断面（西から）



4 1号墳検出状況全景（南西から）



8 1号墳北側周溝断面（北西から）



1 2・3・5~10号墳遠景（南東から）



5 2号墳石室第2回床面検出状況（南西から）



2 2・5・6号墳全景（南西から）



6 2号墳石室第2回床面検出状況（北西から）



3 2号墳石室第1回床面検出状況（北西から）



7 2号墳石室第2回床面検出状況（北東から）



4 2号墳石室須恵器提瓶出土状況（南西から）



8 2号墳石室第2回床面検出状況（南東から）



1 2号墳石室奥壁（南西から）



5 2号墳石室第3回床面検出状況（北東から）



2 2号墳石室右側壁（南東から）



6 2号墳石室第3回床面検出状況（南西から）



3 2号墳石室鉄鎌出土状況（南西から）



7 3号墳石室遺物出土状況（東から）



4 2号墳石室第3回床面検出状況（北西から）



8 3号墳石室須恵器提瓶出土状況（南東から）



1 3号墳石室全景（西から）



5 4号墳検出状況（北西から）



2 3号墳石室全景（北から）



6 4号墳検出状況（北東から）



3 3号墳石室全景（東から）



7 4号墳検出状況（南から）



4 3号墳石室全景（南から）



8 4号墳検出状況（南西から）



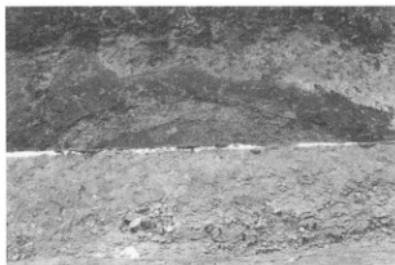
1 5号墳石室検出状況（南から）



5 6号墳検出状況（南東から）



2 5号墳石室検出状況（北から）



6 6号墳検出状況（北から）



3 5号墳石室と6号墳断面（南から）



7 6号墳周溝完掘状況（南東から）



4 5号墳石室奥壁（南から）



8 6号墳周溝完掘状況（南西から）



1 11号墳全景（西から）



5 11号墳断面（西側、南から）



2 11号墳全景（北から）



6 11号墳断面（東側、南から）



3 11号墳全景（東から）



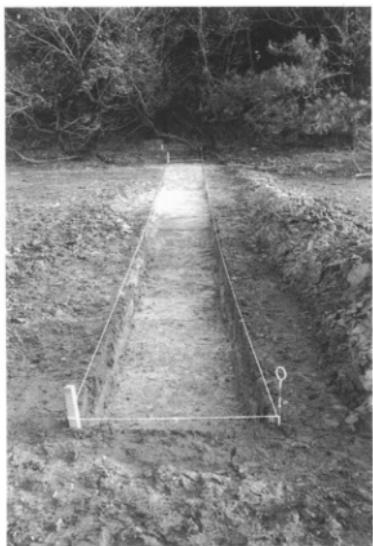
7 桶管付近調査状況（東から）



4 11号墳全景（南から）



8 桶管付近集石全景（西から）



1 第1トレンチ全景（北東から）



3 第3トレンチ調査前（南東から）



2 第2トレンチ全景（北西から）



4 第3トレンチ全景（北西から）



1



5



7



8



10

11



9



12



13



15



16



14



22



17



18



19



31



23



25



32



27



35



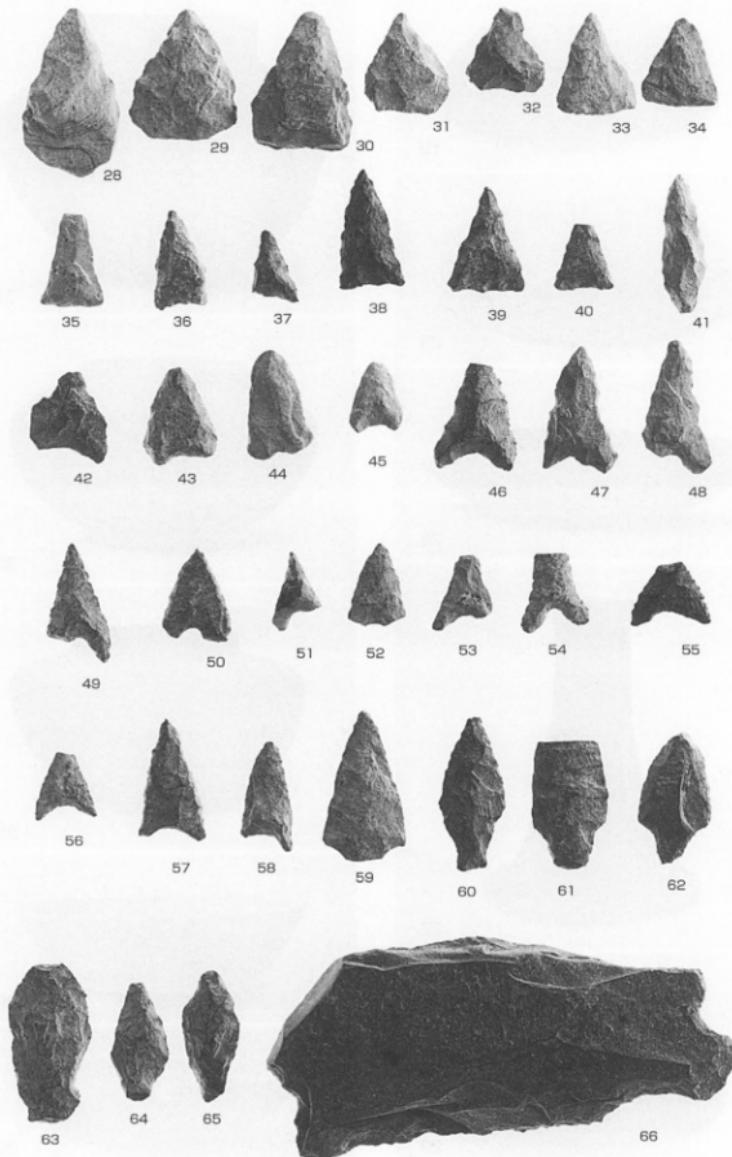
29



38



39



報告書抄録

ふりがな 書名	ひらいしかみにごうふん いしふねいけこふんぐん 平石上2号墳 石舟池古墳群							
シリーズ名	高松市埋蔵文化財調査報告							
シリーズNo.	第106集							
編著者名	川畑 晴、末光甲正、西澤昌平							
編集機関	高松市教育委員会							
所在地	〒760-8571 香川県高松市番町一丁目8番15号 Tel 087(839)2636							
発行年月日	平成19年8月31日							
より詳しい 所取遺跡名	しょぎいち 所在地	コード 市町村	北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因	
平石上2号墳	高松市 三谷町 2099番地 ほか	37201		34° 16' 24"	134° 04' 03"	1986.5.19～ 1986.6.10	150m ²	区画整理 事業
						1986.6.20～ 1986.8.8	155m ²	
石舟池古墳群	高松市 三谷町 2708番地	37201		34° 16' 12"	134° 04' 33"	1989.11.14～ 1989.12.6	10m ²	ため池等 整備事業
						1991.1.5～ 1991.1.31	100m ²	
						1991.11.6～ 1991.12.18	220m ²	
						1992.11.5～ 1992.12.4	150m ²	
所取遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項			
平石上2号墳	古墳	古墳時代後期	横穴式石室	須恵器、土師器、馬具、鉄鍼、刀子、練瓦				
石舟池古墳群	古墳	古墳時代中期？	箱式石棺					
		古墳時代後期	墳丘、周溝、横穴式石室	須恵器、管玉、ガラス玉、鉄鍼、鍬先、埴輪	堤防築堤にあたって、古墳が群集していた丘陵を利用していたことが判明			
	生産	中世	石列	土師質土器				



石舟池1号墳調査風景



石舟池3号墳調査風景

高松市埋蔵文化財調査報告 第106集

ひらいしかみ に ごうふん
平石上2号墳

いしふねいけ こ ふんぐん
石舟池古墳群

平成19年8月31日

編集・発行 高松市教育委員会

印 刷 若葉プリント